

星溪園建物調査概要報告書

This is a detailed architectural floor plan of a traditional Chinese building complex, oriented diagonally. The plan features a central courtyard with a circular element, possibly a well or a decorative pond. The building is composed of several interconnected rooms and corridors, with labels in Chinese characters indicating their functions. Key labels include '正堂' (Main Hall) at the top, '厢房' (Side Rooms) along the sides, and '厨房' (Kitchen) at the bottom. The drawing uses fine lines to represent walls, doors, and furniture, with a circular feature in the center of the courtyard. The overall layout suggests a formal residence or a public building from a historical period.

星溪園建物調査委員会

目 次

I. 沿 革	P 2
II. 概 要	P 4
III. 調査書作成の大要	P 5
IV. 調査概要	P 6
V. 建物別調査報告	P 8
1. 星 溪 寮	P 9
2. 松 風 庵	P 14
3. 積 翠 閣	P 18
4. ま と め	P 22
VI. 聞きとり調査報告	P 24
VII. 図 面	
VIII. 写 真	

I . 沿 革

熊谷宿にて、代々本陣をつとめる竹井家14代当主竹井澹如は慶応年間から明治初年にかけて、竹町に別邸を設けた。

この地は元和9年（1623年）荒川の洪水により、当園の西方にあった堤が決潰して池をつくり、清らかな水が湧き出るようになったので「玉の池」と称した。

澹如は「玉の池」を中心に珍木、奇木を植え、名石を布置し、回遊式庭園として整備した。

この庭園を当時、池亭（ちてい）と称し、昭和5年までの間に、星溪寮、松風庵、此君亭、茶室、積翠閣の主な建物が池を中心に建てられた。

この間、明治17年には、昭憲皇太后がお立寄になり、又、大正10年には、秩父宮が御宿泊になられたのをはじめ、知名人の来遊が多かった。

澹如の趣味は極めて広く、漢詩、俳諧、茶道、書画などに通じ文人墨客に園を開放していた。又、澹如は明治12年初代埼玉県会議長に挙げられ、ついで政府の要職をすすめられたが固辞して郷土にあり、もっぱら熊谷地方の開発に尽力された。

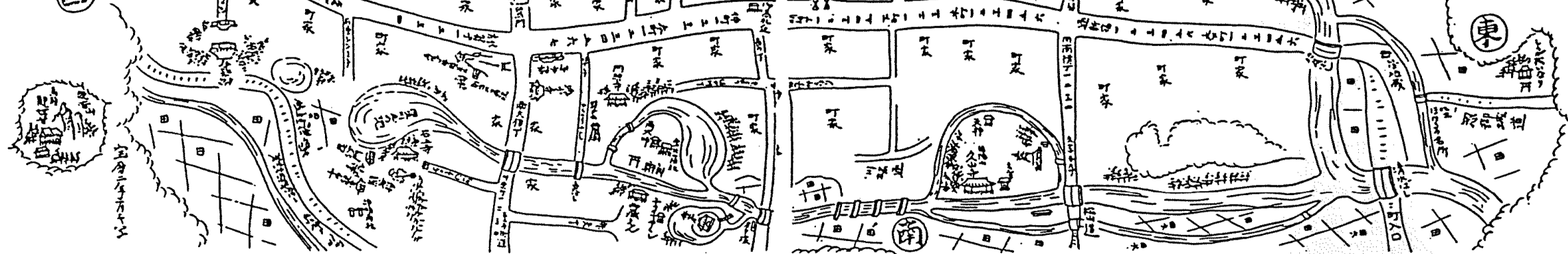
澹如没後（明治45年）、積翠閣（昭和5年）が建てられた以外は園内の主たる造改築は行なっていないと聞きおよぶ。

しかし、昭和20年8月の熊谷空襲により、園内でもっともよいといわれた此君亭と京都より移築されたといわれていた茶室が焼失した。

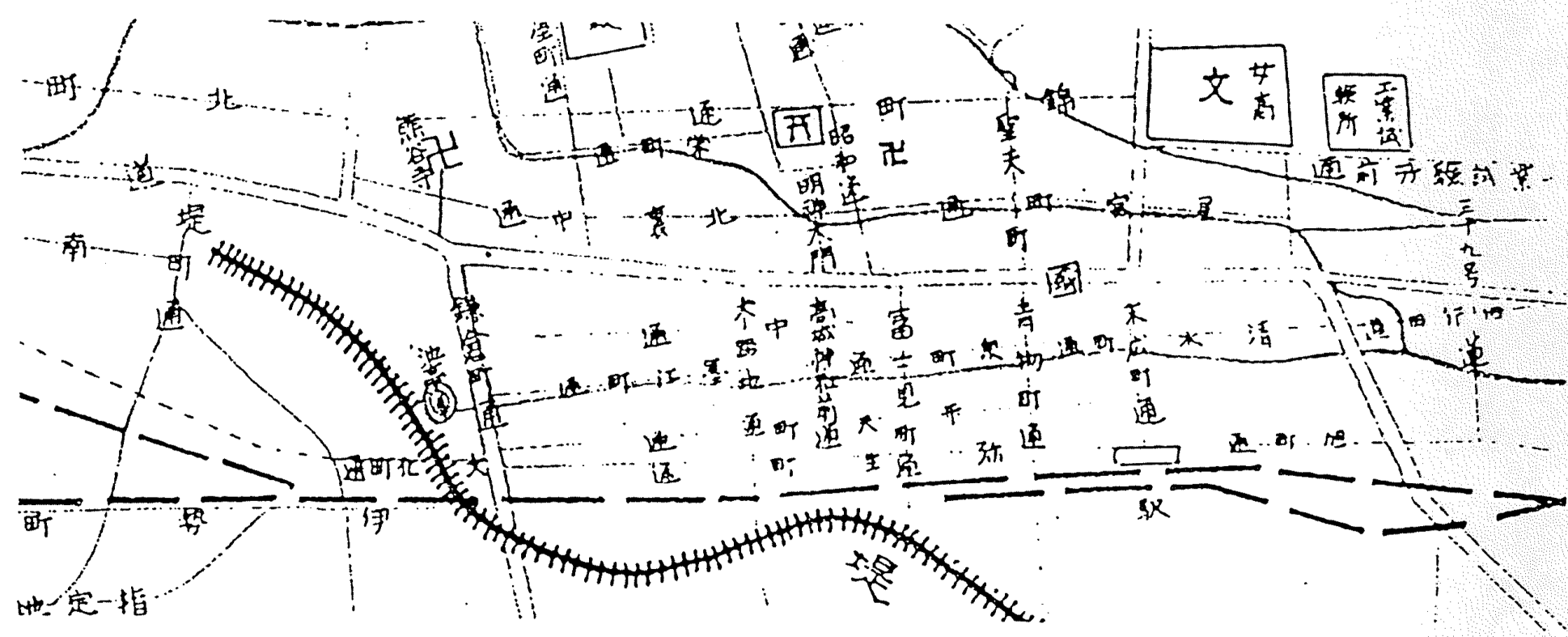
その後、昭和25年に16代当主 故 竹井邦彦氏より熊谷市に引き継がれ、昭和29年に市の名勝として、文化財に指定された。

星溪園から流れ出る水は、星川の源となり、街の南部を東に直流すること 2.5km、両岸の柳が美観をそえて、市民に親しまれる星川通りを流れ、やがて忍川となり、佐谷田、平戸地区を経て行田市に入り、更に東流して、元荒川に注いでいる。

また近年、地下水の枯渇により、湧出はとだえられ現在では荒川上流より用水を「玉の池」に引きこみ、なんとか園の景観が保たれ以来、池の浚渫、土止め工事、樹木の剪定など暫次、園内の保全と整備が続けられ、今日に至っている。



熊谷町地図 昭和のはじめごろ



熊谷市地図 現在



II . 概 要

1. 市指定文化財 星 溪 園
2. 指 定 年 月 日 昭和29年11月3日
3. 所 在 地 熊谷市鎌倉町32番地
4. 管 理 者 熊 谷 市
5. 規 模

(1) 土 地

総 面 積 3,241m²

池の面積 1,020m²

(2) 建 物

木造瓦葺き平家建 3 棟

延床面積 203.70m² (61.63坪)

星 溪 寮

床 面 積 103.74m² (31.38坪)

松 風 庵

床 面 積 42.62m² (12.91坪)

積 翠 閣 (高床式)

床 面 積 57.34m² (17.34坪)

III . 調査書作成の概要

今回、この調査は星溪園内にある、竹井氏より引き継がれた建物の老朽化が進み、その対応を考えざるをえなくなった為、市文化財としての建物を調査することを目的とする。

星溪園建物調査にあたって、園内に現存する建物及び不運にも焼失してしまった2つの建物と正門を含めて、それらが園内に建っていた当時（昭和5年、積翠閣完成）の調査が望ましい。しかし、当時の資料はほとんど残っておらず、不明確な部分が多いため、現存する建物に限って調査を行なった。

現存する3つの建物の中で最初に建てられた星溪寮は当時の使われ方と明らかに違った使われ方をしている部分があるが、その部分は建物の主要部でなく西側部分のみと見うけられる。他の松風庵、積翠閣の建物は創建当時より大きな変更はない様に見うけられる。以上の事より、星溪園として当初の創建の精神に適うものと判断し、今回の調査は現存する3つの建物（星溪寮、松風庵、積翠閣）の実測を行ない、写真・図面にてありのままを記録することを主に考えた。

IV . 調査概要

1. 調査期間 自 昭和62年11月1日
 至 昭和63年2月15日
2. 調査建物 市文化財 星溪園の建物
 (星溪寮 松風庵 積翠閣)
3. 調査結果 ・ 実測調査は図面にて記載

 ・ 現況調査は建物別調査報告及び写真にて記載

 ・ 聞きとり調査は、聞きとり調査報告に記載

 ・ 調査作業記録は作業記録報告書として別紙に
 て記載
4. 実測図作成要項

実測図作成にあたっては次の要項にしたがって作図した。

- (1) 寸法は全てメートル法に換算して記入、端数はそのつど調整して作図した。
- (2) 柱間実測により、公称寸法を割り出し、1間を柱芯で6尺(1,820 M/M)を基準とした。
- (3) 内法材及び造作材に付いては実測値にある程度の割増を与えている。その他、縁材・根太材、受材等には、多少のバラツキがあったが、建物ごとに共通寸法を決めて統一した。

5. 調査関係者

今回の調査は星溪園建物調査委員会を新たに組織し、現地建物調査と平行して、園内の鳥類生息調査（別紙記載）、庭園概要調査（別紙記載）と建物周辺の樹木調査を行なう。又、この調査に助言及び御協力をいただいた方、文献資料の提供を申し出て下さった方々の協力により、調査概要書が作成出来ました事をつけくわえさせていただきます。

調査委員会

委員長	大島 健次（建築士会会員）
副委員長	今井 克男（ 〃 ）
〃	塩原 良男（ 〃 ）
〃	島野 孝雄（ 〃 ）
〃	田原 金次（ 〃 ）
	岡部 洋一（ 〃 ）
	江利川正一（ 〃 ）
	唐崎 哲志（ 〃 ）
	横田 博（ 〃 ）
	加賀 慶樹（ 〃 ）
	白根 忠紀（ 〃 ）
	神田 善明（ 〃 ）以上12名
相談役	柴山 諄一（埼玉建築士会副会長）
	神田 善夫（ 同 大里支部長）

調査協力者

（財）県野鳥の会熊谷支部	浜島 義雄
〃	大久保茂徳
熊谷市造園業協力会	栗原 安雄
〃	宮下 良夫

V. 建物別調査報告

1. 星 溪 園

2. 松 風 庵

3. 積 翠 閣

4. ま と め

報告内容

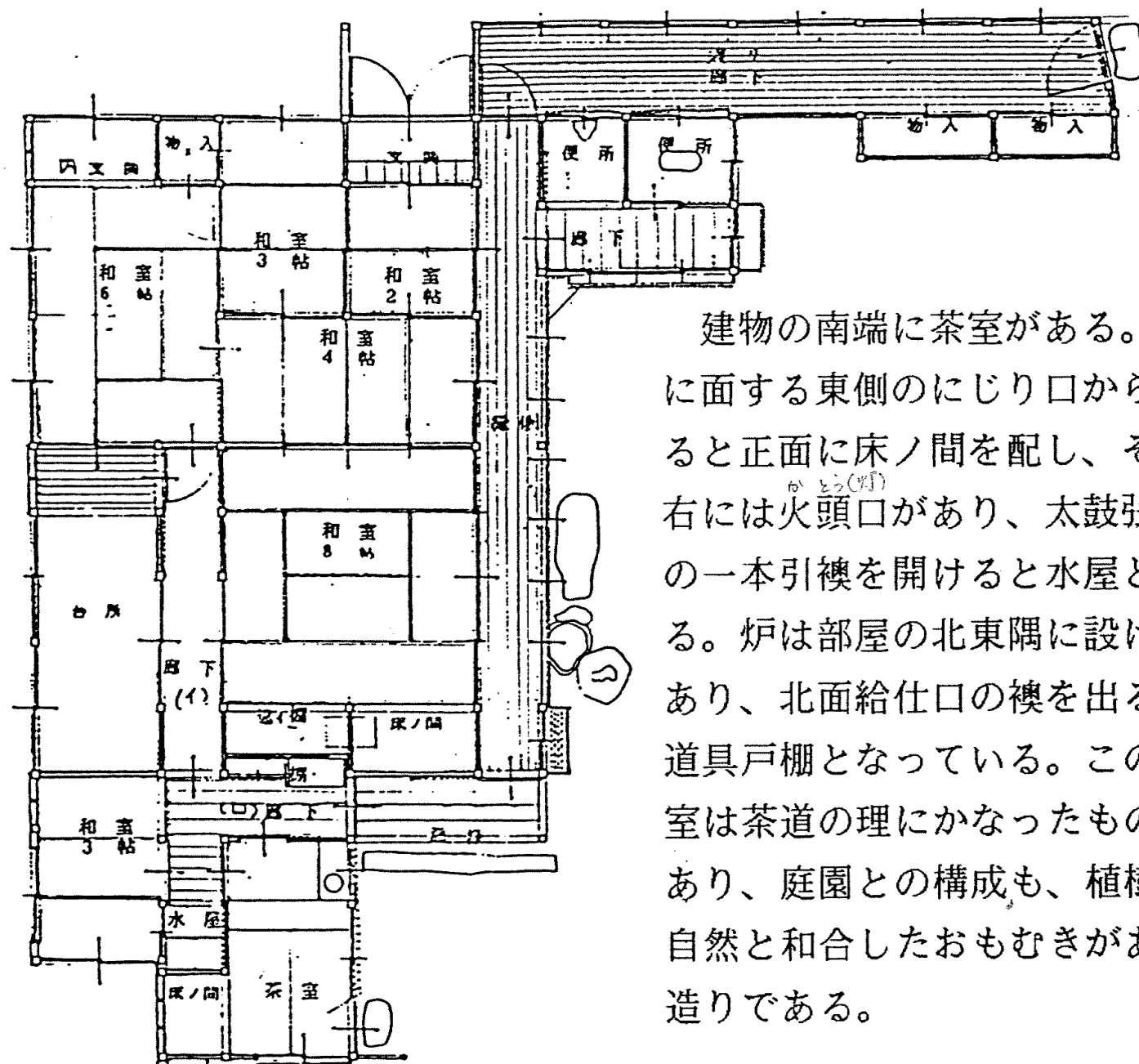
- (1) 平面意匠
- (2) 外部意匠
- (3) 構造説明
- (4) 破損、改修等

1. 星 溪 寮

(1) 平面意匠

玄関の式台を上り、障子を開けると、2帖の玄関寄付がある。この部屋は、四方障子に囲まれており、右手は和室3帖、左手は縁側である。正面の障子より入ると、和室4帖の次の間となる。主室の和室8帖とは四枚建の襖で仕切られており、欄間は菱組子で精巧に出来ている。主室へ入ると、正面に床の間と違い棚を配し、格式の高い造りとなっている。

増改築をしたと思われる西側部分は、内玄関から入ると、和室6帖となる。この部屋は天井が低くなっており、間取り構成、また当時の生活様式からみて、土間として使われていたと推察する。その南側には台所があり、廊下を経て、和室3帖となっている。台所、和室3帖とも、間取り上及び屋根の形状等から、増築された部分であると思われる。



建物の南端に茶室がある。庭に面する東側のにじり口から入ると正面に床ノ間を配し、その右には火頭口があり、太鼓張りの一本引襖を開けると水屋となる。炉は部屋の北東隅に設けてあり、北面給仕口の襖を出ると道具戸棚となっている。この茶室は茶道の理にかなったものであり、庭園との構成も、植樹や自然と和合したおもむきがある造りである。

和室8帖の東には縁側があり、雨戸を開けると庭が広がっている。長い縁側を北にいくと御手洗いがあり、板庇の出格子には繊細な格子が取付けてある。

さらに北へ進むと渡り廊下となり、東へ伸びている。南面には物入があり、北面には硝子障子が連なっている。渡り廊下東端には舞良戸マユラドがあり、これを開けると松風庵へと続いている。

(2) 外部意匠

屋根は日本瓦及び亜鉛鉄板の二種類であり、外壁は木舞下地土塗り壁仕上げ、一部漆喰塗り、及び杉下見板押縁押エである。建具は舞良戸、紙張り障子、硝子障子等を使用している。基礎は玉石の独立基礎で、増改築部分はコンクリート布基礎となっている。本屋根部と茶室と渡り廊下の外観は次の通りである。

本屋根の切妻と縁側の下屋の瓦との重なりは重厚感を与え、それに便所棟の切妻屋根をすっきりと東側に伸び出し、その瓦が北側玄関の上まで下屋として葺いてある。非常に伸びやかで、すっきりとし、また重厚な屋根となっている。

茶室屋根は亜鉛引鉄板葺の寄せ棟であり、高さを低く押え、軒の出は長く深くなっている。軒裏は二重軒先とし、広巾の杉化粧野地板、木は細見の化粧丸太を360 M/M毎に入れ、茶室天井との一体感が生まれている。にじり口の脇には袖壁を配し、また窓に竹の面格子を取り付け、足元には呉呂太石を並べ据えて、腰板には、月とひょうたんの形をした透しが入っている。以上の様に茶室外観は、屋根、外壁、足元と相まって、しっとりとした美しさをかもし出している。

渡り廊下屋根は亜鉛引鉄板葺切妻である。外壁の南面は土塗り壁、北面は杉板翹羽目張りとし、硝子障子を取り付けている。足元は玉石の独立基礎とし、柱、垂木等は細い材料を使用し、シンプルにまとめ上げている。

(3) 構造説明

前記二段について、直接見える部分の説明をしてきたが、床下、小屋組及び構造上の部分について、調査の内容を述べる。

基礎は、玉石の独立基礎となっており、束石も玉石である。西側の増改築をした部分はコンクリート布基礎である。

土台は末口 100~120 M/Mの太鼓落しであり、玉石の上に敷かれている。コンクリート布基礎部分には、角材が使用されている。

和室8帖の大引は大きな部材を使用し、束立間隔を広くしてある。また、大引間隔が広い為、根太は比較的大きな丸太材が細かく入っている。茶室の大引も大きな部材が使用されており、また根太も比較的大きな丸太材が細かく入っている。縁側及び渡り廊下の根太も末口60~70 M/Mの丸太が使われている。その他、和室6帖、4帖、3帖、2帖等の増改築又は修繕された床下は、現在、一般的に使われている部材と同じである。

本屋根の小屋組は和小屋折置組であり、軒桁を二重とし、又梁も二重となっている箇所もあり、非常にがっちりと組んだ現在ではめずらしい小屋組である。他の茶室、渡り廊下等の小屋組は現在一般的である京呂組となっている。

また、本屋根部の柱は、和室8帖、4帖等の部屋では、長押の直上で継いだ様な痕跡が見られる。そして、その傷のカタチが、柱それぞれ違っている。小屋組は建築当時のものと思われるが、構造上、意匠上からも判断しかねる架構がみられる。

(4) 破損、改修等

本屋根の日本瓦のずれ、傷みが多くの箇所で見られ、カラー鉄板で雨もりを防いでいる箇所もある。これは屋根下地(野地板、垂木)の傷みと相まって、風雨の強い時は雨もりの原因となっている。西戸漆喰は大部分剥げ落ちている。

西側下屋の亜鉛引鉄板は増改築をした為、施工の統一がなく、不陸も目立ち、コータール塗りを繰り返している。

茶室屋根は亜鉛引鉄板で、ペンキ塗りをしてあるが、メンテナンスが良くない為、錆が出ている。軒の出が長い為長年の間に、下がりぎみとなり、一部、袖壁から補強している。

渡り廊下屋根の亜鉛引鉄板は、軒先が腐り落ちている。また、軒先の野地板が脱落し、垂木の先端も崩れてきている。

外壁の下見板張りは全体的には大きな損傷はないが、東側下屋の瓦と下見板とのすき間が大きくなり、水切りもない為、雨水の進入が心配される。腰から下の土台廻りの下見板は、腐り、脱落等の損傷が見られる。土塗り壁は、玄関入口のペンキ塗り等の補修がなされているが、全体には、表面のはがれ、ひび割れが目立ち、腰壁部分は特に傷みがひどく、下地の小舞が見えている箇所もある。

縁側の雨戸は、長年の使用の為、傷みがひどく、敷居と鴨居の傷みと相まって、開け閉めが大変である。戸袋は鏡板を改装しているが、足元を補強している。茶室南側の戸袋は鏡板の下部脱落が見られる。

土台は多少の差はあるが全体的に腐朽が進み、一部欠損している箇所もある。

大引は、建築当初の部材は少なくて束で補強されているものもある。修繕時に交換された大引は前に較べて細い材料を使用し、束を多くしている。

根太はほとんどが交換されており、当初からの根太は、虫害にあっている箇所もある。

廊下（口）と濡縁の床材は、欠損、表面の凸凹が大きく当初からのものでなく、改築時に他の材から再使用されたものと推測される。

和室の京壁は表面が剥げ落ちて下塗りが見えている部分がある。漆喰壁はペンキ塗りの補修を行なっている。

和室8帖の菱組子欄間是一部欠落しており、もし修理したとしても経年変化の部分は元に戻らず、残念に思う。

和室8帖の竿縁天井は杉板巾 720M/Mのムク板である為、板自体のアバレと雨もり等の原因により、波をうっている。

他の竿縁天井もタレやユガミが発生している。

茶室天井は二種類の杢目があるが、これは修理の時、半分だけ交換されたものと推察する。同床ノ間の網代風ビニールクロスも同様である。

小屋組は、野地板の一部分損傷が認められるが、垂木、母屋、梁等は屋内部分の損傷は見られない。

増改築部分は一部古材を転用している箇所もある。

和室8帖、4帖、3帖、2帖の本屋根部における、柱の倒れは、敷居と鴨居間で最大 23 M/Mとなっており、床の下がりは最大で37M/Mとなっている。しかし、壁、建具等への大きな影響は出ていない。

全体として、屋根、外壁、土台廻りの外部は大きく損傷した箇所もあり、現状を維持するならば、早急な手当が必要だと思われる。

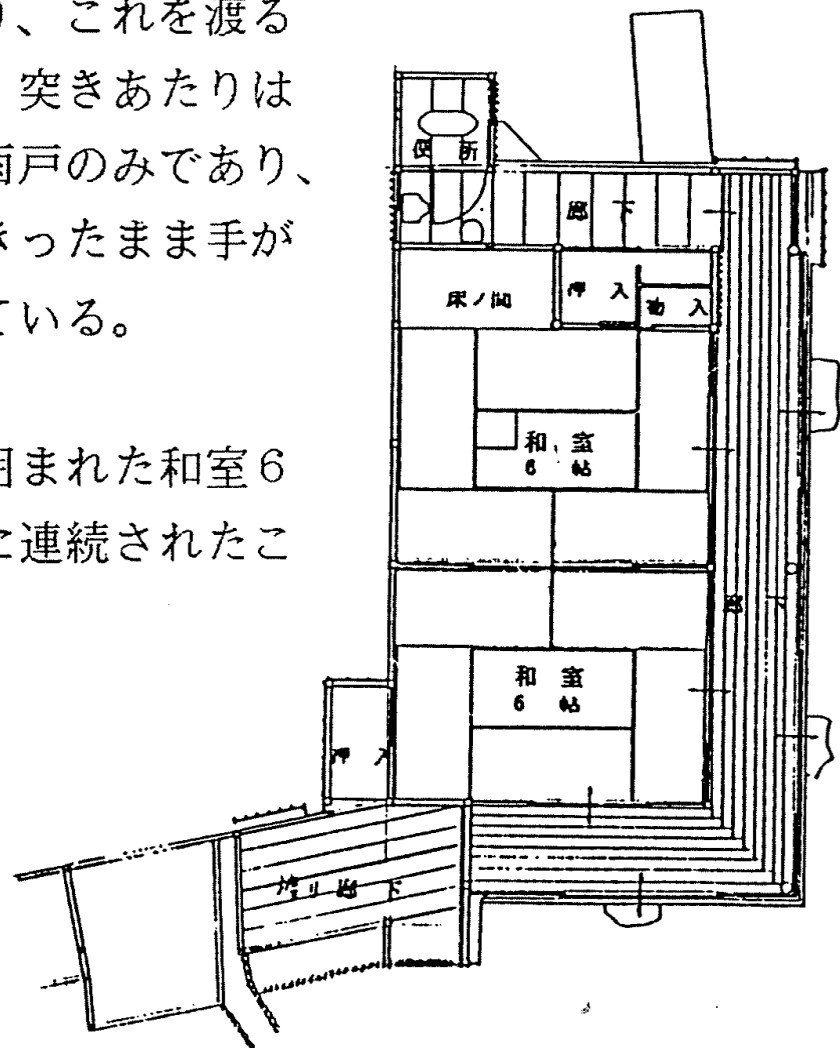
(島 野)

2. 松風庵

(1) 内部意匠

星溪寮からつづく渡り廊下に、解放された屋根だけのところがあり、そこを通り抜けると庭園に入る。この解放されたところより松風庵に入るが、又、ここに板を渡すことによって星溪寮と行きき出来るよう考えられている。この南側に幅91cmの壁に囲まれた小さな物置のような所がある。今は下足入れが置かれているが、どのように使われたのかわからない。渡り廊下と廊下は1本引の板戸で仕切られ、戸には鍵のあった跡がある。廊下は建物の南と東を連続する廻廊となっていて、外部とは腰付ガラス戸とで仕切られている。この建具は柱の外側にあり、閉めた時には東南の角と東側中央の化粧丸柱は、見えないように工夫されている。東側の廊下を進み、突きあたると左手に一本引の腰付障子戸があり、ここを開けるとやはり廊下になっている。この廊下より吹きさらしの渡りがあり、これを渡ると積翠閣につながっている。又、突きあたりは便所である。外部との仕切りは雨戸のみであり、便所寄りの雨戸1枚には、閉めきったまま手が洗えるように、小さな扉がついている。

松風庵は、廻廊とこれに取り囲まれた和室6帖の2室よりなっている。南北に連続されたこの2室は、フスマで仕切られていて、必要なときには12帖大の大広間として使用出来る。廻廊に面する建具は雪見障子である。この鴨居の上にも木彫額が掛かっている。南側の室には押入があるが、幅136.5cm 奥行71.5cm 高さ145.0



cmと通常よりも大部小さく、どのように使用していたのか興味が深い。北側の室には、南向きに床ノ間、その隣りの壁には廊下寄りに茶室建築にある火頭口と思われる小さな1本引のフスマ戸があるが、ここは小さな物入となっている。その裏側は押入になっていて、天袋もついている。床ノ間の前には炉が切られ、天井には蛭釘があり茶室にも使用されたようである。

内部意匠については概略以上である。南、東側は解放出来るが、西側は全て壁であり、北側も室内は壁になっていて、冬の冷たい季節風を遮断している。しかし、廻廊により北側も解放出来るようになっているが、夏の蒸し暑さは多少我慢が必要であったと思われる。

(2) 外部意匠

屋根は日本瓦葺寄棟である。和室6帖2室と床ノ間・押入部分が本屋建てとなっていて、その中央に棟があり、廊下部分は、下屋となっている。南側の渡り廊下に付属している部分は、そのまま葺き降ろしになっている。北側に飛び出した便所は、片流れ屋根となっているが、西側軒先は本屋建てと同じ勾配で降りているため、この部分が腕木によって垂木を支える招き屋根の構造になっていて、外観の統一を計っている。軒裏は化粧野地板で、特に南、東、北面は垂木材も木と竹を交互に利用して、廊下の天井をそのまま延長して仕上げている。この部分の梁は化粧丸太を使用している。

星溪寮との渡り廊下屋根と積翠閣との渡り廊下屋根は亜鉛引鉄板平葺であり、コールタールを塗布してある。共に吹きさらし部分であり、屋根裏はそのまま天井になっている。前者は化粧野地板で、角材と磨き丸太を交互に使用して垂木材としている。後者は、母屋・垂木共化粧材とはなっていないが、スダレ張りの天井となっている。両方共中央部分が丸みをおびている。(起り屋根)

外壁は土塗り真壁であり、一部漆喰塗りと下見板張りである。建具(雨戸)は杉板戸である。

(3) 構造概要

基礎は大谷石と玉石を礎石としてあり、床束石も玉石である。大谷石、玉石の上に直接土台が敷かれているが、廊下外部廻りや他の部分は、玉石より直接柱が建っていて土台が廻っていない所もある。又土台から床の高さまで床束であり、その上に柱がのっている箇所もある。大引は束の間隔が広いため木材が用いられている。根太は部位により角材、丸太材のひいたもの等寸法にばらつきがあり、部材統一が出来ず、図面作成において代表的寸法を記す事にした。床組み材において古材の転用が多く見られる。

小屋組は床ノ間の天井部分よりあがる事が出来た。和室6帖2室と床ノ間・押入部分が本屋建てであり、廊下部分は下屋となっているためこの部分を見る事が出来ず推察である。特に便所部分は調査不能であるため判断が難しい。小屋根工法は一般的である。但し南と東側に軒桁より30cm程内に丸太梁が使用されているが、何故だか判断がむずかしい。廊下部分が化粧野地となっているため、軒桁の上に小屋束を建てて高くし、鼻母屋を架けて屋根下地を構成している。小屋組材も床組同様古材の転用が多く、部材寸法にばらつきがあり、部材統一が出来ない。

(4) 破損、改修、その他

各部の破損や改修された点、その他特に気のついた所を述べる。室内では両方の和室の天井に雨漏りのしみがある。廊下部分では天井と壁との接点部分で破損して穴があいている部分がある。建具も全般的に傷んでおり、和室6帖2室の仕切りのフスマは寸法の合わないものもあり、他から持って来たのかも知れない。柱、床、敷居、鴨居等の狂いは全般的には多くはないが、東南の隅の柱にかかる敷居が2.0cm程上がっている。

外部廻りでは、外壁が地面より50cm位までの所はすでにはがれ落ちている所もある。屋根瓦の傷みはそれほどでもないが、ズレが若干見られる。基礎、土台廻りでは直接地面に接している所もあり、又南と北側では、その損傷の程度が著しく異なる。北側では土台と柱の仕口部分が、既に朽ちて部材断面が約半分になっている所もある。

小屋組については、屋根下地である垂木・野地板はあきらかに改修してある。垂木は3.6cm×4.5cmの角材が、45.5cm間隔に配されていたが、大部分に5.4cm×5.4cmの角材が補強として添えられているか、新たに設けられているため、垂木間隔は現況では複雑になっている。野地板はほとんど取り替えてあり、その上にはアスファルトフェルトが使用されている。小屋梁である丸太材の一部に、その仕口部分に腐朽が見られ、隅木と小屋束（棟束）との仕口が、はずれそうになっている所もあった。

又建物構成上、重要である柱において、土台より60cm程上の所で継手を設けた柱が数本ある。構造上の点から、判断が難しい。

南側の渡り廊下部分上部に、電気の配電盤があったらしく、ここで屋内に通じる配線が取り替えられてある。

以上、破損箇所等記載したが、築後、幾星霜を経ているため、仕方がないと思うが、現状を維持するのであれば早い時期に手を加える必要がある。

（塩 原）

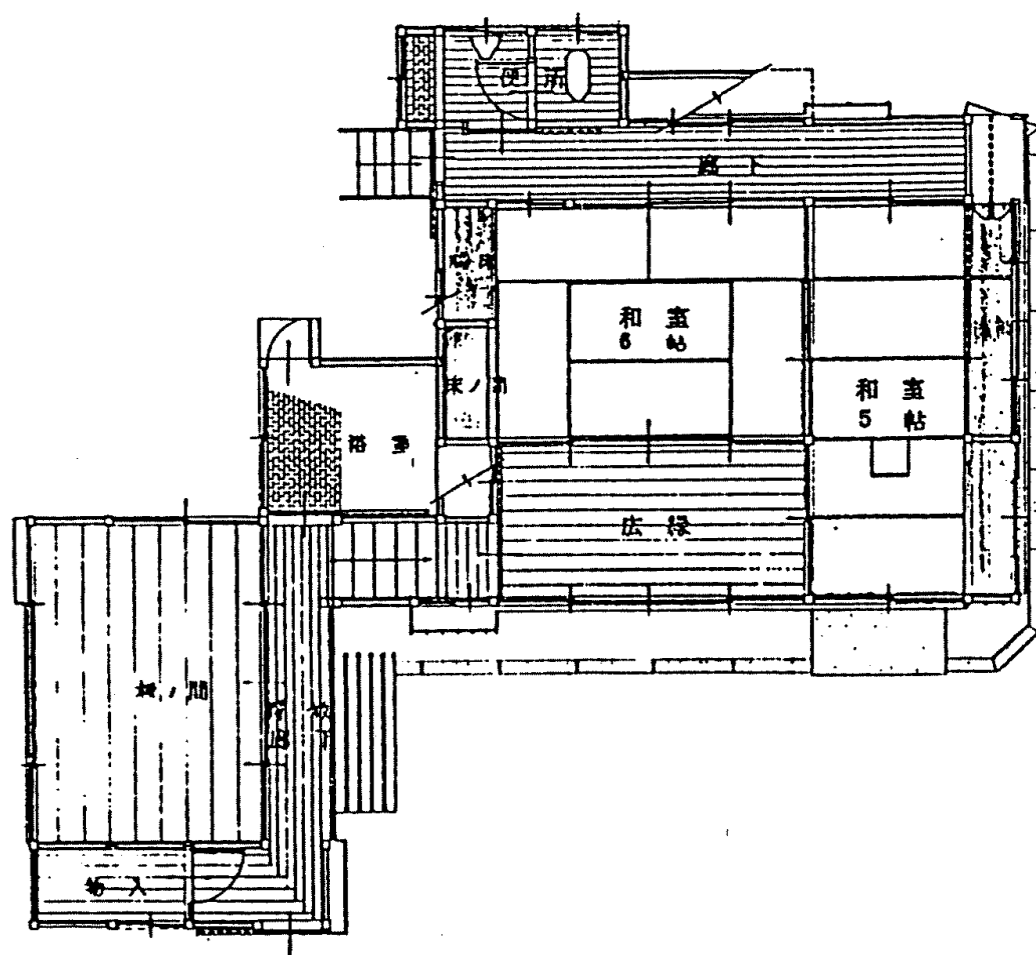
3. 積翠閣

(1) 平面意匠

図、右上部（積翠閣）と、左下部では建築年代も違い、後者は松風庵の別棟として建てられたものらしいが、ここでは、作業区分、また、説明の都合上「前室」として説明を進めたい。

松風庵より、ふきさらしの渡り廊下を進むと前室に至る。左手に一帖ほどの物入があるが、天窗を設けていることなど、他の用途に使用されたことも推測されるが、詳細は不明である。廊下の幅は他よりも狭く68cmほどであり、外部とは雨戸のみで仕切られている。

左手に6帖の和室があるが、当時は板張りのまま使用していたものを、後日、畳を敷き込んだ形跡が見られる。西側は肘掛窓で障子と雨戸が建ち、掃き出しのガラス戸、廊下との仕切りは障子としてある。廊下突き当りは、浴室として使用していたらしく腰壁の一部はタイル張りになっている。



浴室手前右を階段で上がり、高床式の広縁に続く、奥に和室6帖、東に和室5帖、さらに北側の廊下より便所、また、西側外部へ続く外階段が設けられている。床高は地面より1.3mほどの高さとし、南側はガラス戸の肘掛け窓で、下部には通風のための地窓を設けている。6帖和

室には、床の間、書院窓などつけられているが、造りそのものは比較的質素である。和室5帖には東面に幅60cmの出窓及び地袋が付き、一部に丸窓を付け工夫を凝らしている。90cm幅の地袋の中に、小さな違い棚が取り付けであるなど面白い。北側廊下中央部に出窓式の物入（天袋風）があり、下部はガラス戸として通風、採光を考慮している。便所は大小に別れ、比較的広く感じられる。北面の壁上部を7cmほどの吹抜けとし換気孔としてあり、西側には出窓式にして手洗い流しを付けるなど細かい配慮がみられる。

以上、平面構成について概略を述べたが、当時と部屋の用途の変わった部分等多少あることと思う。床高の変化や、出窓の利用など各部屋とも大きい部屋ではないが、空間をうまく利用して広く見せている。

樹木の繁りもあろうが、位置的に水面を良く見渡せない部屋であり、高床にした意図は何であったろうか、一つ疑問に思うところではある。

（2） 外部意匠

前室部分の屋根については、廊下、物入れ部を下屋、6帖の部屋部分を上屋とし、南面を寄棟、他方を切り妻とする。屋根材は双方とも亜鉛引鉄板平葺でありコールタールを塗布してある。下屋部分の軒裏は化粧野地板で下屋部分は、水と竹の垂木材を交互に使用し、一部に化粧丸太の梁が使われている。

外壁は、土塗り壁下見板張り一部漆喰塗り仕上げであり、雨戸は木製杉板戸である。

積翠閣については、上屋を瓦葺入母屋造りとし、四方に下屋を配して変化を持たせている。入母屋屋根は質素な造りの形式であり、起り（むくり）屋根としてある。北面を除く3方は、亜鉛引鉄板平葺で、軒裏はいずれも化粧野地板である。外壁は前者とほぼ同様であり、建具廻りも変わらない。基礎はコンクリート布基礎を設けてある。

高床式の建物であるため、ともすればバランスの悪い外観になりがちであるが、各部に出窓や下屋を配し、又、軒の高さ、屋根の高さに変化

を付け、単調になり得る外観をうまくまとめている。

(3) 構造説明

前記2段について、直接見える部分の説明をしてきたが、床下、小屋組、及び構造上の部分について、調査の内容を述べる。

前室部分の基礎は、大谷石（1mほどの長さ）と玉石を基礎としてあり、床束石も玉石である。土台廻りは思ったよりも腐りはないが、柱直建ての部分は、傷んでいる。小屋組については直接見られないため細部の調査は困難であり、外部からの判断によるものとした。

積翠閣の基礎についてはコンクリート造であることを前述したが、表面から見る限り良質のコンクリートであり、風化等もなく堅固なものであること補足する。又、高さも場所によって異なり、特に、浴室廻りでは地面より1.1mの高さとし、腰壁部の湿気を考慮している。他、便所廻りでは45cm、一般部分で15cmほどである。床束石はコンクリートと玉石を併用し、間隔は1.3m及び1.8mと広くとってある。床下には北側より出入口があり、中腰で入れるほどの高さである。東の間隔が広いいため大引材は木材が用いられている。根太は部位により寸法はいろいろで一部改修の後が見られる。問題はないものの各部に古材を転用している。小屋組部は一般的な工法で施工されており、特に配する点もないが、床組同様一部古材を転用している。野地板などに一部破損が見られるが雨漏りや特別腐りもなく構造的には間違いないと見られる。

(4) 破損、改修等

前室、室内では天井板の下がり、板の反りなど痛みが目立つ、他にも廊下床板、壁廻り、建具など全般的に傷んでいる。部屋の根太、大引きは部材が新しく改修されたもようである。外部廻りでは廊下部分の束、柱脚、壁部分では北面の下見板は改修されているが、他の部分では破損

が進んでいる。屋根では、特に軒先部、又、雨樋は傷みがひどい。廊下の軒裏の一部には焼け焦げた跡があり、炭化して垂木の欠落もある。建具（特に雨戸）も悪い状態である。一方、積翠閣の室内は各部とも比較的良好であり、天井のはがれ、壁のひび割れ、床の間の框及び落とし掛けに虫害が目立つ他は、細部での破損が見られる程度であり、柱、床の狂いもわずかである。

外部廻りでは、瓦のずれ、前者同様亜鉛引鉄板の腐食、雨樋の傷みが目立つほか、野地板、垂木の傷みも数ヶ処見られる。壁では、下見板について局部的にひどく破損している処もあり、戸袋も傾いている。床組では、すでに改修された以外の部分について、当面は問題なしと見られる。小屋組については前述したので省略する。

以上、損傷箇所等記載したが、概して外廻りに多く見られる点は当然であり、仕方のないことと思うが、現状を維持するのであれば早い時期に手を加える必要があるのではないだろうか。

（田 原）

ま と め

まとめにあたり、庭園や池とのつながり、そして建物の間取りや配置等から考え、焼失で現存していない此君亭と茶室が、言わば公的な部分で今回調査した、星溪寮、松風庵、積翠閣は主に私的な用に供された建物であると推察する。

又、各建物は、各々詳細に調査報告がなされているので、全体的に共通する部分、特徴などを述べる。

まず平面的には、各室はほとんど和室であり、西洋の様式・形態が表われている所はほとんどない。和室は馴染みあるタタミ・京壁・障子・杉板天井で構成されている。台所、浴室は住まいの近代化が最も著しかった部分であり、改造等にもよるが、その当時の使われ方は想像しがたい。また、雨戸一枚で外部と仕切られた廊下の庭との一体感・解放感は、今日ではあまり感じる事が出来ない。外部では、日本瓦葺屋根が主であり、外壁は北西面に漆喰塗りが多く柱も細かく立っているが、南東面は対称的に大きな解放となっている。これら平面的・外観的にも自然環境の利にかなった建物の造りである。

構造的には、積翠閣の高床部を除いて、玉石を礎石として建てられている。その当時の一般的な工法と思われる。柱は目に見えない所であるが、継いである為構造上理解しがたい所がある。又、小屋材は再使用した材の所もみられ、架構上疑問な梁等もある。

建物の損傷に関しては、屋根瓦の破損や引掛棧瓦でない為か、ずれにより雨水が侵入し、天井板に影響を及ぼしている室もあり、屋根の軒先部の腐り、欠落は全棟にみられる。また、柱・床束では根元部分で湿気による腐朽が目立ち、そして雨水の跳返りや湿気の上昇で外壁の腰下部が損傷しており、横なぐりの雨や、使用頻度の為か雨戸のいたみがひどい。

また建物の倒れ、歪みでは、当時の地業がしっかりしていた為か、部分的には悪い箇所はあるが、それが建物全体には及んでいない。

以上、今回調査した結果、判断できることは、明治期の純和風建築であり、現況の建物は細かい部分でかなり損傷、腐朽があり、できるだけ早い時期に適切な修繕が必要である。

(今 井)

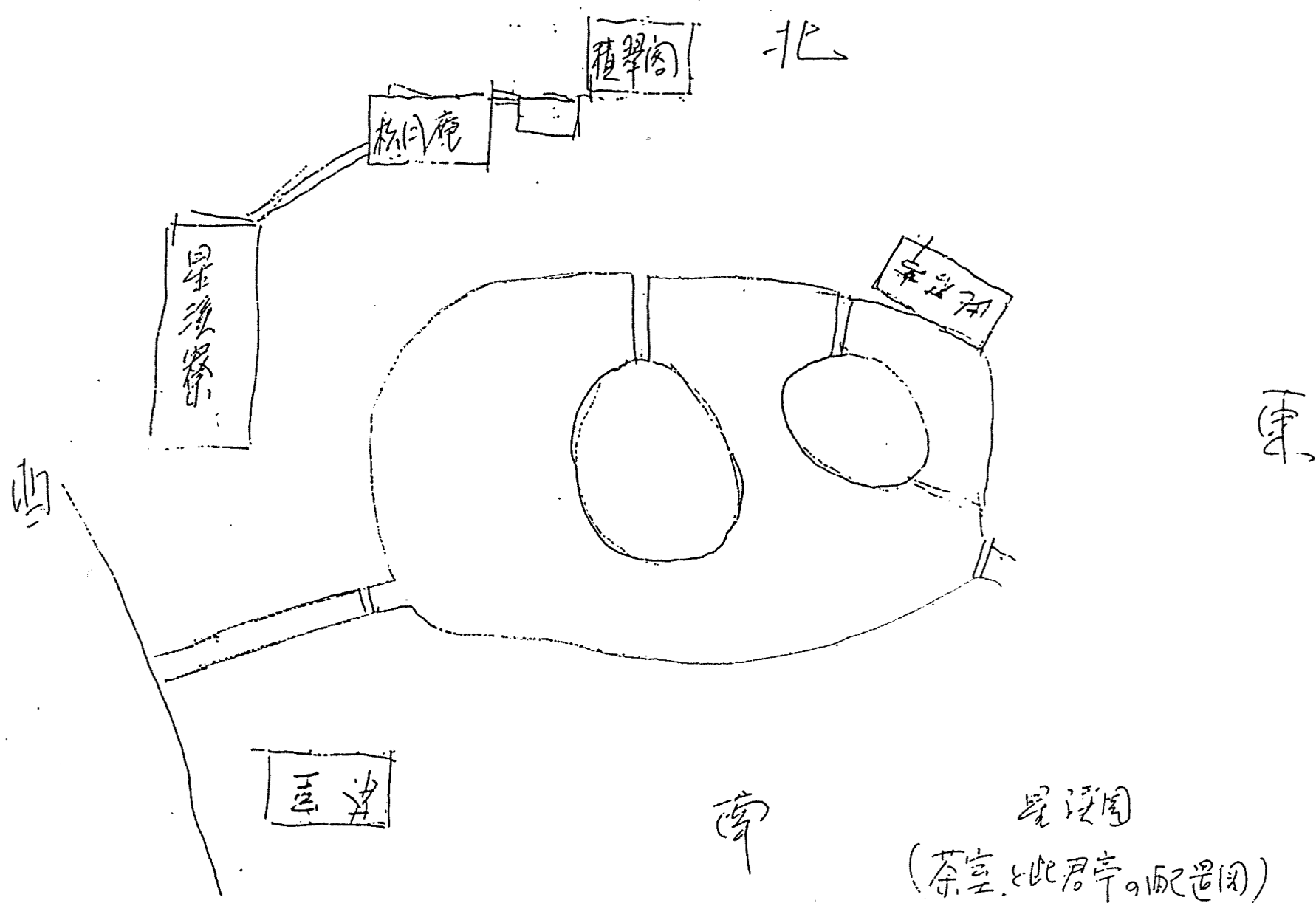
VI 聞きとり調査報告

熊谷市にとって、明治・大正時代の建物はふたつの大きな禍によって、その多くを失なった。ひとつは大正14年5月の熊谷町大火（全焼641戸・半焼17戸）又、もうひとつは熊谷市空襲（3,630戸焼失）である。当時の建物の多くは、木造であったため、老朽による消滅も多くあることはやむをえないが、熊谷市街地内に、明治及び大正時代の建物が現存しているのはきわめて少ない。

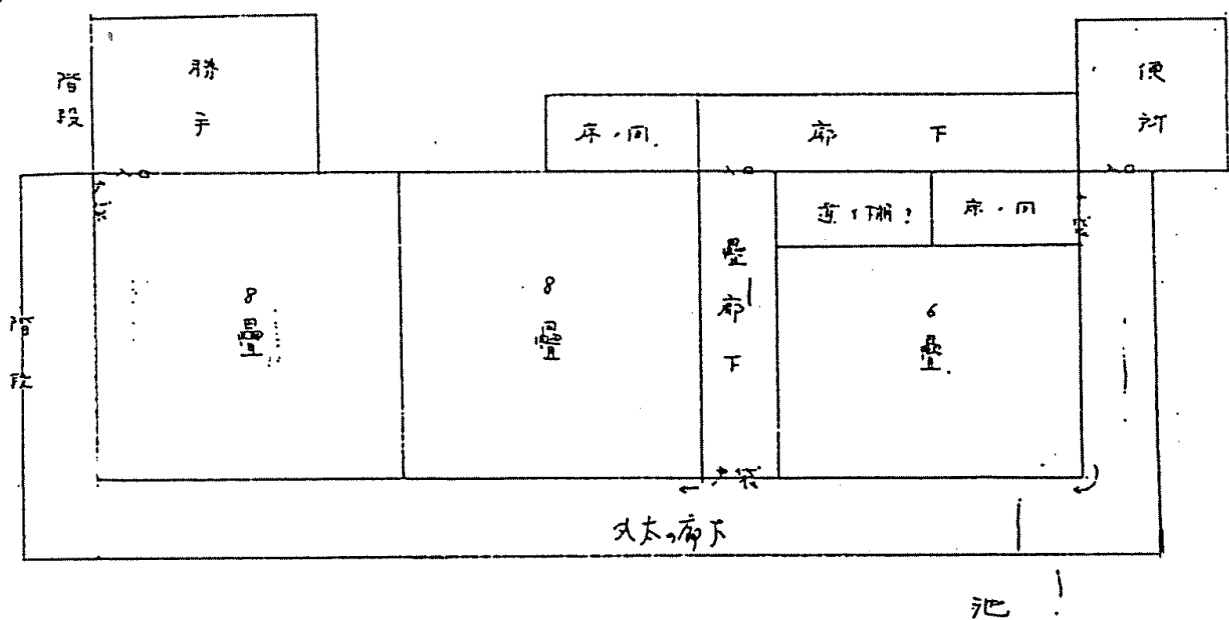
今回の調査でも、聞きとり調査などにより、現存している3つの建物以外に、熊谷空襲時に焼失した、2つの建物と正門があった事が確認された。ひとつは池の北側積翠閣より東に位置し、池に張り出して建てられた此君亭である。この此君亭は、木造瓦葺平屋建高床式であり床面積75.9㎡（23坪）であろうと推察する。又、これは二回に分けられて建てられたと聞く。此君亭見取図より、東側6帖の部屋が先に建てられ、ここに、明治17年昭憲皇太后がお立寄り、お休みになられ、その後、増築が行なわれ、大正10年に秩父宮が御宿泊になられたと聞きおよぶ。

もうひとつの建物は、池の西南に此君亭と相対して茶室があった。この茶室は木造杉皮葺平屋建であり、床面積23.1㎡（7坪）と推察する。これは京都より移築したものとされている。この茶室を流れ出しより南にあり、少し高まっている所に建てたので、向山（向山亭）と呼ばれていたらしい。

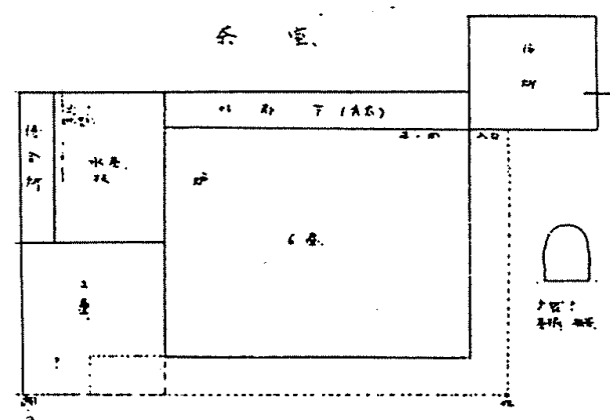
又、正門は、現在の通用門より東側、竹町通りに面してあった。この門は戦災にて半焼し、のちにとり払われた。現在、この門の位置を示す踏石の一部が園内に残っている。この踏石は“玉の池”の中の島に通じる橋の手前で東に折れ此君亭（戦災で焼失）の階段口までつながっていたと聞く。この門はめったに開けられず、当時の県知事が澹如氏に就任の挨拶に来られた時でも通用門（現在の門）より入ったといわれている。



此君亭



此君亭 見取図



茶室 見取図

(竹井邦彦氏による配置図と見取図 s 61.10)

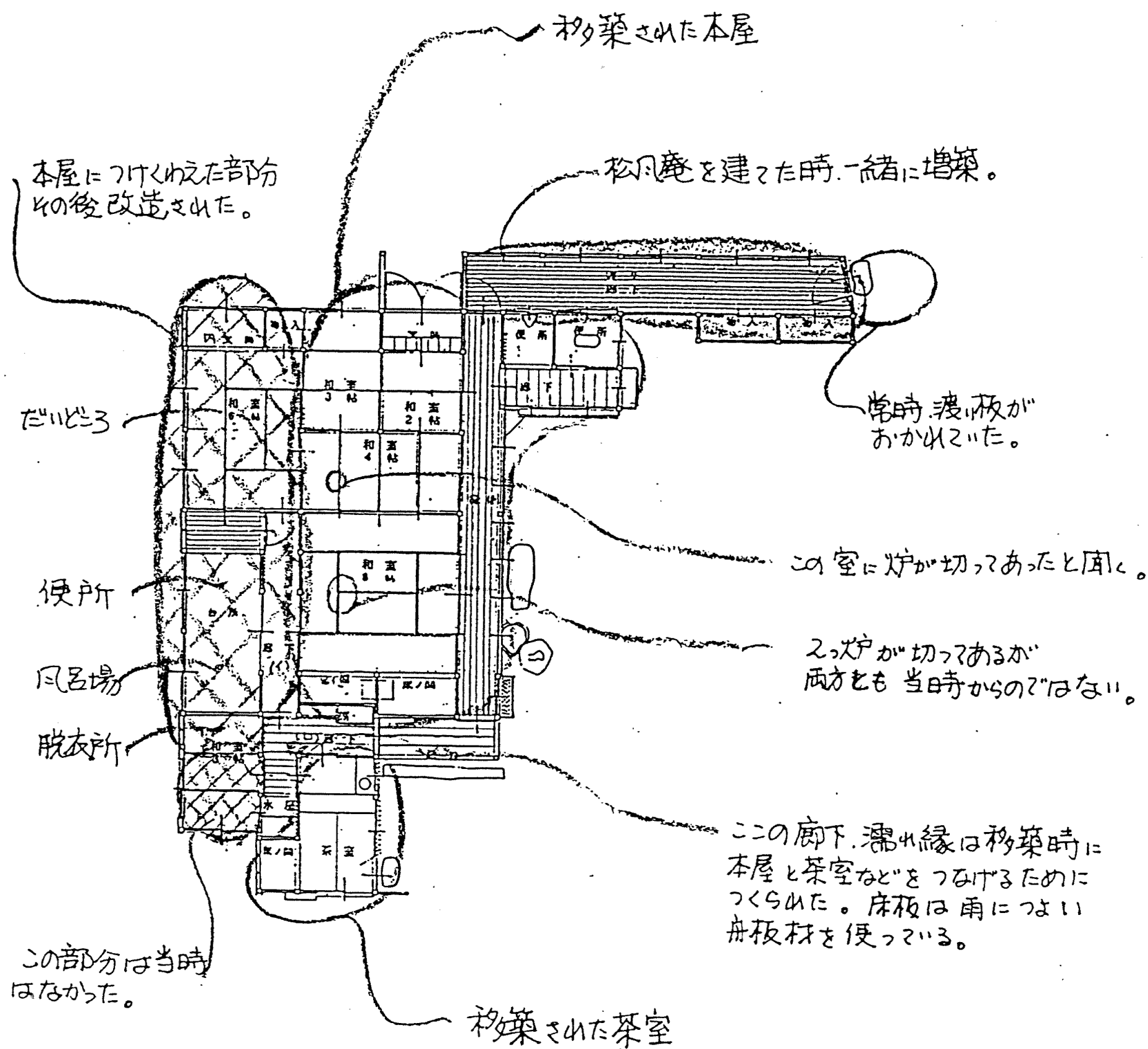
星溪寮について

星溪園に現存する建物の中で最も古い建物である。この建物は庭の造営時（慶応年間より明治の初め）に園内の名石、振袖石や矢柱石を行田忍城主よりもって来た時、本屋部分、茶室部分をそれぞれ移築し、廊下にてつなげたと聞く。なお時期は不詳だが、建物西側部分の台所、廊下、便所、浴室、脱衣所、中庭がつけくわえられたが、現在の間取りとは違い、その後近年、簡易に改造された様子である。又、渡り廊下は松風庵を建てた時に一緒に増築した様子であると聞く。

主室、和室8帖に現在2つの炉が切っているが、当時は、炉はなく前室の和室4帖の部屋に炉が切っていたと聞く。なお、8帖の部屋の南側部分の炉は、昭和40年頃といわれる。又、北側部分の炉はそれ以前ではあるが、茶の形式ではこの位置に炉は切らないと思われる。又、和室3帖の戸は絵入の杉板戸と聞く。

流れ出しに面した茶室は、2帖台目中板向う切（がん炉）と呼ばれ、茶室として見事な内部空間をつくりあげていると思われる。

竹井家ではここを仏間とも呼んでいた。茶室と仏間が兼ねている例は少なく、京都の松花堂（2帖向う切）が同じ形式をもつ。ここは澹如の至極、私的な室であったと思われる。澹如は祖先への献茶を行ない一日がはじまるのではないかと推察される。なおこの本屋建物は脇床の天袋の絵、板戸、便所などより、格式の高い人の建物であったことと推察される。



星溪寮の説明図

以上の事により、今回建物調査時において、本屋西側部分の柱の継ぎ
本屋小屋組、茶室と本屋の間の床板ゆ舟板の再利用）で移築された事が、
又、西側和室6帖の天井高等で簡易に改造された事が理解出来る。

松風庵について

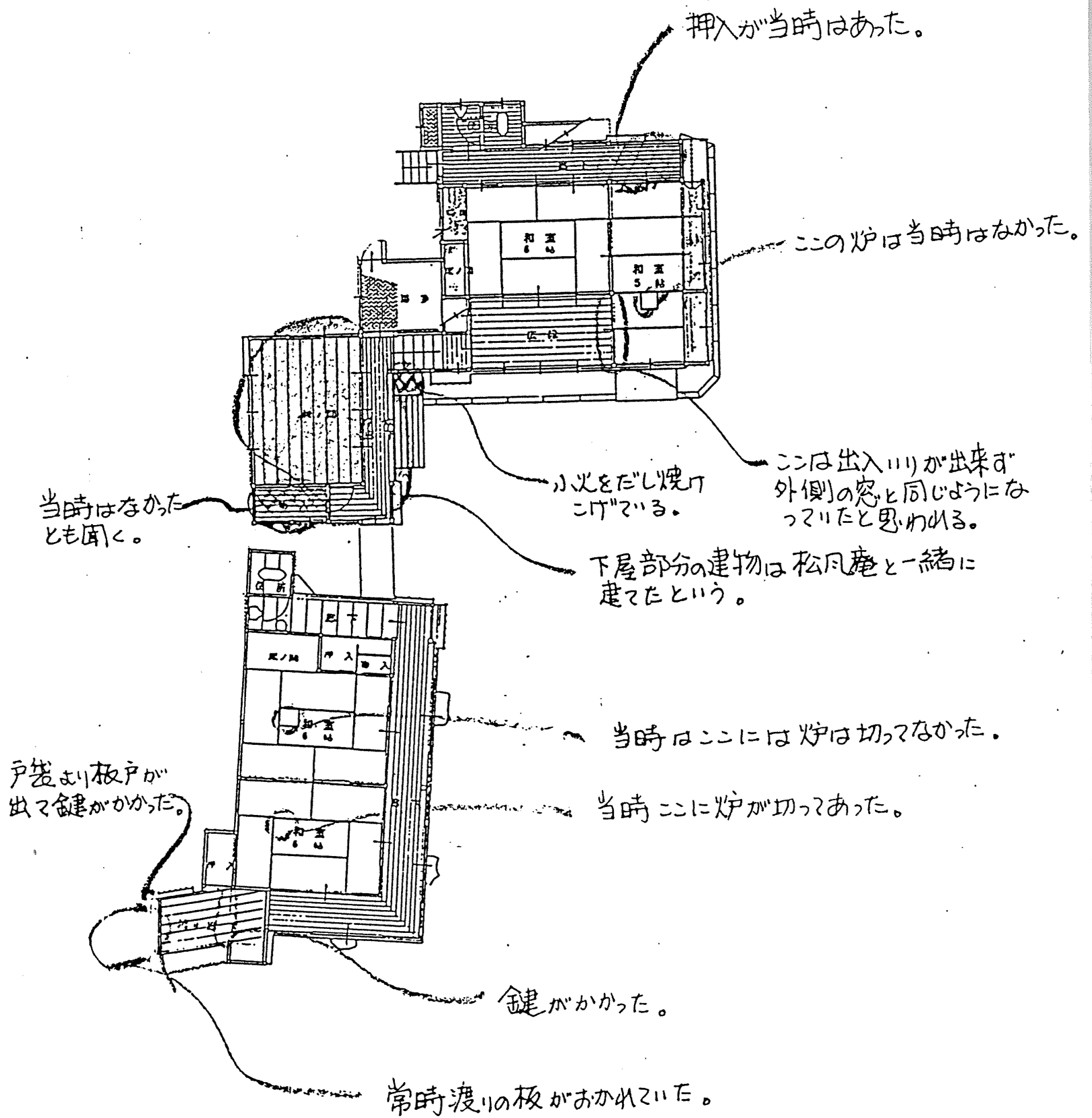
この建物も古い建物で、明治時代に建てられたと聞く。しかし、建物調査にて再利用された材があるという、当時の家作をこわした材料も使用したと聞きおよぶ。

星溪寮の渡り廊下との間は不断は板が置かれており、庭へ行くにはそこをまたいで通ったという。そこには松風庵側の戸袋より雨戸で仕切り鍵もかけられるようになっていると聞く。

この部屋は不断は使っておらず客間として使っていたらしい。この室の床の間側和室6帖に現在炉が切られているが、当時のものでなく、前室の和室6帖の方に炉が切られていた様である。

積翠閣について

本屋は昭和5年、竹井耕一郎氏によって鳶職 中村津久松氏 関口清次氏 小沢瓦屋 福島材木店などの職人達によって建てられた。この建物は耕一郎氏が体が弱かったため、湿気を避け、池より離れ、高床にして建てた。なお、ここで調査の都合上、下屋（板張り6帖等）は積翠閣の一部と記してあるが、建てられたのは松風庵と同じ時である。ここは当時和室の予定であったが変えて板張りとし、書庫として利用したと聞く。この建物は松風庵と同じく、家作をこわした材料を使って建てられた様である。又、高床部分の本屋においても、当時ここに建物があり、それを壊した材料も部分的に利用し、建てたと聞く。本屋・広縁と東側和室5帖との間に当時は外部窓と同じく上部と下部に別れた窓があったらしい。又、和室5帖の北側は現在廊下であるが、当時は押入があった。又、ここにも炉が切られてあるがこれらは、当時のものでなく、市に移管された後であろうと思える。外部において、階段付近の軒下廻りがこげているが、戦後小火を出しあやうく消し止めたと聞く。又、高床部分南側床下を当時温室をつくることを考えたと聞くが、建物調査時においてその形跡が見られなかった。



松風庵・積翠閣の説明図

池について

池の中に戦前にも中の島南付近に井戸があり、毎年井戸さらいをしたと聞く。又、戦後も枯渇の心配により中の島南側付近に井戸を掘したと聞く。又、池より星川への流れ出し部分は当時より板塀によって囲われ、下部は鉄柵によって閉じられていた。

庭園について

星溪園が市に移管される以前の出入職人は、かしらは星溪園が出来た当時より田村亀吉氏、中村都久松氏、中村庫二氏と続く。又、植木職は戦前より吉田忠一氏が行っていた。

以上の事より、当時の星溪園の池、樹木及建物の維持・管理も大変な事であったと察する。今後、星溪園全体のより一層の調査研究が進められる事により、竹井澹如翁の遺風と創建の精神を包括した回遊式日本庭園として“星溪園”は清冽な水と珍石奇木とで名園として知られ、徳富蘇峯が熊本の水前寺池と並び賞した（竹井澹如小伝より）といわしむるに値する庭園であり建物であったと推察する。

（大 島）

なお聞きとり調査方法は星溪園に関係の深い方10名程の方に個々お会いし、それらを項目別にまとめた次第です。

参 考 文 献：	熊谷歴史年表	竹井澹如小伝	熊谷人物辞典
	熊谷風土記稿	名勝星溪園パンフレット	
	幽嶂閑話	他	

VII 図 面

星 溪 園

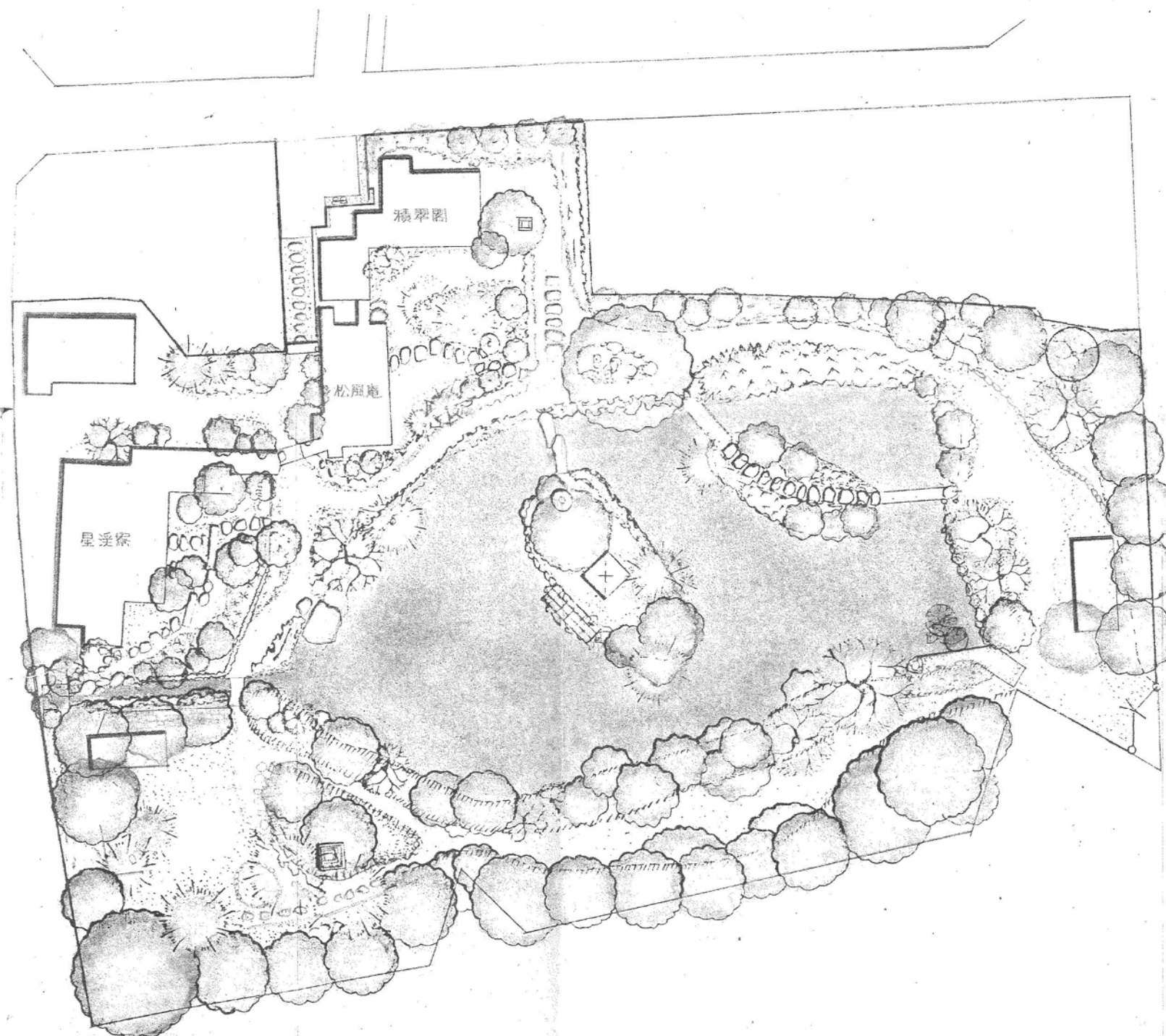
* 位 置 図	001
* 全体配置図	002
* 配置詳細図	003

	星 溪 寮	松 風 庵	積 翠 閣
* 仕 上 表	101	201	301
* 平 面 図	102	202	302
* 立 面 図	103~106	203~204	303~306
基礎伏図	107	205	307
床 伏 図	108	206	308
天井伏図	109	207	309
小屋伏図	110	208	310
屋根伏図	111	209	311
矩計詳細図	112~113	210	312
展 開 図	114~120	211~214	313~317
建物状況図	121	215	318



星溪園





星溪寮

外部仕上表

	母屋	茶室	渡り廊下
基礎	独立基礎(玉石)、一部(西側)コンクリート布基礎	独立基礎(玉石)	同左
外壁	杉下見板張り、押縁:12×43-@455、一部:12×90-@910 裏面一部:木舞下地土塗壁漆喰仕上	木舞下地土塗壁仕上、一部杉下見板張り、押縁12×43-@455	木舞下地土塗壁仕上、一部(北面):杉板壁羽目張り
屋根	日本瓦葺、下屋、玄関・垂鉛引鉄板平葺ガルダール塗り	亜鉛引鉄板平葺ガルダール塗り	同左
軒裏	野地杉板、桂イラワン	化粧野地杉板、化粧桂イラワン	野地杉板、桂イラワン
露除	内玄関・生手板葺、出格子・トタン板葺		
建具	木建格子戸、硝子障子、水腰障子、雨戸・疎櫓舞良戸	硝子障子、障子、雨戸・疎櫓舞良戸	舞良戸、硝子障子
戸袋	鏡板・杉板南京張り@135、押縁20×20-@150、側板:杉@35	鏡板・杉皮張、竹縁押エ	
植	軒樋:塩ビ105φ目、竖樋:塩ビφ60		
腐鼠		床・板張り、袖腰壁:杉板壁張り	

構造 木造平家建

建築面積 107.76 M² 32.60 坪

床面積 103.74 M² 31.38 坪

内部仕上表

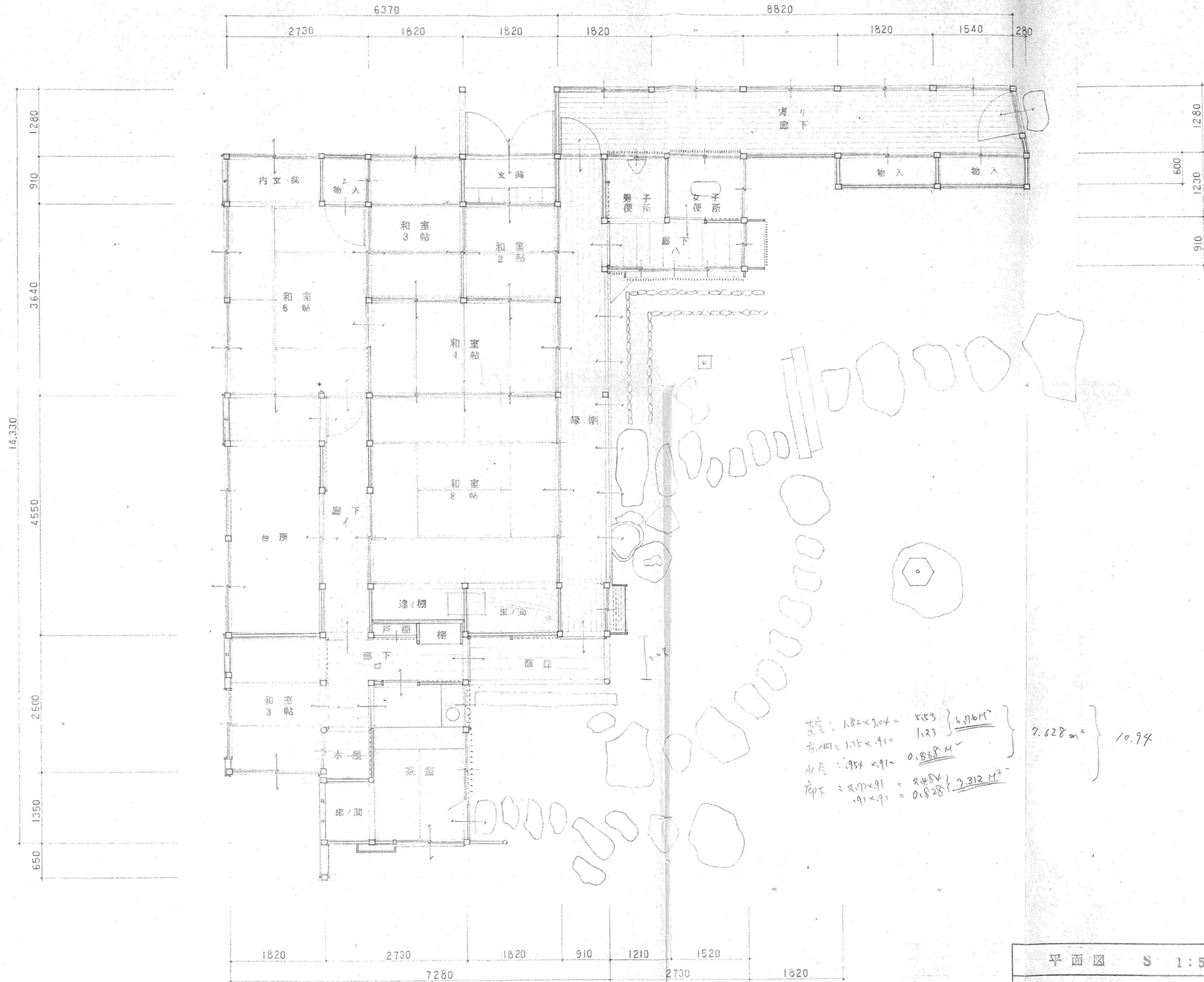
室名	床	(床高)	巾木	壁	天井	(竿縁)	(廻り縁)	(天井高)	備考	
玄関	石張り	-385	石張り	50	京壁	杉板竿縁天井	杉 15×21	杉 40×47	2505	式台・杉板 20×330 ^W
和室 2 帖	タミ	± 0			同上	同上	杉 18×24	杉 40×40	2400	長押 100 ^W
和室 3 帖	同上	〃	雑布ズリ		同上	同上	杉 15×21	〃	2075	
和室 4 帖	同上	〃	同上		同上	同上	〃	杉 40×47	2400	長押 100 ^W
和室 8 帖	同上	〃	同上		同上	同上	杉 27×21	杉 40×21 40×50 二重	2440	長押 100 ^W 、菱組子欄間
〃 床ノ間	同上	+115	同上		同上	同上	杉 15×21 丸	杉 40×40	2400	床框 95×115 漆塗、床柱・松、落し掛・杉
〃 遠棚	樟板	〃	同上		同上	樟板		〃	1690	遠し棚、樟 24×310 ^W
内玄関	モルタル塗	-400	モルタル塗	100	腰・杉板壁羽目張り 壁・漆喰塗	杉板竿縁天井	杉 15×21	〃	2340	
和室 8 帖	タミ	0	雑布ズリ		漆喰塗	同上	〃	〃	1960	
〃 物入	杉板張り	〃	同上		同上	同上	〃			巾着付
廊下	板張り	- 21	同上		同上	同上	〃	杉 40×47	2130	一部長押 100 ^W
台所	土間コンクリート金タ押エ	-330	モルタル塗	300	化粧パニヤ板張り	杉化粧パニヤ竿縁天井	杉 21×30	〃	2480	
和室 3 帖	タミ	± 0	雑布ズリ		漆喰塗	同上	〃	杉 40×38	2000	
廊下	板張り	-130	同上		同上	荒曳板 9×150 ^W 勾配天井	〃 35×35、φ35		1850 2240	
茶室	タミ	〃	細紙張り	230	同上	杉板 10 竿縁天井	〃 φ30～φ36	杉 φ30～φ45	1940	
〃 床ノ間	板床	- 60	雑布ズリ		同上	網代天井		〃 φ35	1730	床框 60×70、床板・杉、床柱・松丸太、落し掛・杉 30×70
縁側	板張り	- 24	同上		同上	杉板竿縁天井	杉 15×21	杉 40×47	2124	長押 100 ^W
廊下	樟板張り	〃	同上		同上	同上	〃	杉 40×40	2070	出格子
男子便所	同上	〃	同上		腰・杉板壁羽目張り 870 ^H 壁・漆喰塗	同上	〃	〃	2070	
女子便所	同上	+ 16	樟板	140	漆喰塗	同上	〃	〃	2035	
渡り廊下	18 縁甲板張り	-240	雑布ズリ		漆喰塗 一部・腰・杉板壁羽目板張り	野地杉板イラワン			1900 2400	
〃 物入	杉板張り	〃	同上		漆喰塗	同上			1650 1900	巾着付

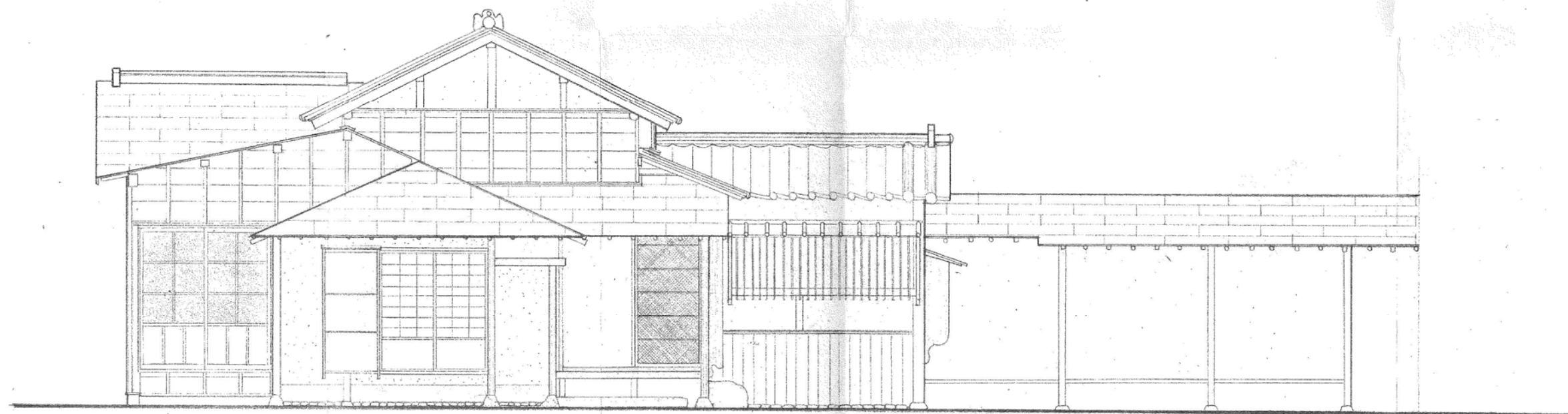
床高ハ、主室(和室8帖)ヲ基準(±0)トシタ。

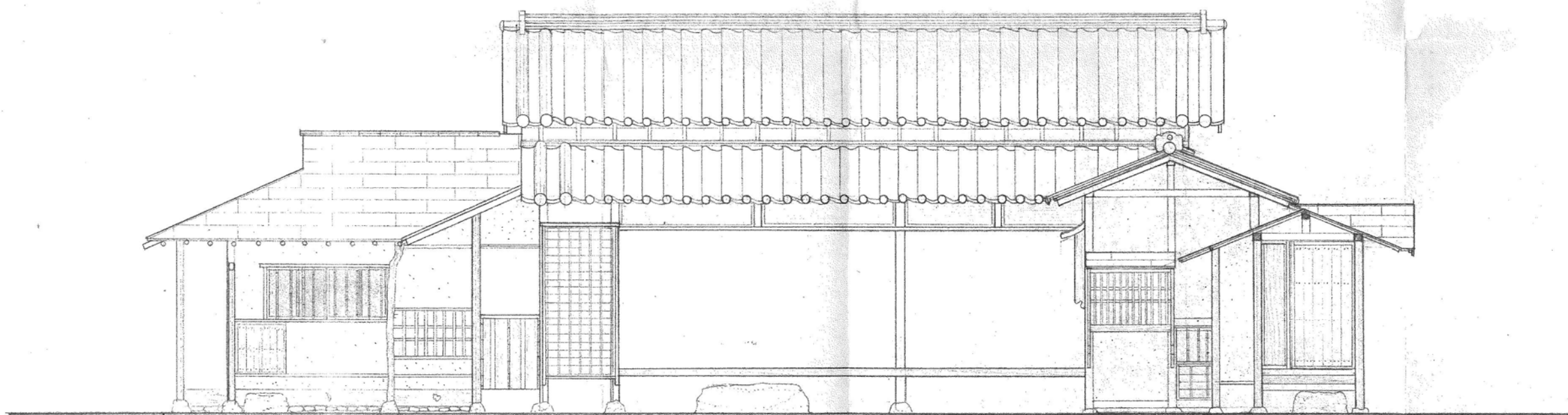
仕上表

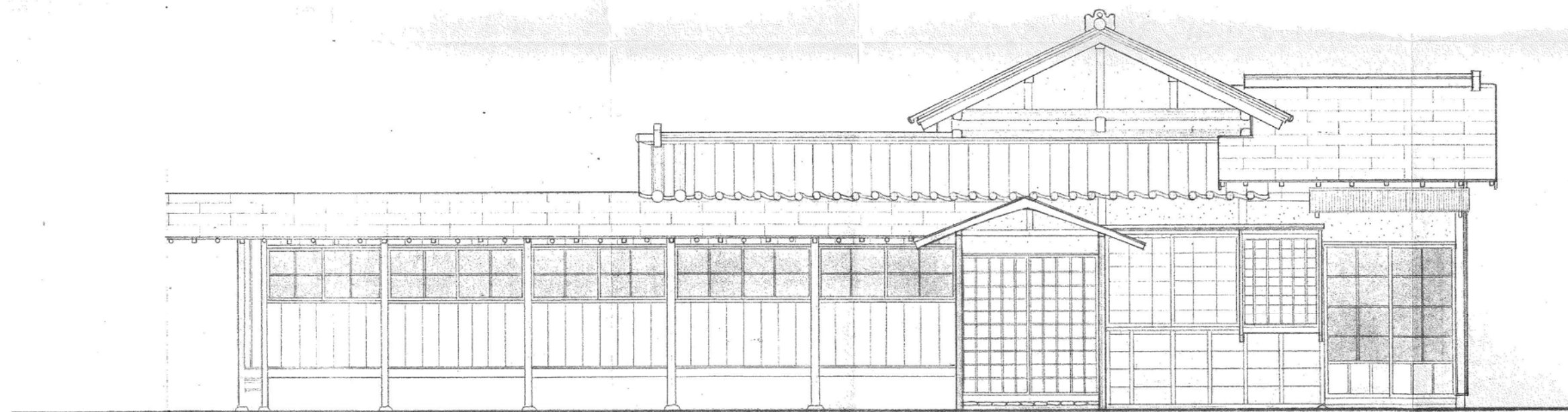
星溪寮

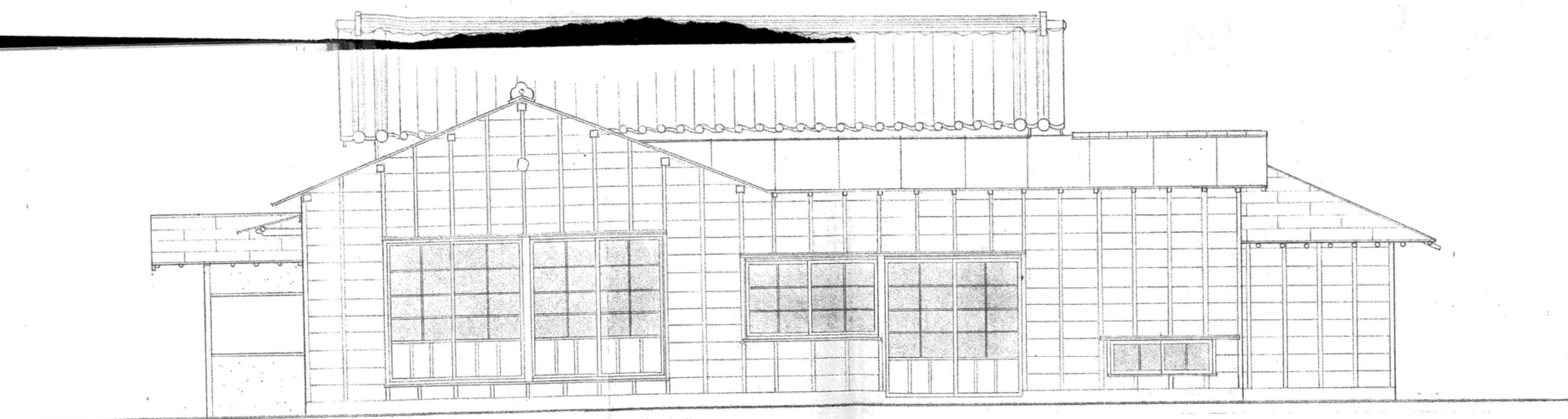
星溪園建物調査委員会











松風庵

松風庵	項目	仕 上	項目	仕 上	項目	仕 上
	基礎	玉石基礎	軒 裏	杉 化粧野地板 化粧檜		
	外 壁	土塗壁下地 シックイ塗 (面側:土塗壁)				
構造	木造平家建		戸 袋	鯨子下見板張		
建築面積	42.60 M2 (12.91 坪)	庇	建 具	木製ガラス戸、障子 雨戸:木製板戸		
床面積	42.60 M2 (12.91 坪)	樋				

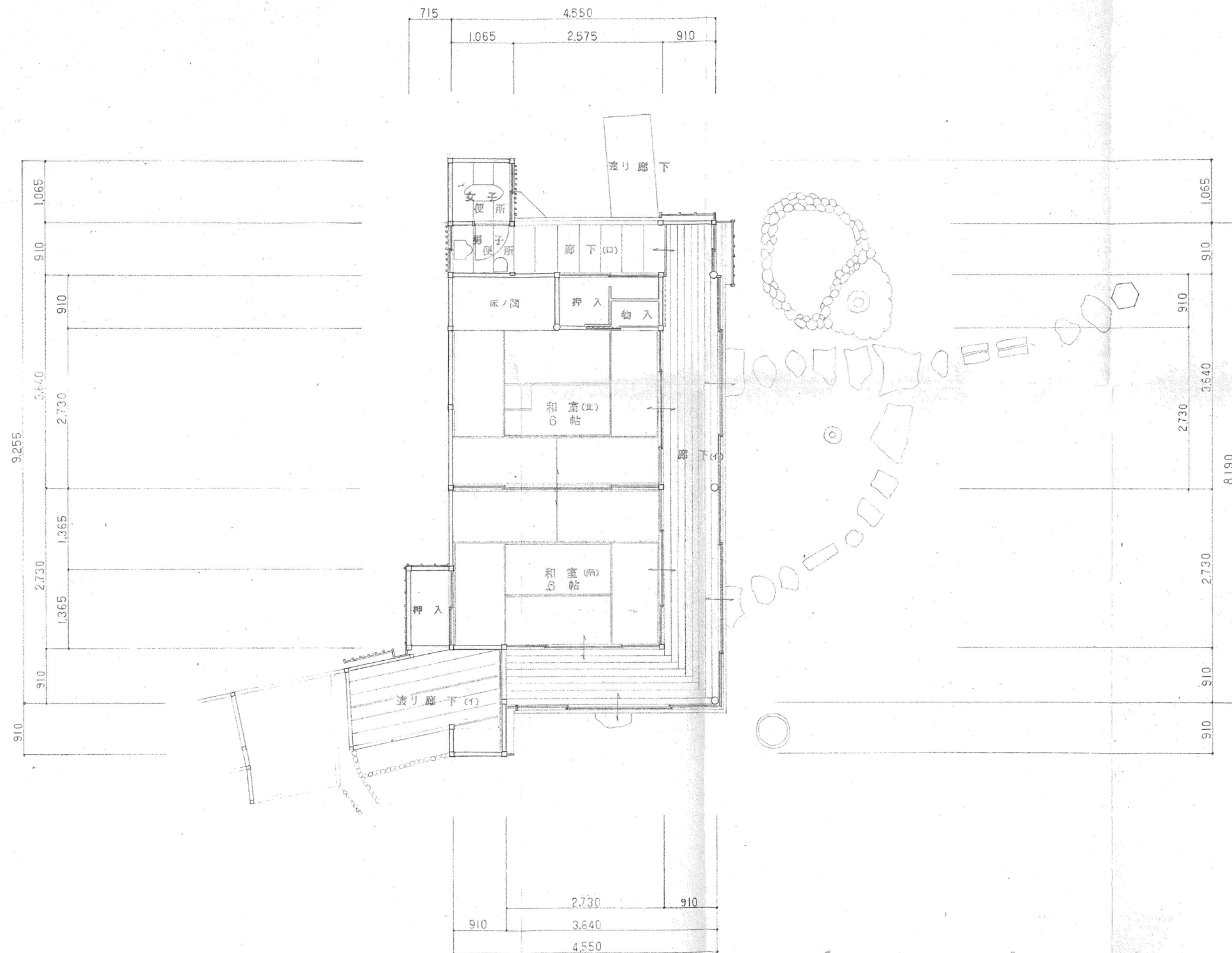
室名	床 (床高)		巾 木 (H)		壁	天 井 (竿 縁)		(回 縁) (天井高)		備 考
和 室 (南) 6 帖	荒床 杉⑨下地 99ミ敷	± 0	99ミ寄セ 40×45		土塗壁下地 ジュラク塗	杉板 ③ 羽重ね張	杉 21×21 @455	杉 40×45	2 257	壁釘
押 入	松 ⑥6 板張	± 0	雑布摺 12×7		土塗壁下地 シックイ塗	化粧野地板	化粧檜木 杉 21×27 @230			中棚付 (松 ⑥6.5)
和 室 (北) 6 帖	荒床 杉⑨下地 99ミ敷	± 0	99ミ寄セ 40×45		土塗壁下地 ジュラク塗	杉板 ③ 羽重ね張	杉 21×21 @455	杉 40×45	2 270	炉 壁釘
床の間	荒床 杉⑨下地 ウスベリ敷	+109	同 上		同 上	同 上	杉 21×21 @300	同 上		床柱:ム71φ105, 床框:ウルシ塗105×70, 落し掛:杉 42×70
物 入	松 ⑥6 板張		雑布摺 10×12		土塗壁下地 ジュラク塗 (廊下側: シックイ塗)	同 上	杉 21×21	同 上		間仕切:杉板 棚板:松板③30
廊 下 (イ)	松 ⑥12 小巾板張	- 45	雑布摺 40×45		土塗壁下地 シックイ塗	杉板 ③ 羽重ね張	杉31×39 竹φ30 @227.5 交互			額
(ロ)	松 ⑥15 板張	- 45	同 上		(便所側:杉板張) 同 上	同 上	同 上			男便所, 手洗 押入 (中棚:松 ⑥6.5)
渡り廊下 (イ)	松 ⑥18 板張	- 45	同 上		同 上	化粧野地板	化粧檜木 磨丸入φ40 杉 27×30 @300 交互			下駄箱 額
便 所	松 ⑥15 板張	± 0	杉板 ③30	190	土塗壁下地 シックイ塗	杉板 ③ 羽重ね張	杉31×39 竹φ30 @227.5 交互			
渡り廊下 (ロ)	コンパネ⑥12					スダレ				

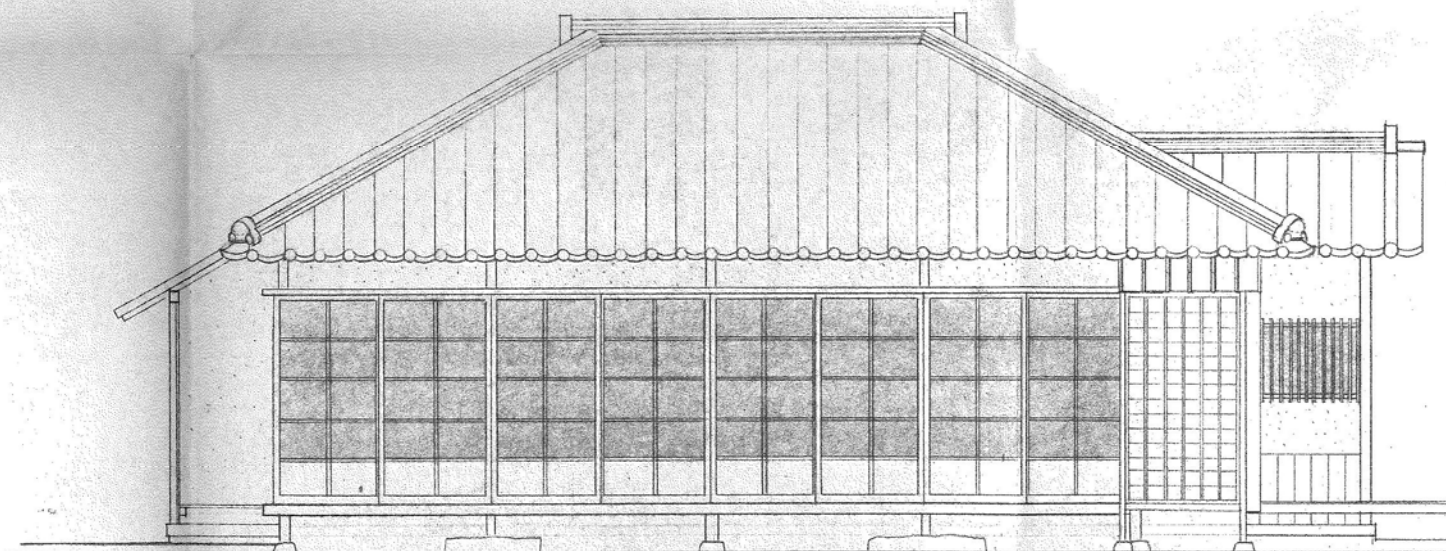
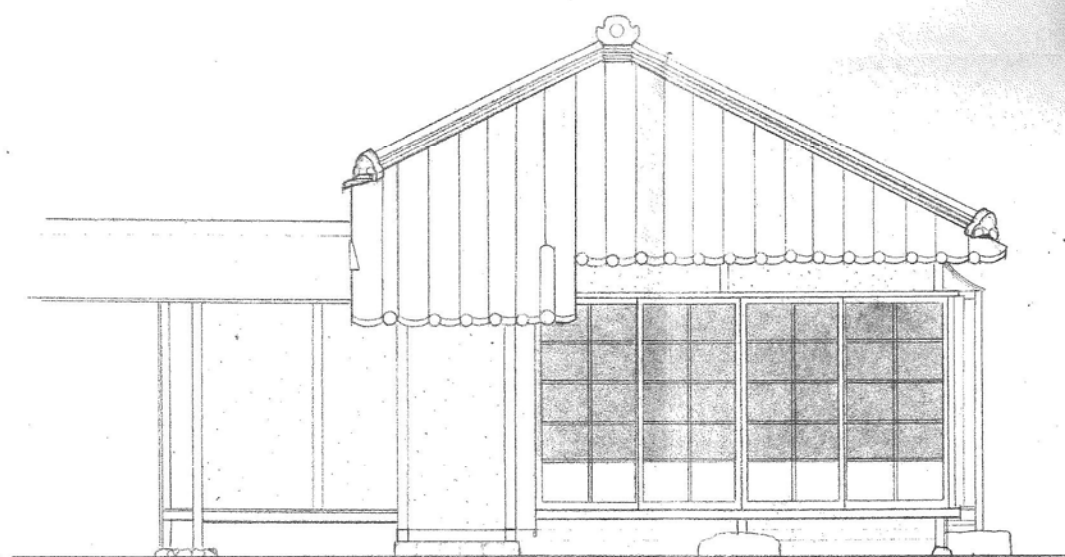
仕 上 表

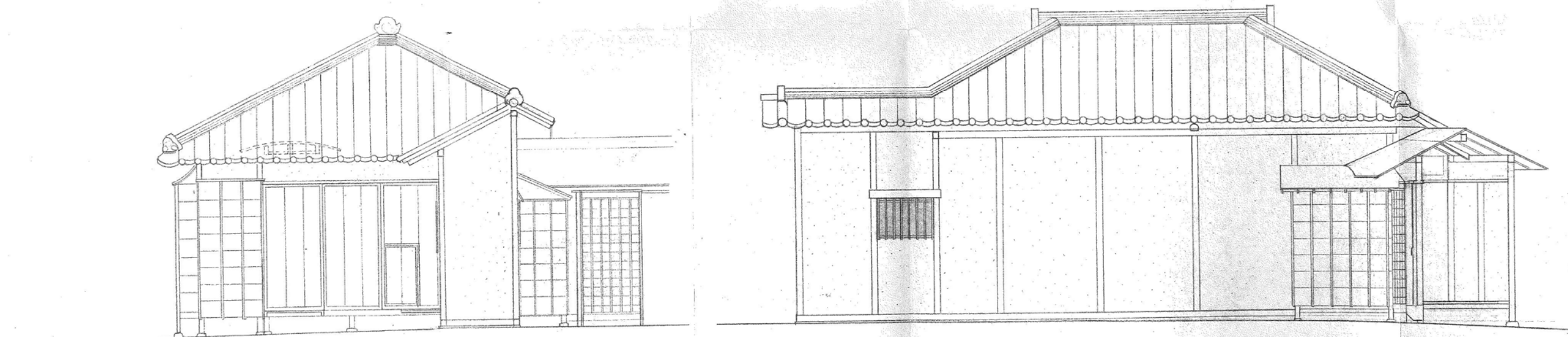
松 風 庵

星溪園建物調査委員会

201







平家部

高床部

積翠閣

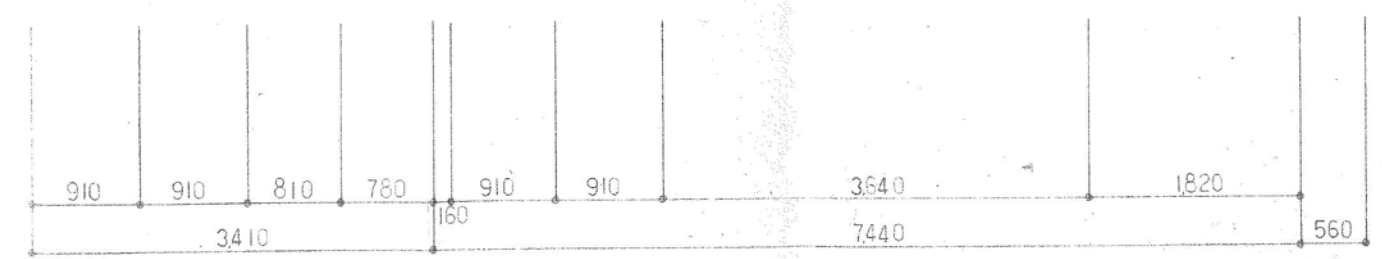
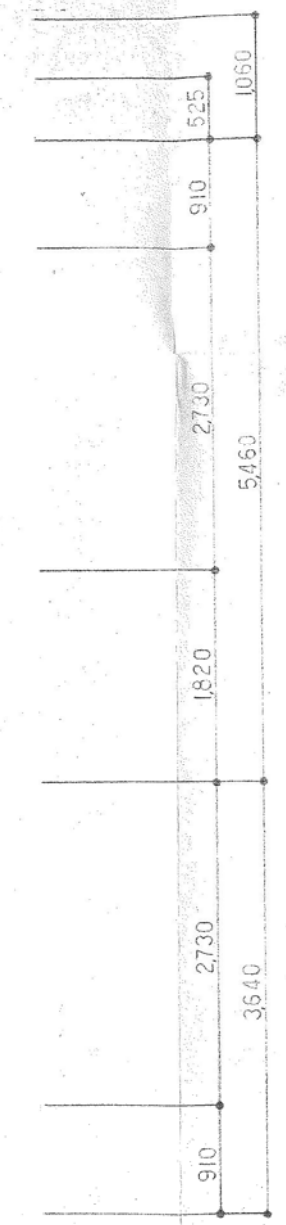
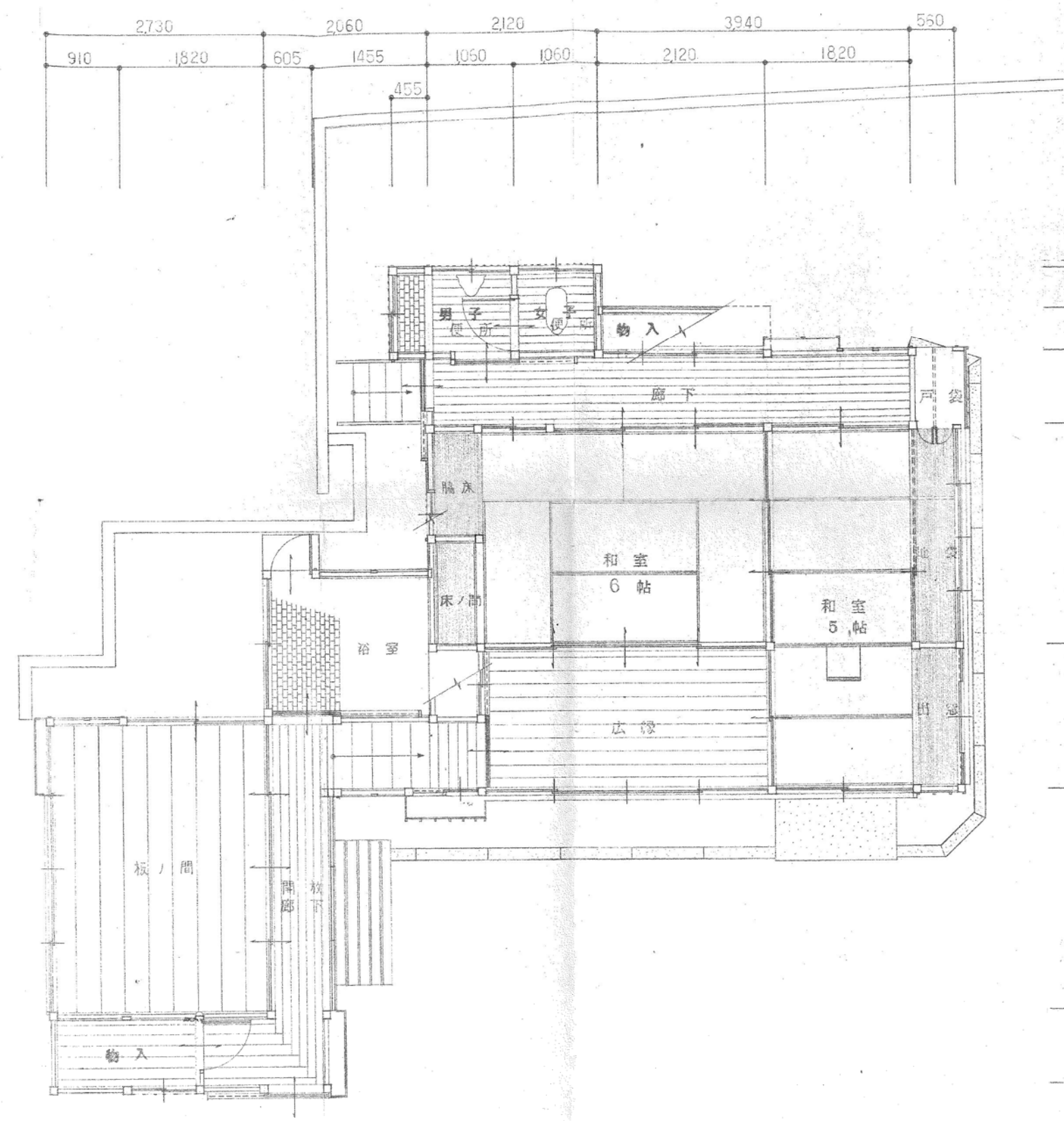
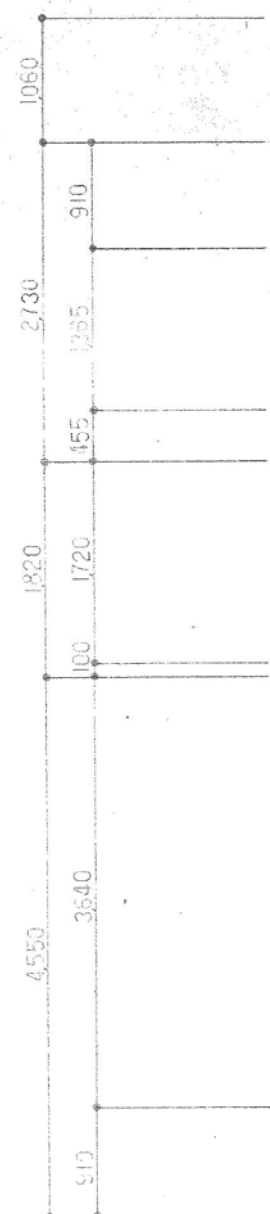
外 部 仕 上 表				
基 礎	大谷石 及 瓦石		コンクリート布基礎	
外 壁	土塗壁下地 杉下見板張 一部 シロくい塗		土塗壁下地 杉下見板張 一部 シロくい塗	
屋 根	亜鉛引鉄板平葺 コー尔特ール塗		日本瓦葺 一部 亜鉛引鉄板平葺 コー尔特ール塗	
庇	同 上		亜鉛引鉄板平葺 コー尔特ール塗	
樋	軒樋・竪樋……亜鉛引鉄板 O.P.		軒樋・竪樋……亜鉛引鉄板平葺 O.P.	
	杉化粧野地板張		杉化粧野地板張	
建 具	木製ガラス戸 障子 雨戸……木製		木製ガラス戸 雨戸……木製	
戸 袋	杉ささら子下見板張		杉ささら子下見板張	

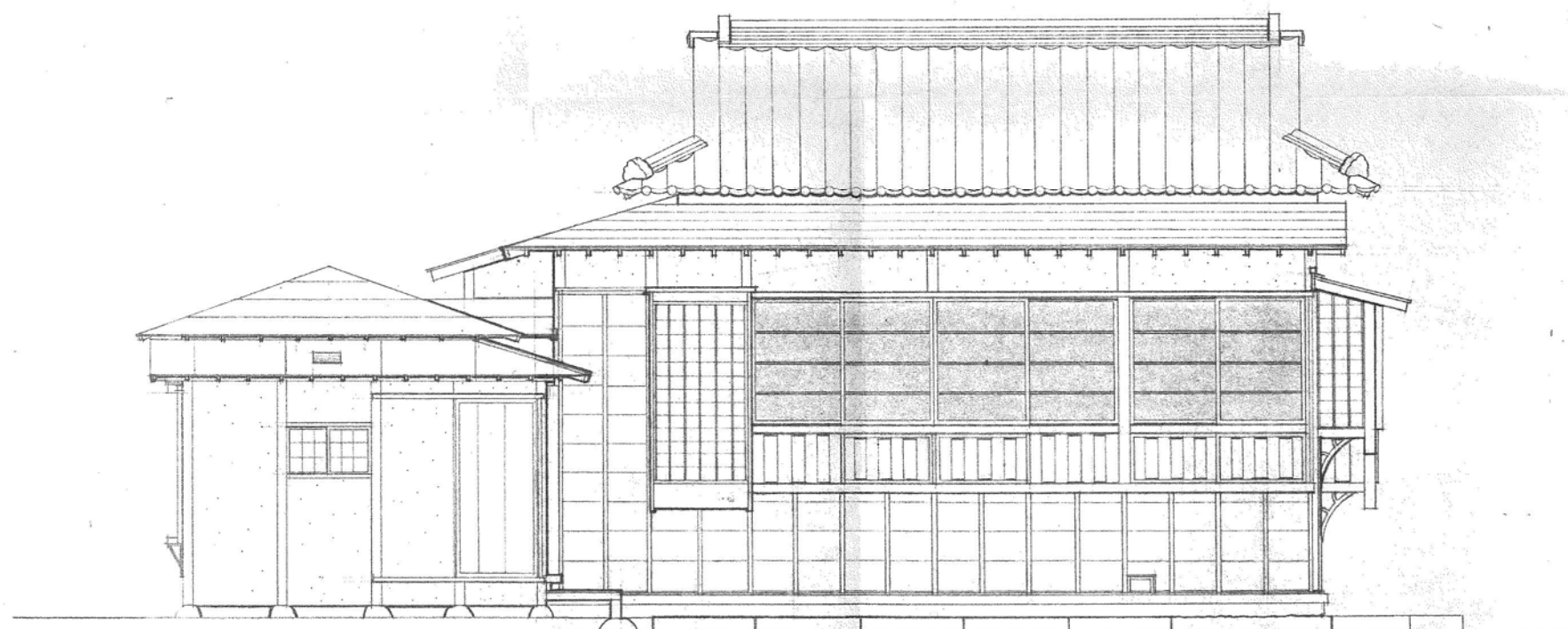
内部仕上表

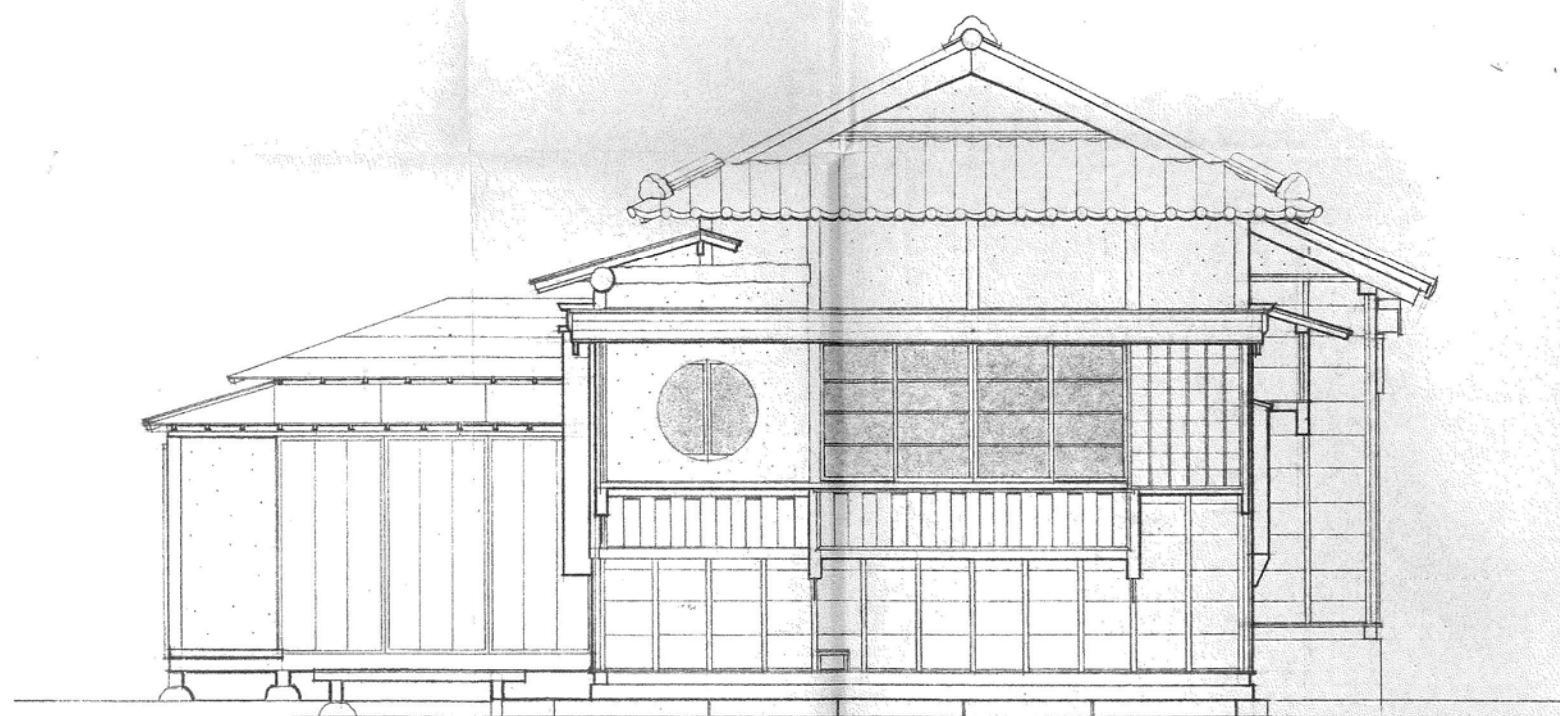
[illegible]

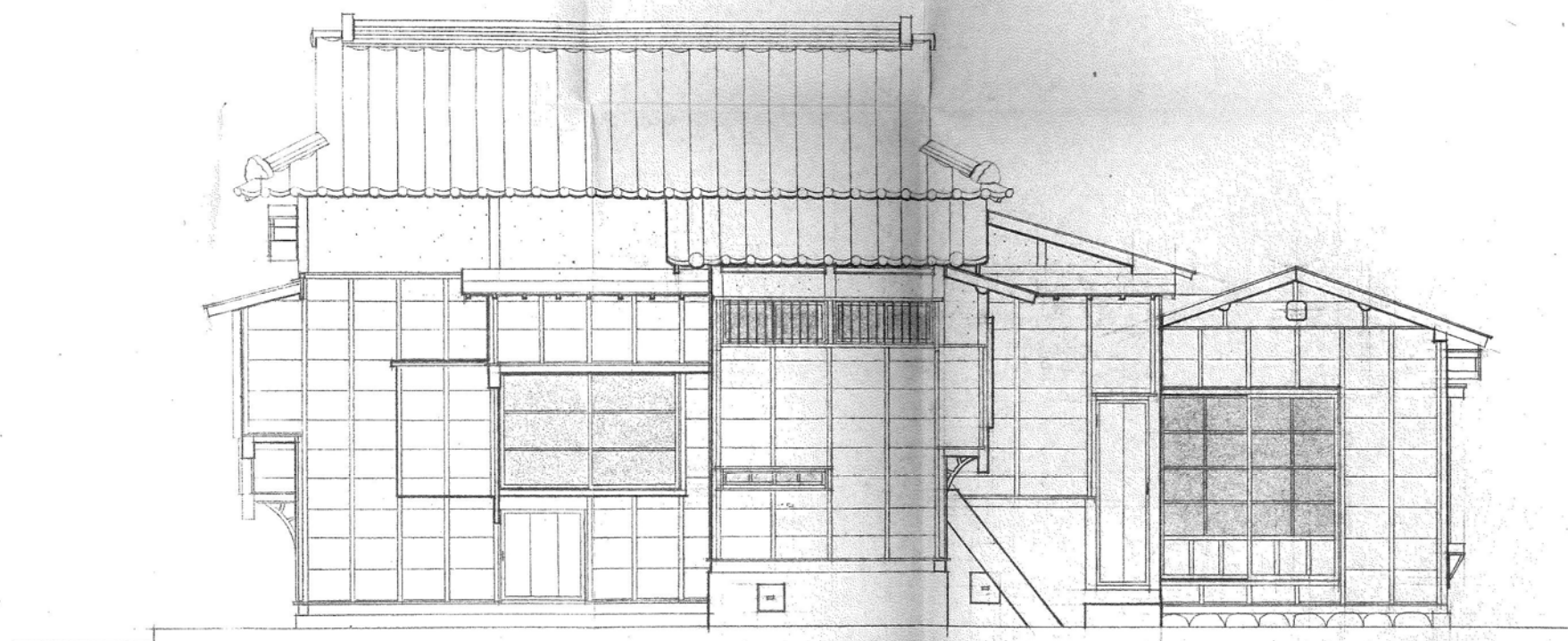
表上仕

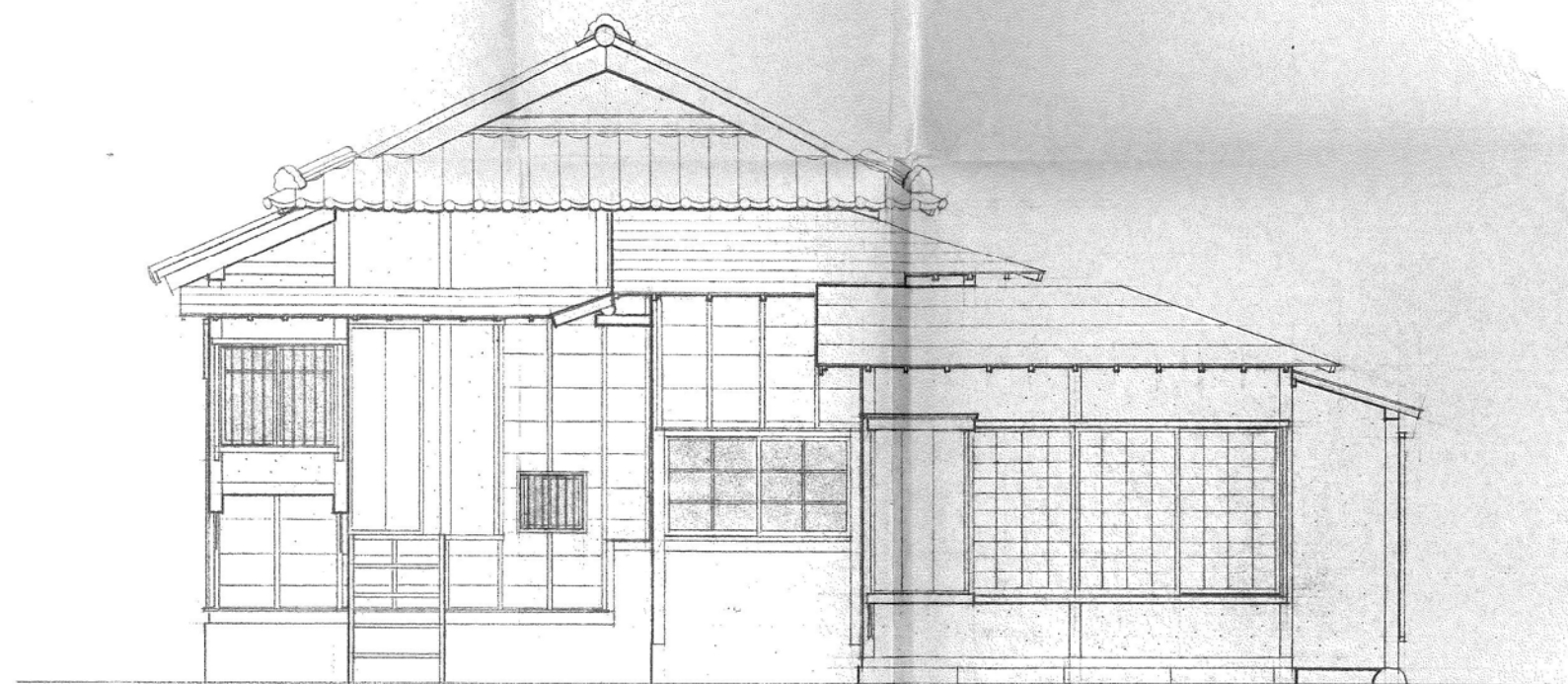
積翠閣











VIII 写 真

1. 星溪寮

2. 松風庵

3. 積翠閣

※ 写真内容

外 観

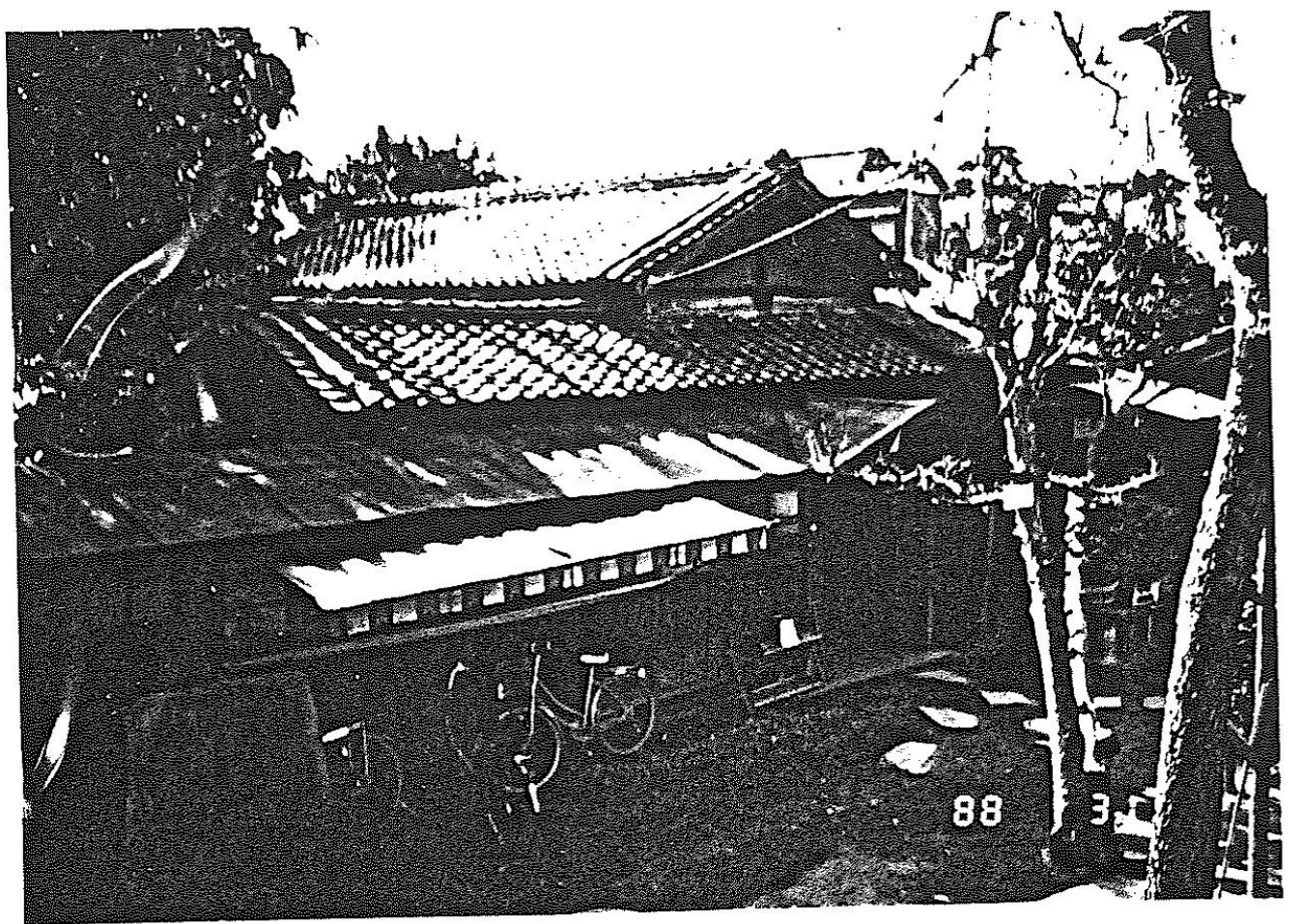
室 内

床 下

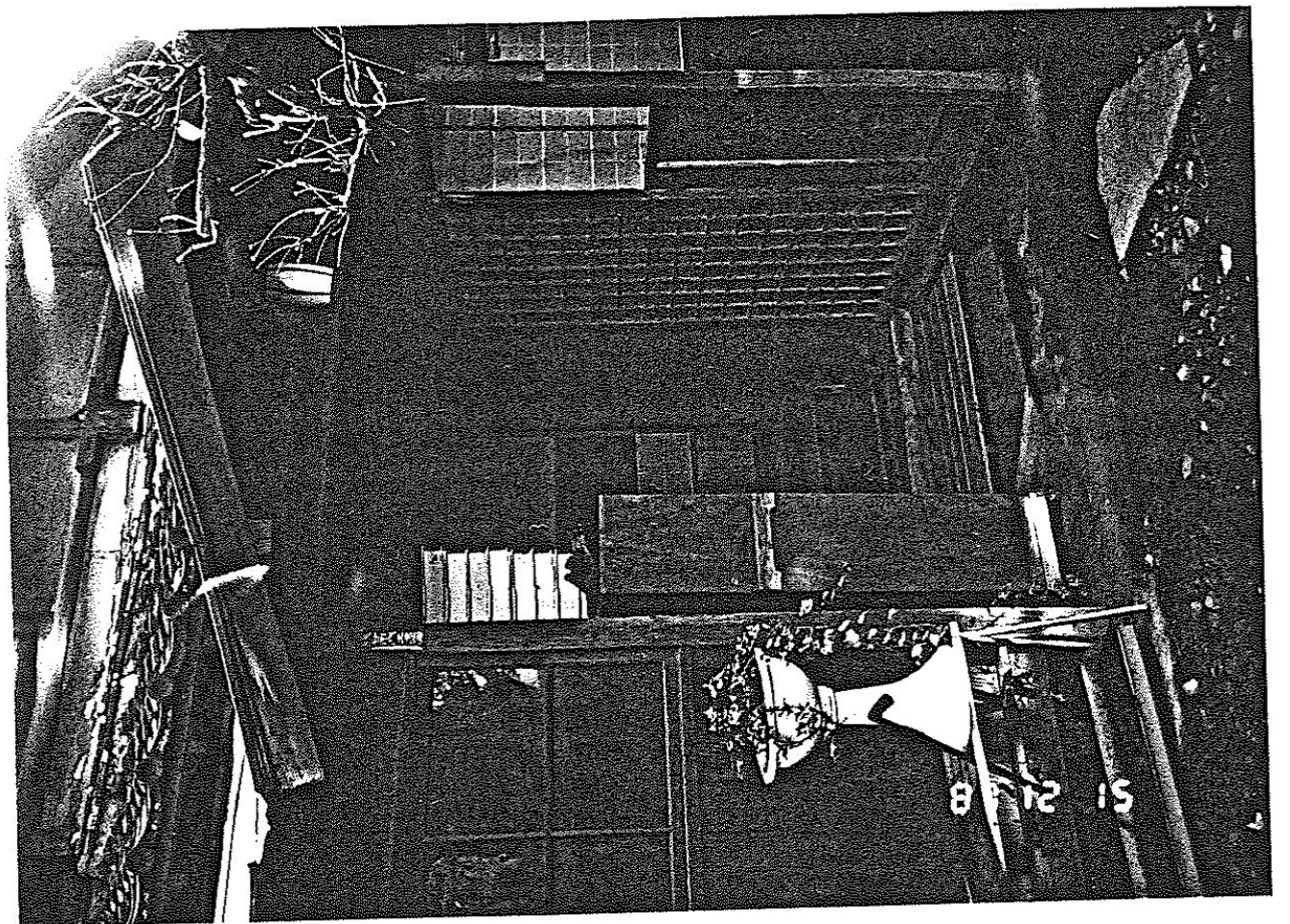
小 屋

破損状況

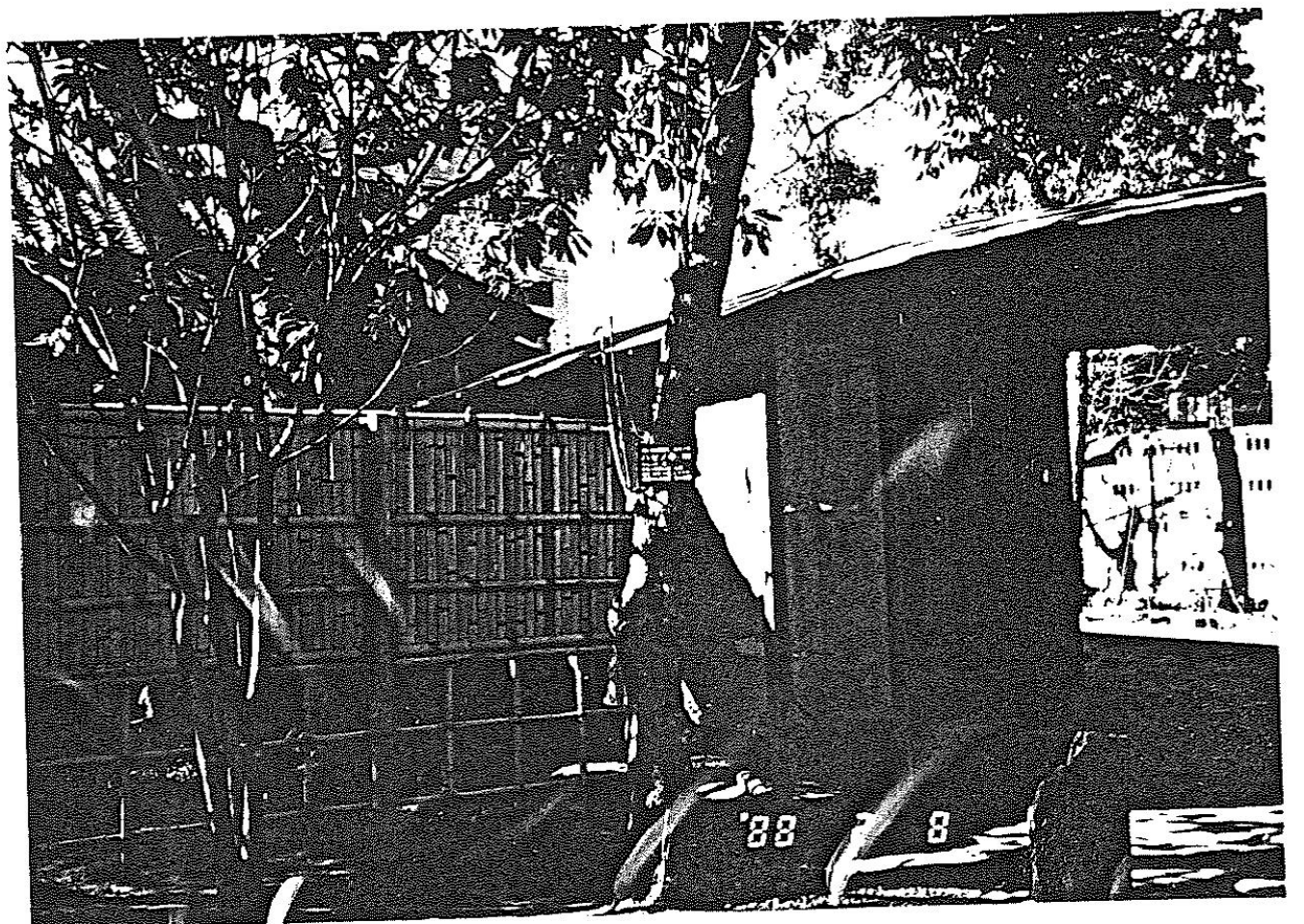
星 溪 寮
北側 外観



玄関 入口

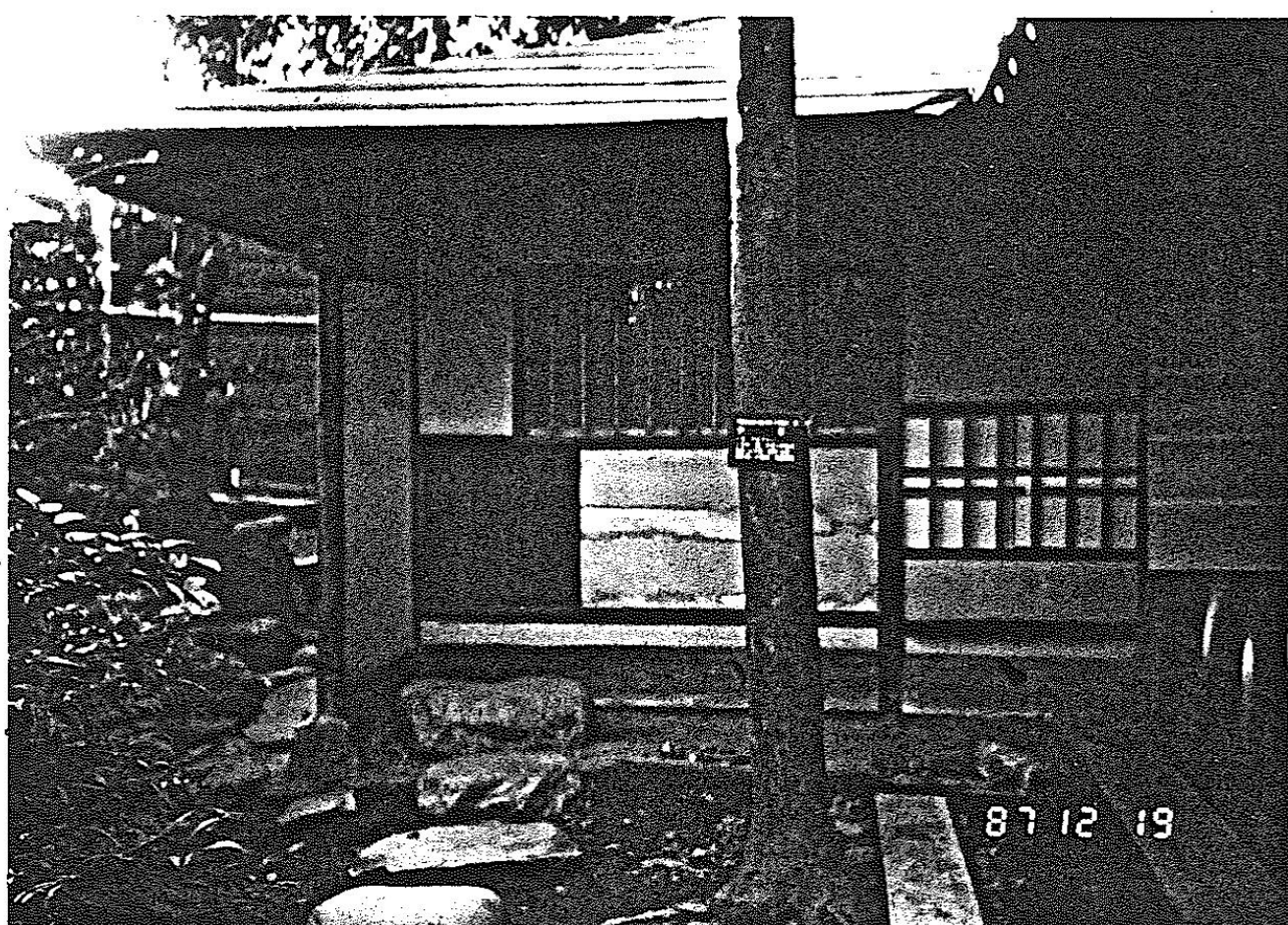


渡廊下
松月庵との接続

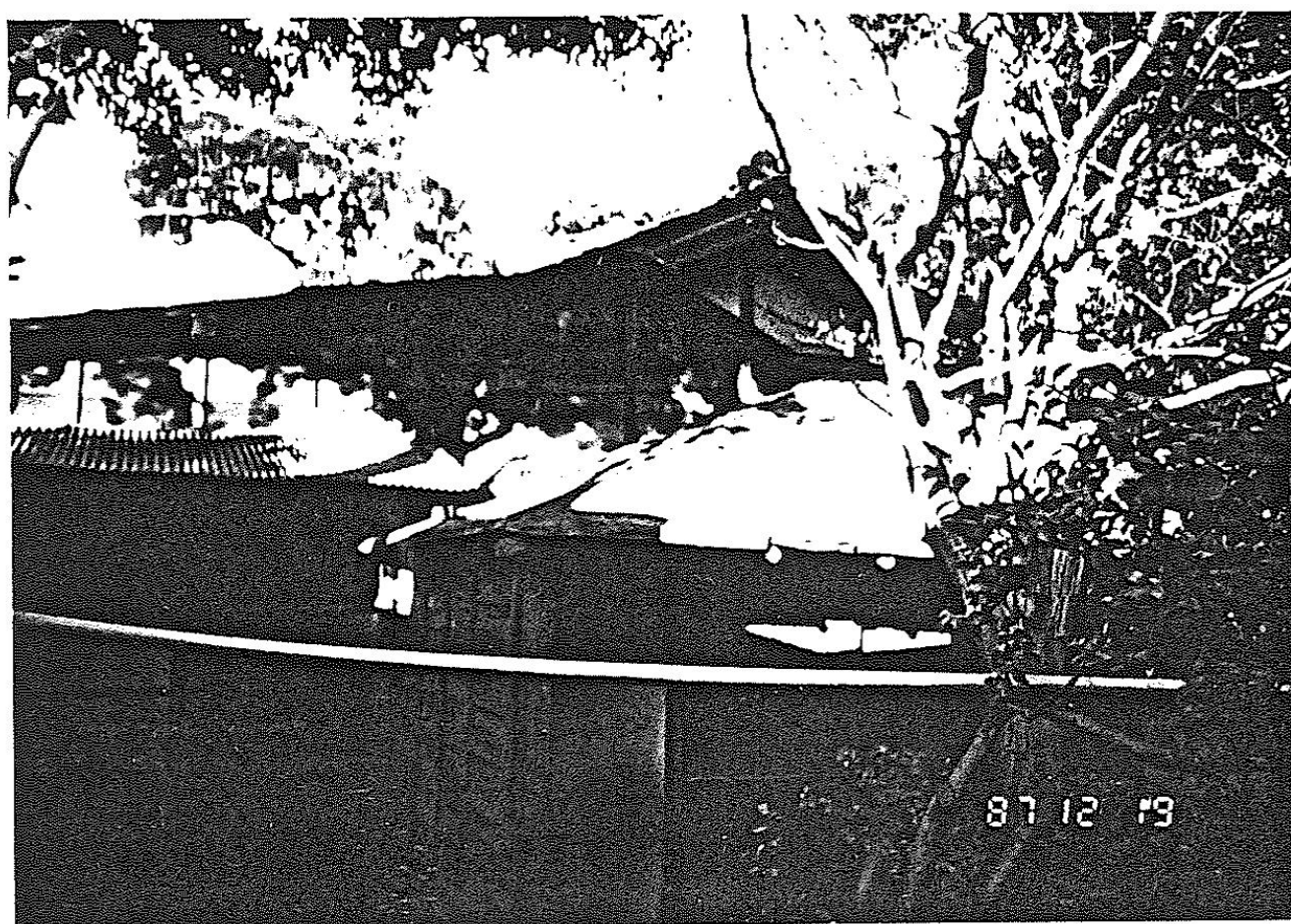




星 溪 寮
東側外觀



茶室
にじり口



南側外觀

3

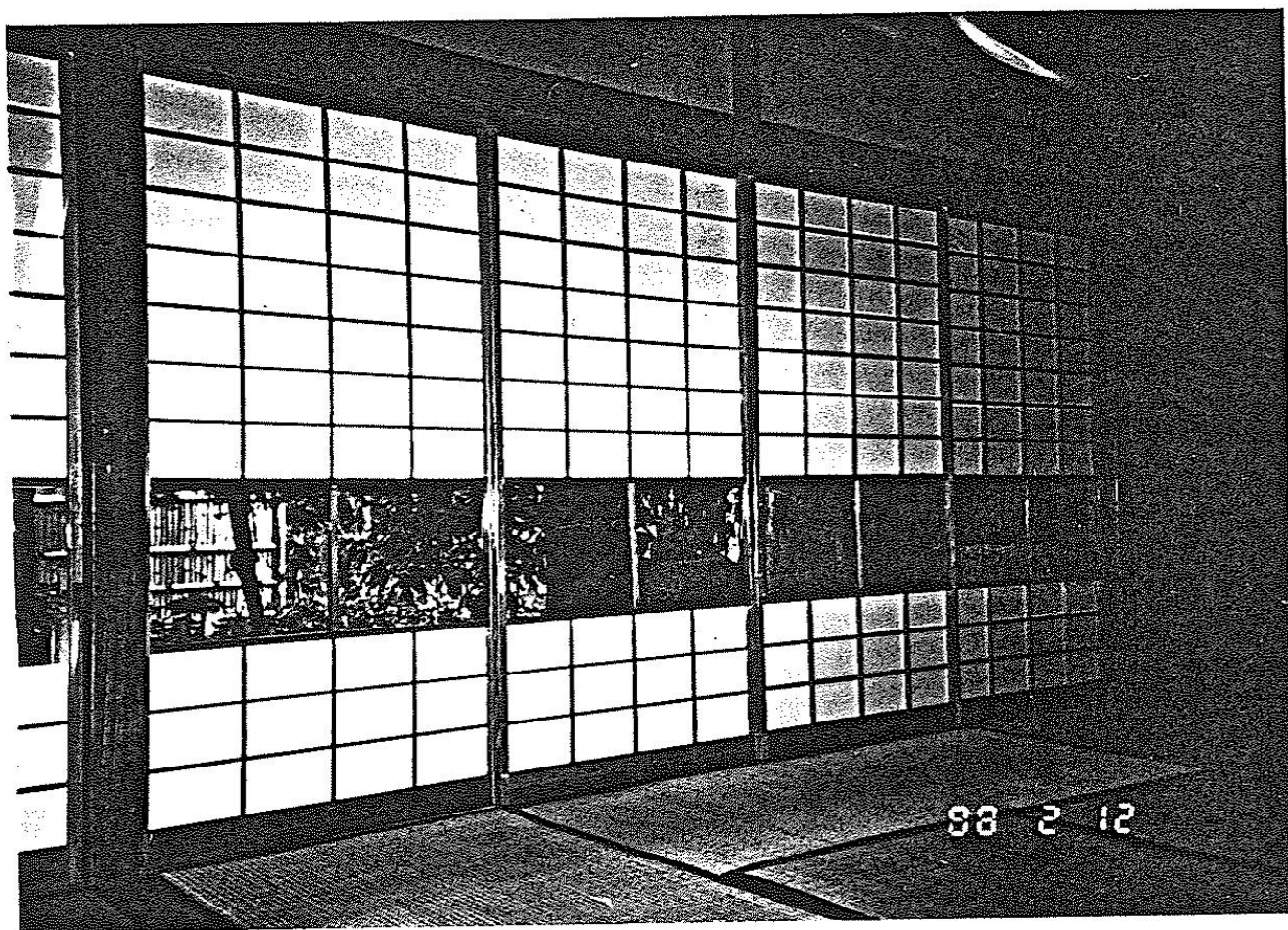
星溪寮

主室8帖

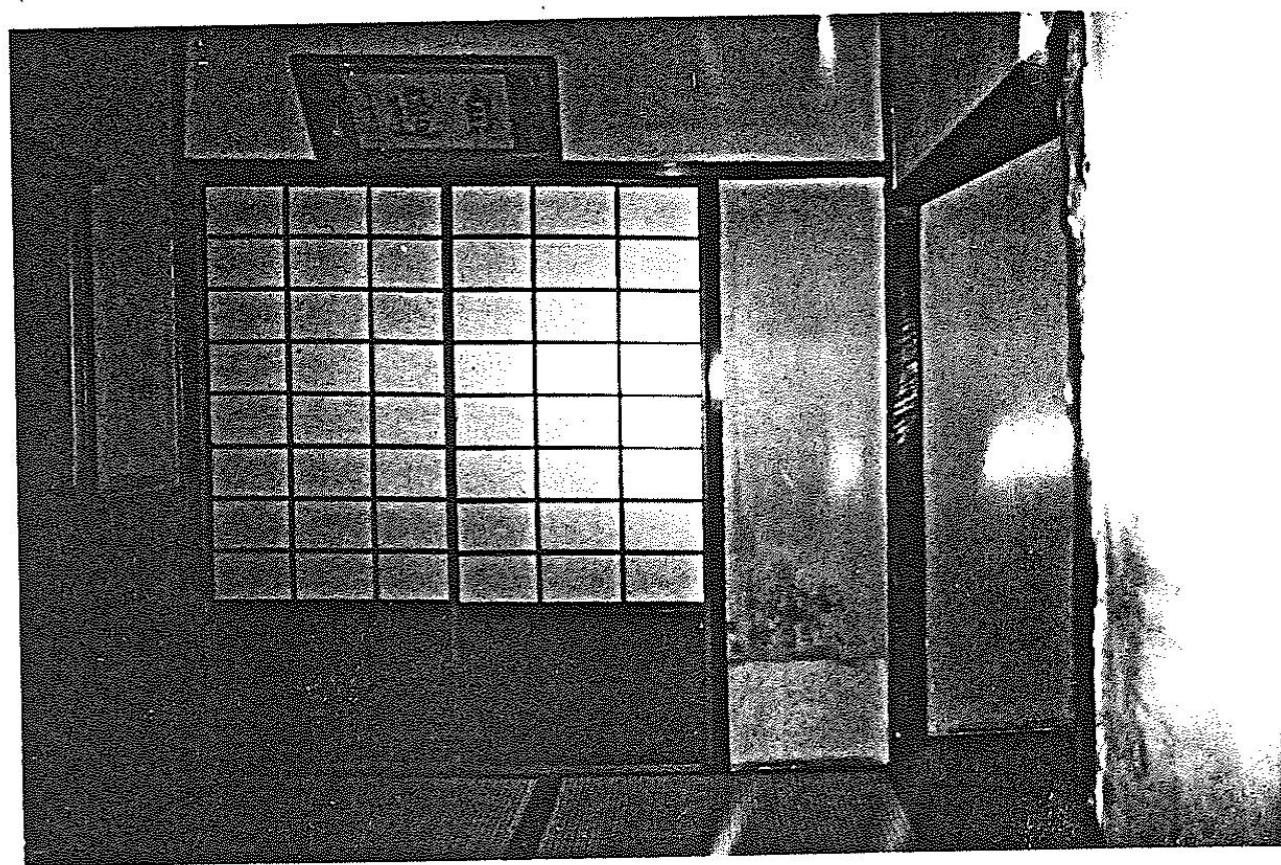
床内、床脇



主室8帖

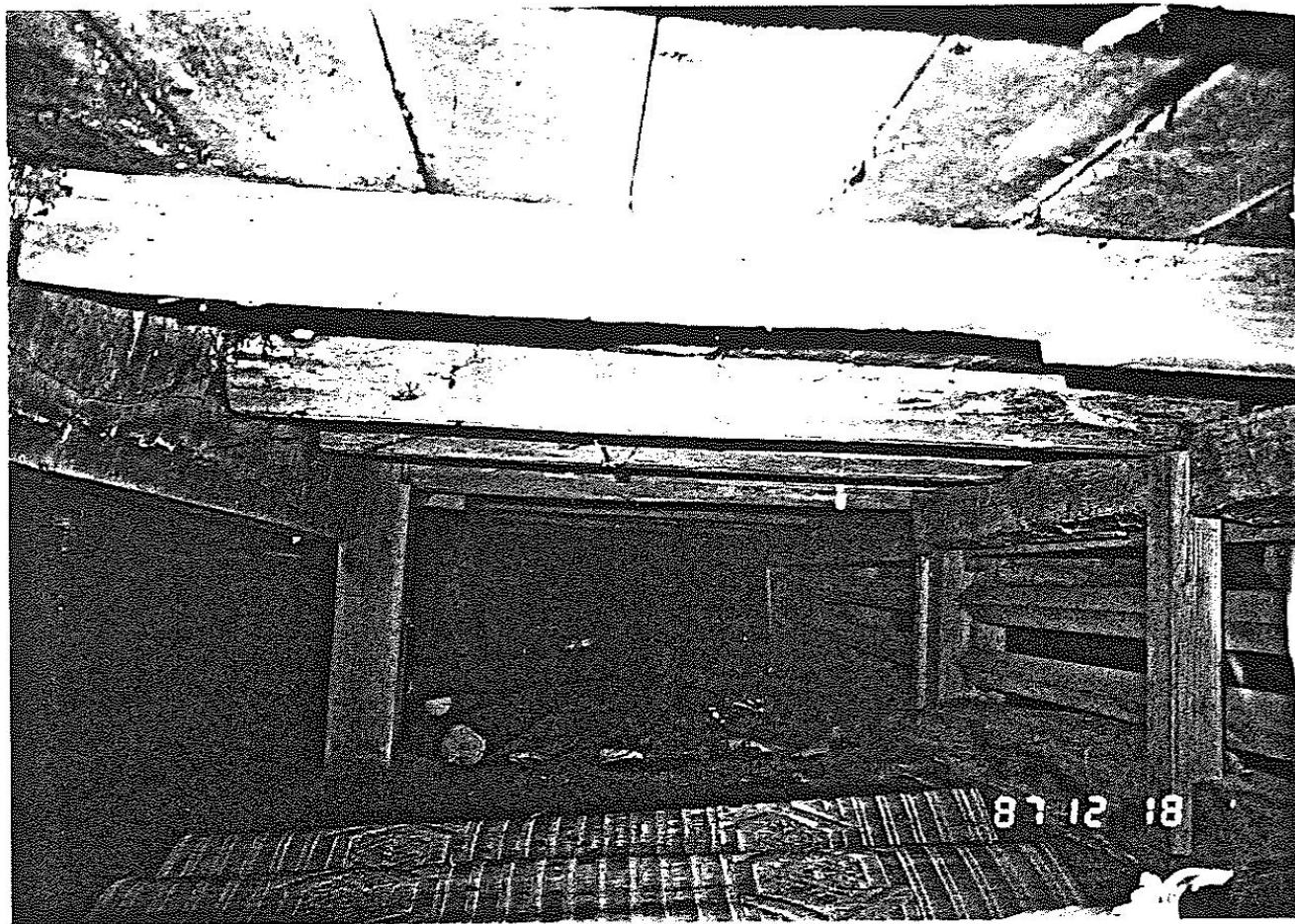


茶室





夕
星溪寮
和室床下



縁側床下

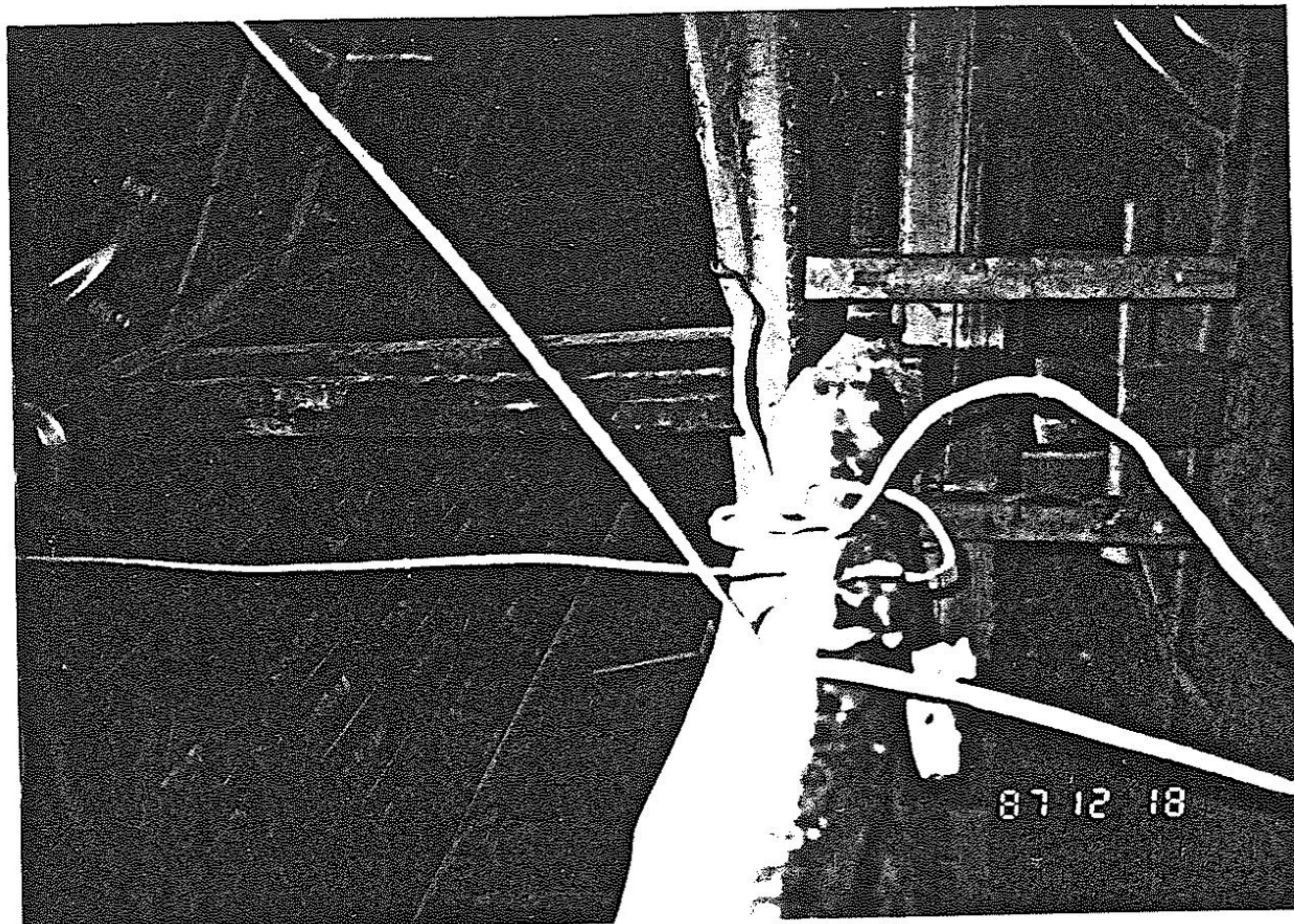


渡り廊下、床下
床板と根太の
カスガイ止め

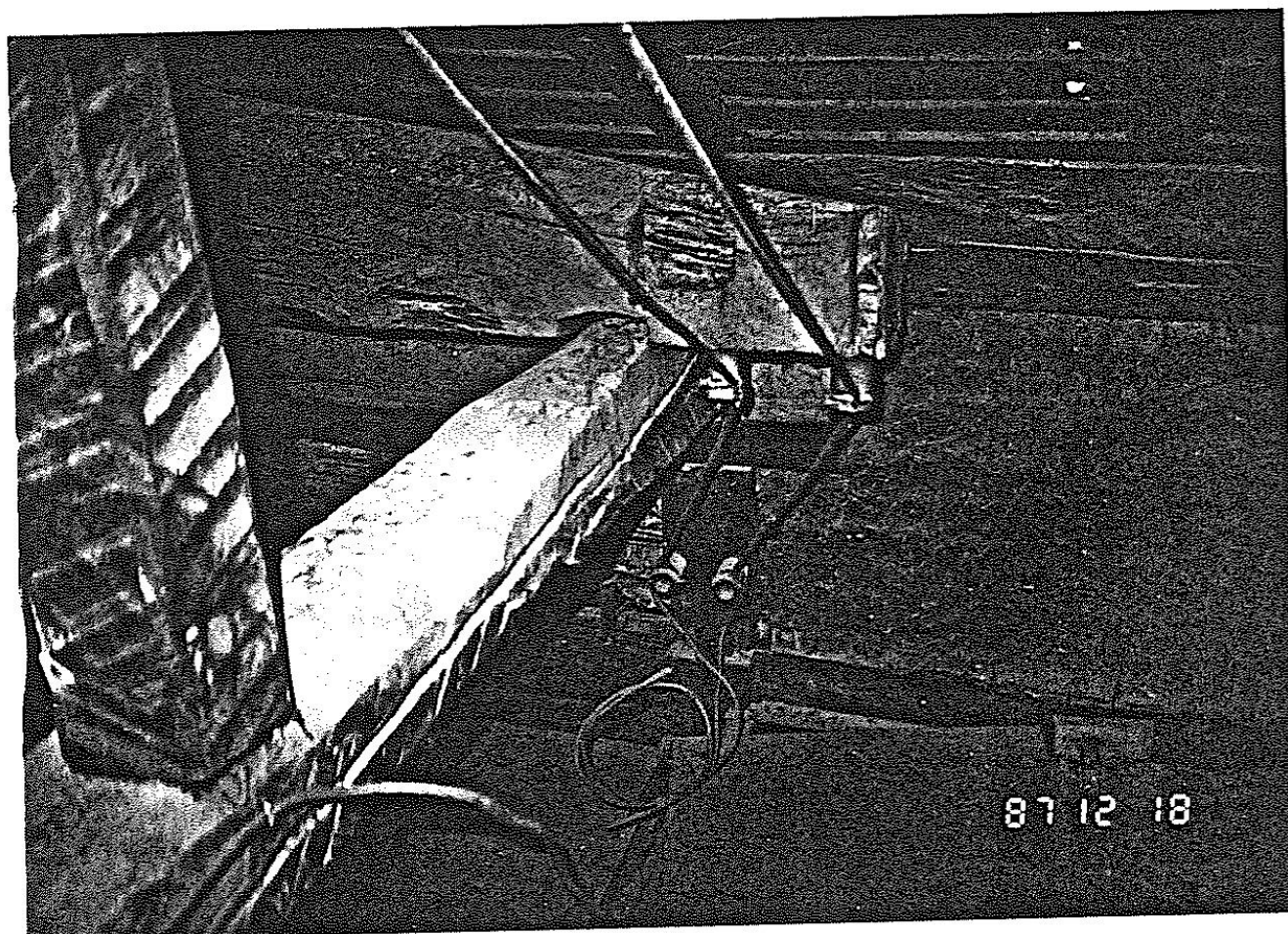
5

星 誤 寮

小屋組

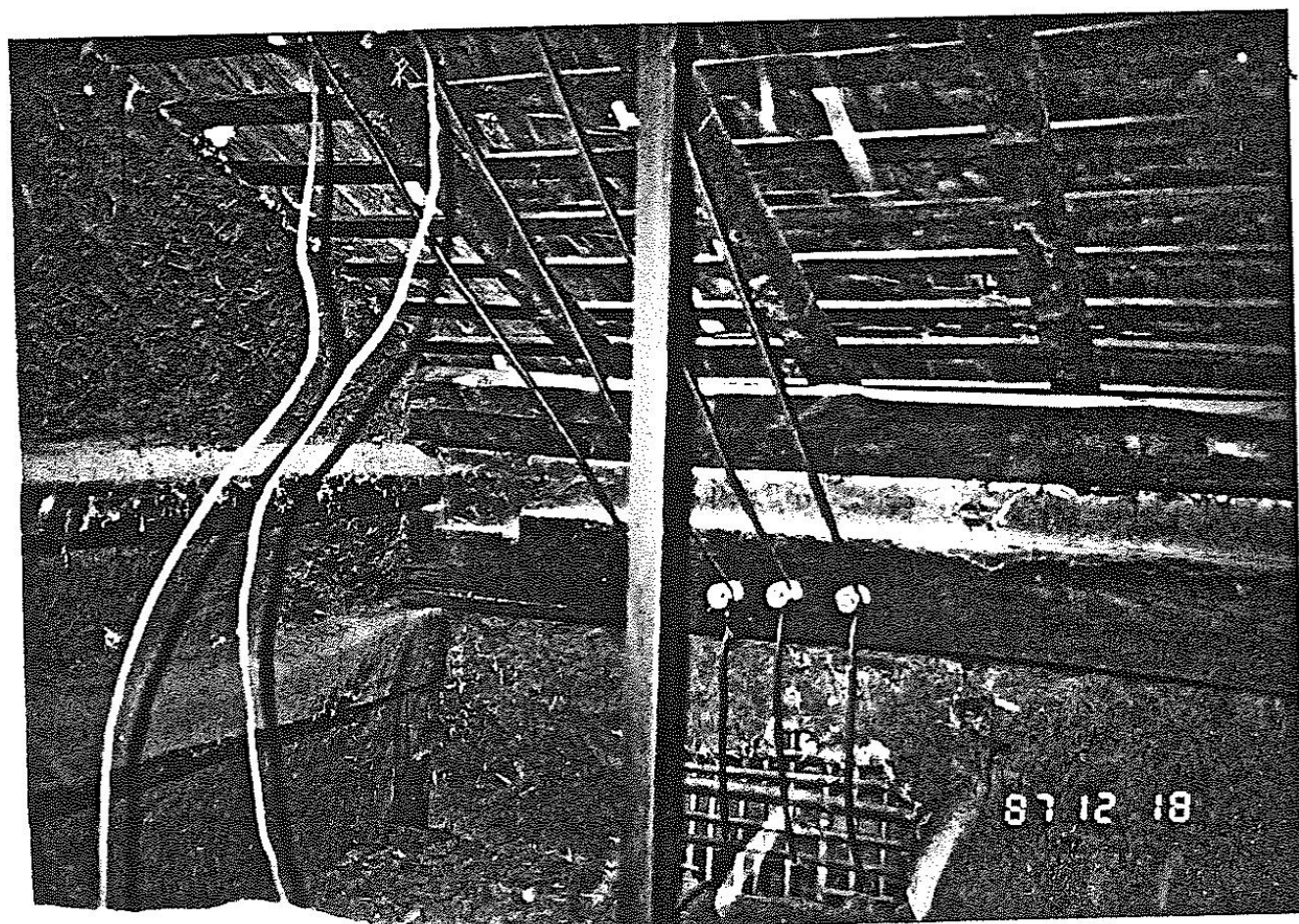


小屋組



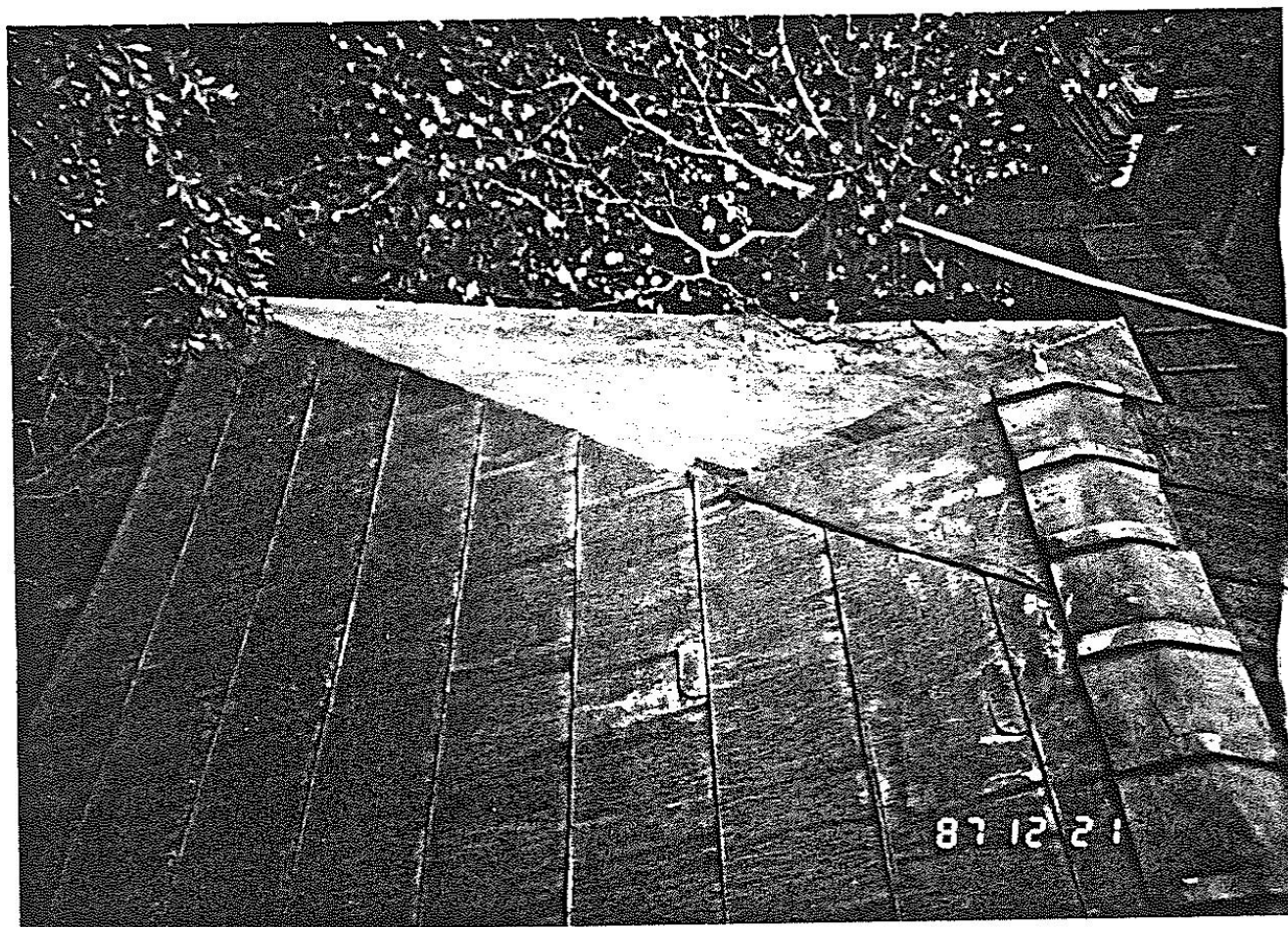
天井下

壁の欠損部

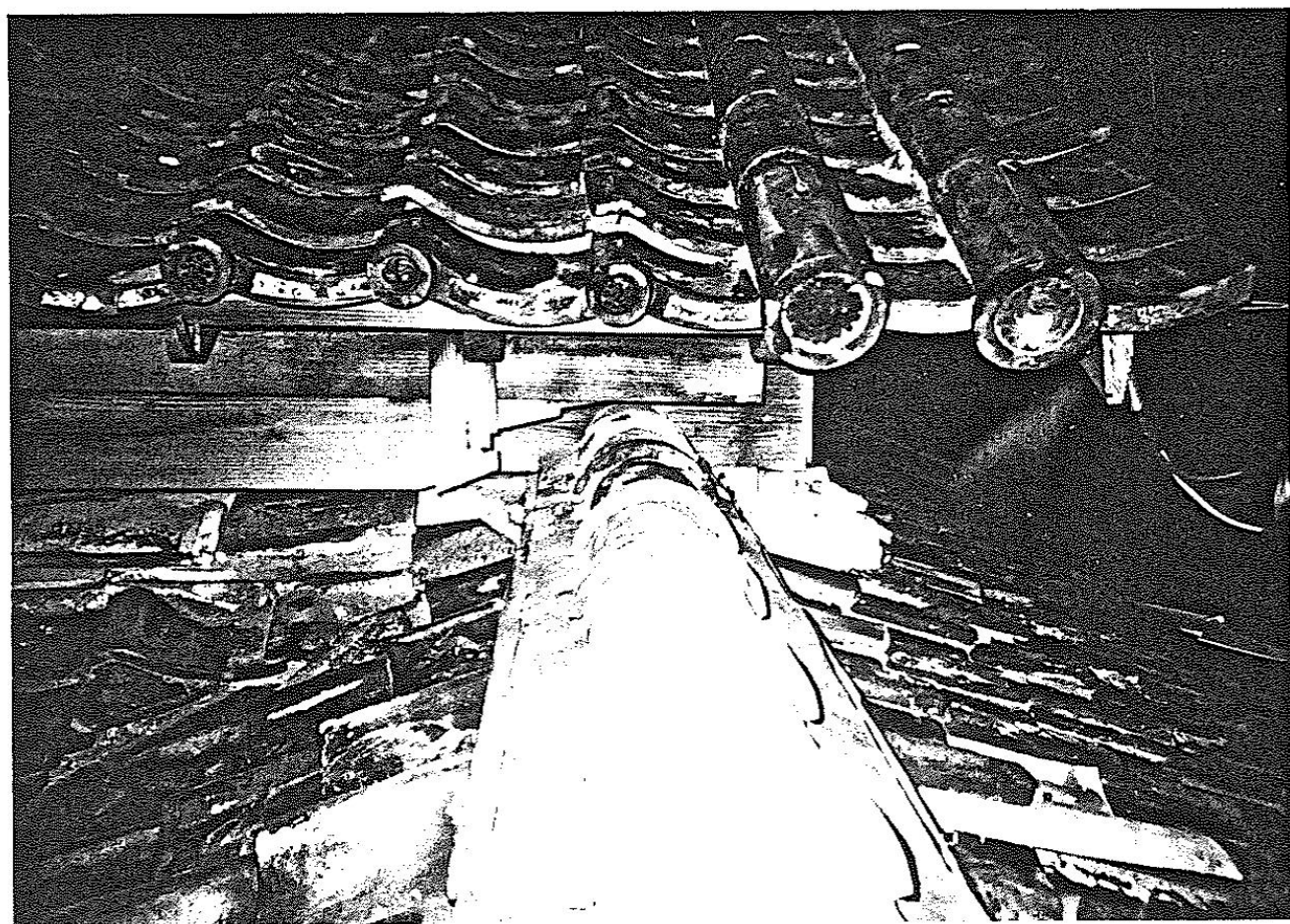


星 溪 寮

日本瓦の傷み
亜鉛引鉄板の
改造後の簡易
な仕上がり



茶室屋根
亜鉛引鉄板の
サビ



日本瓦のカラー
鉄板の補修

7

三 茶室

土塼壁

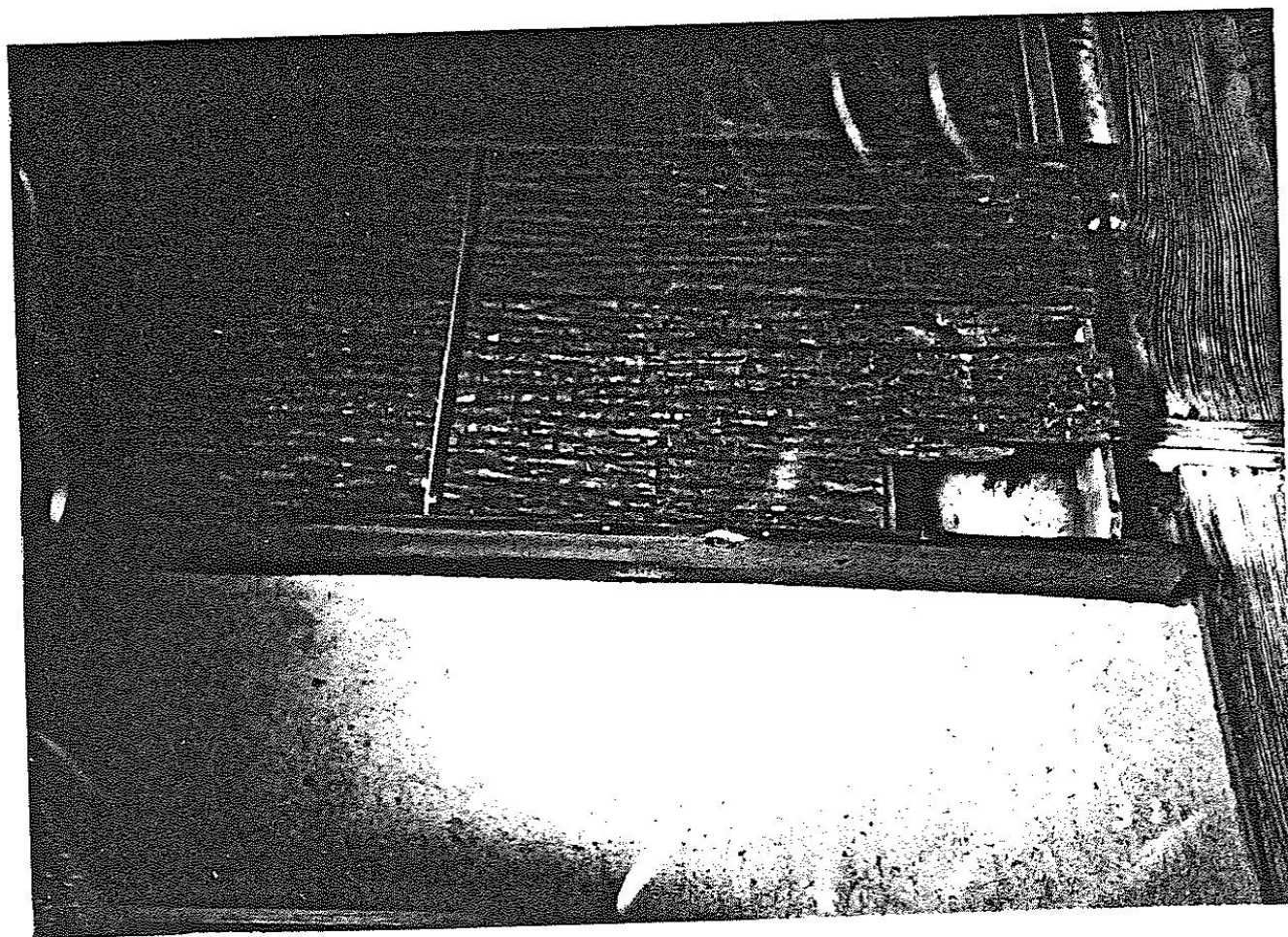
足廻り部の傷み



土塼壁の傷み

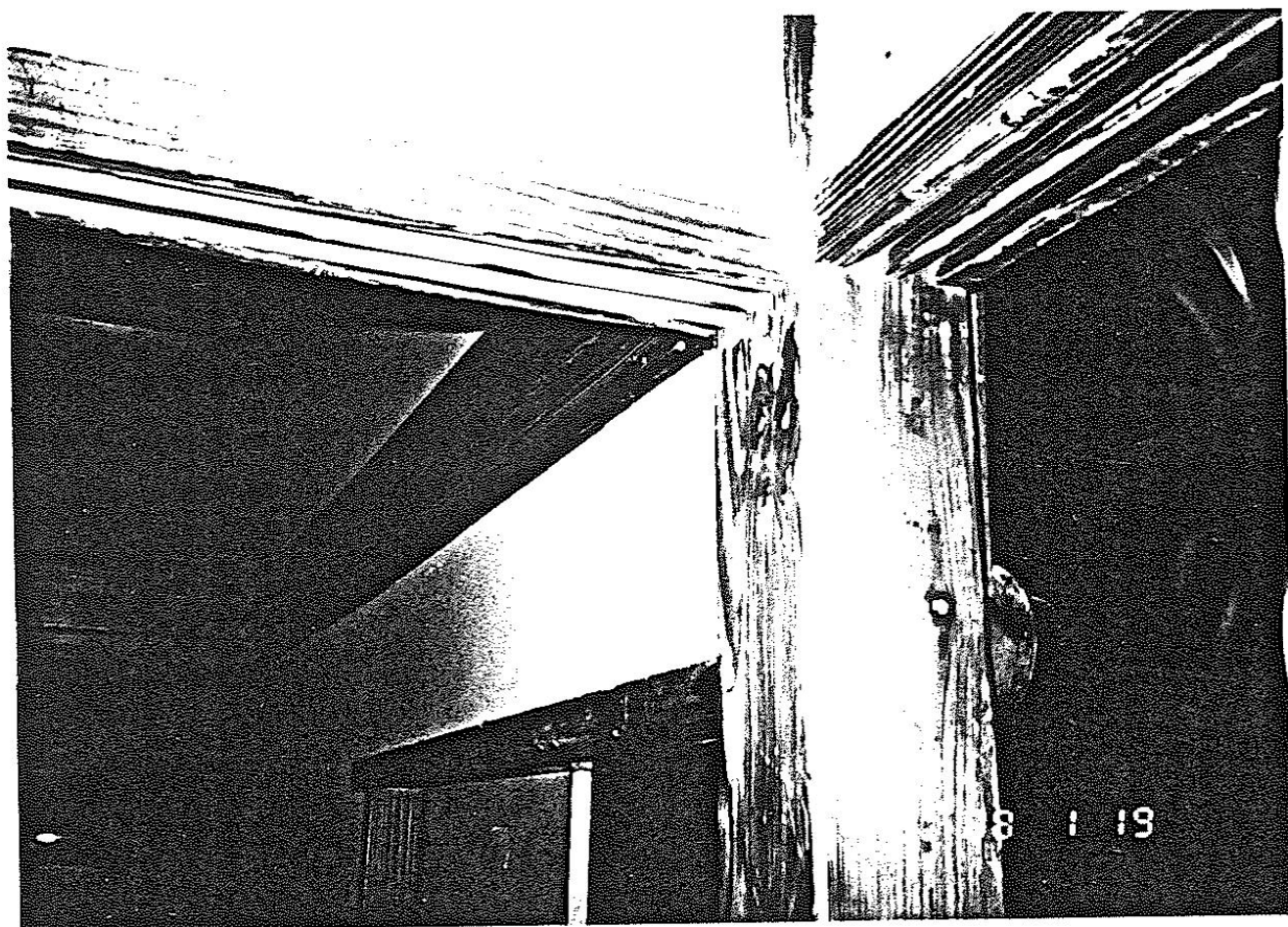


茶室雨戸の
下部欠損

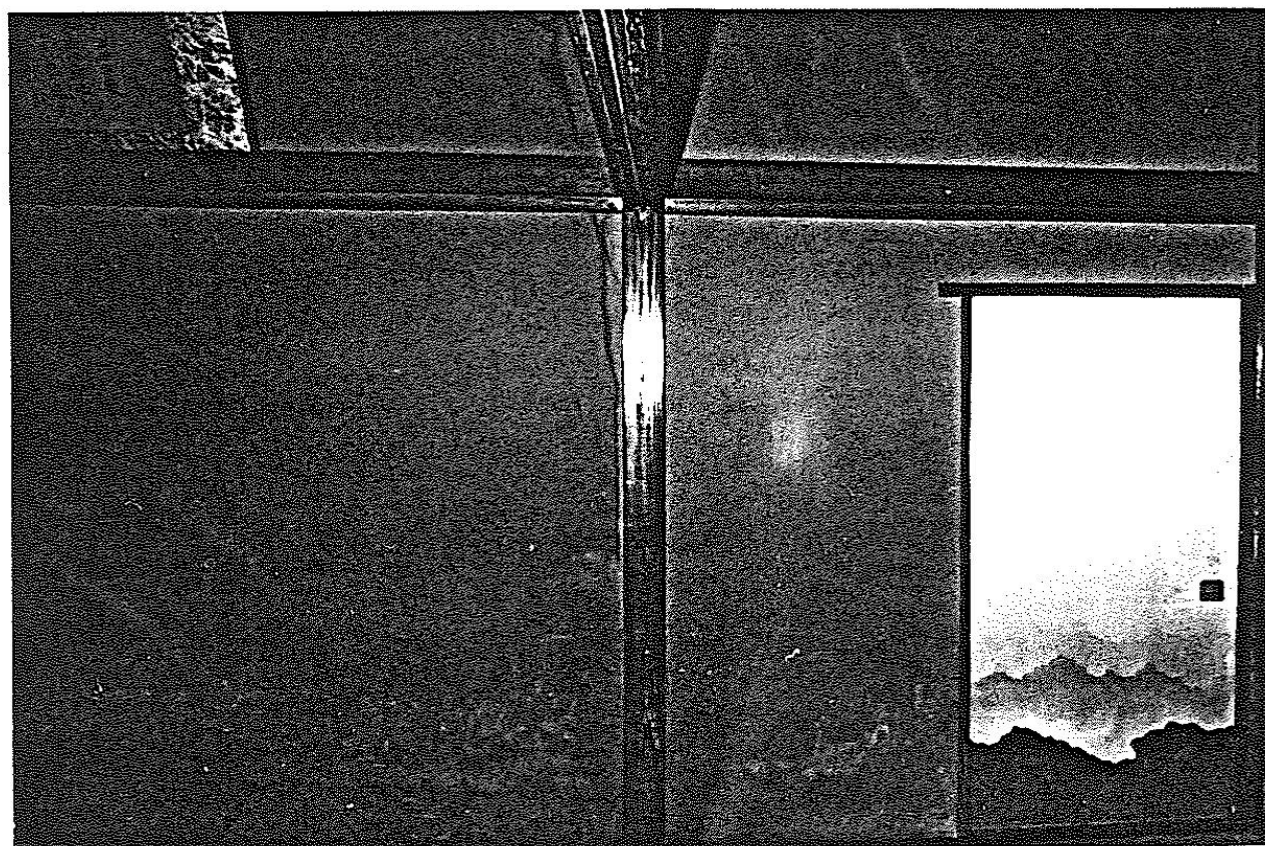




8
星溪寮
土台の腐朽.

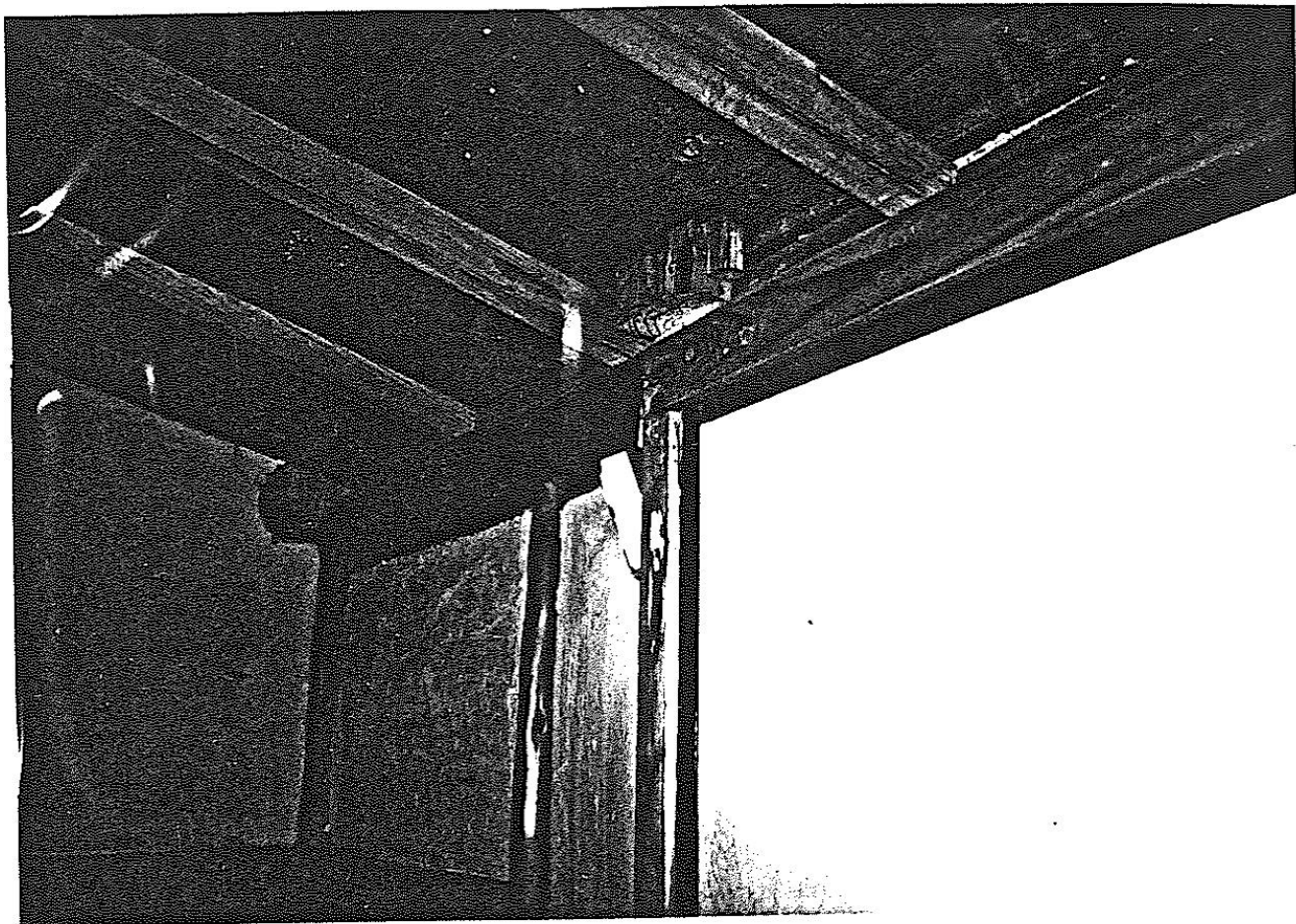


柱の継手

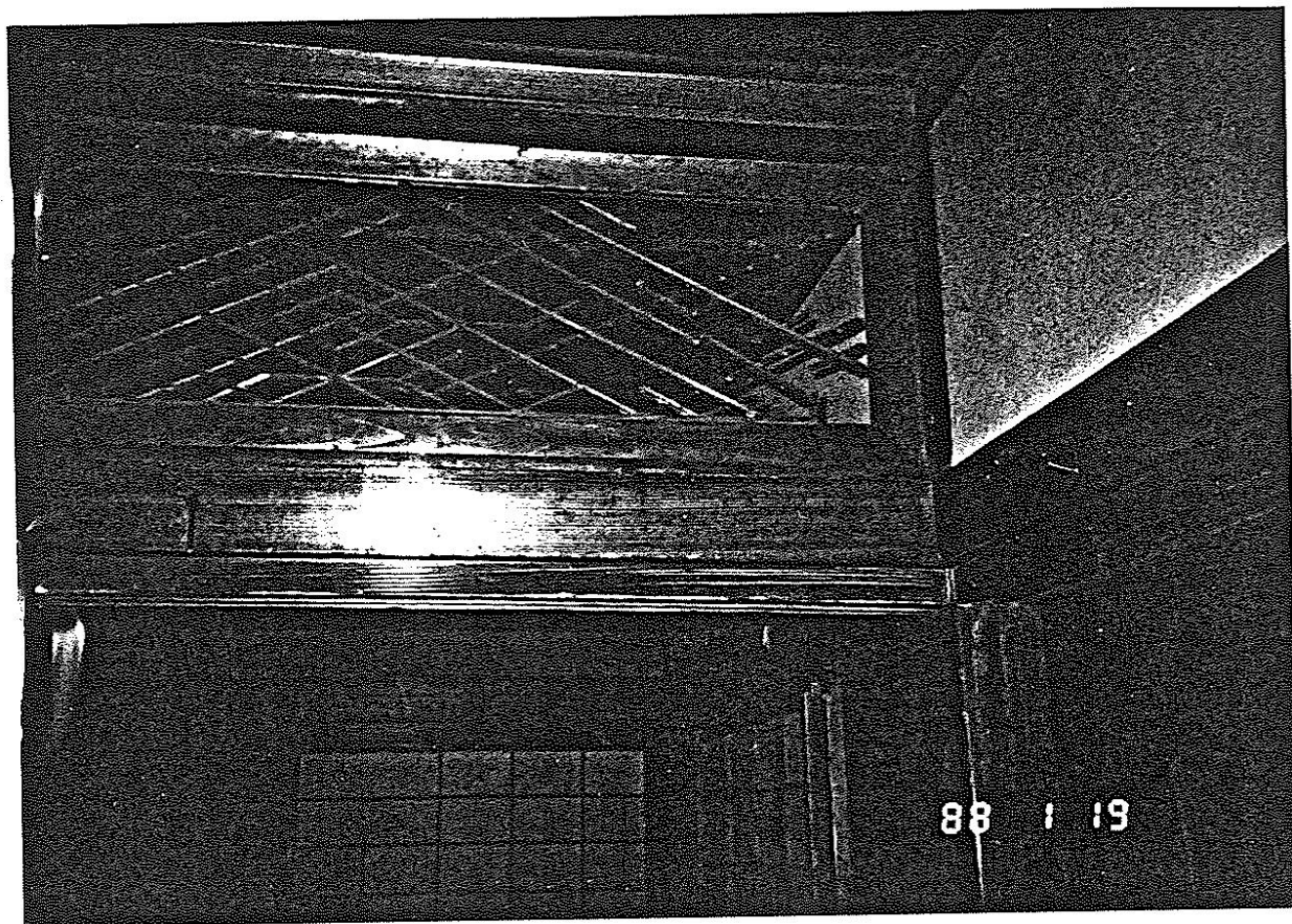


内壁の損傷

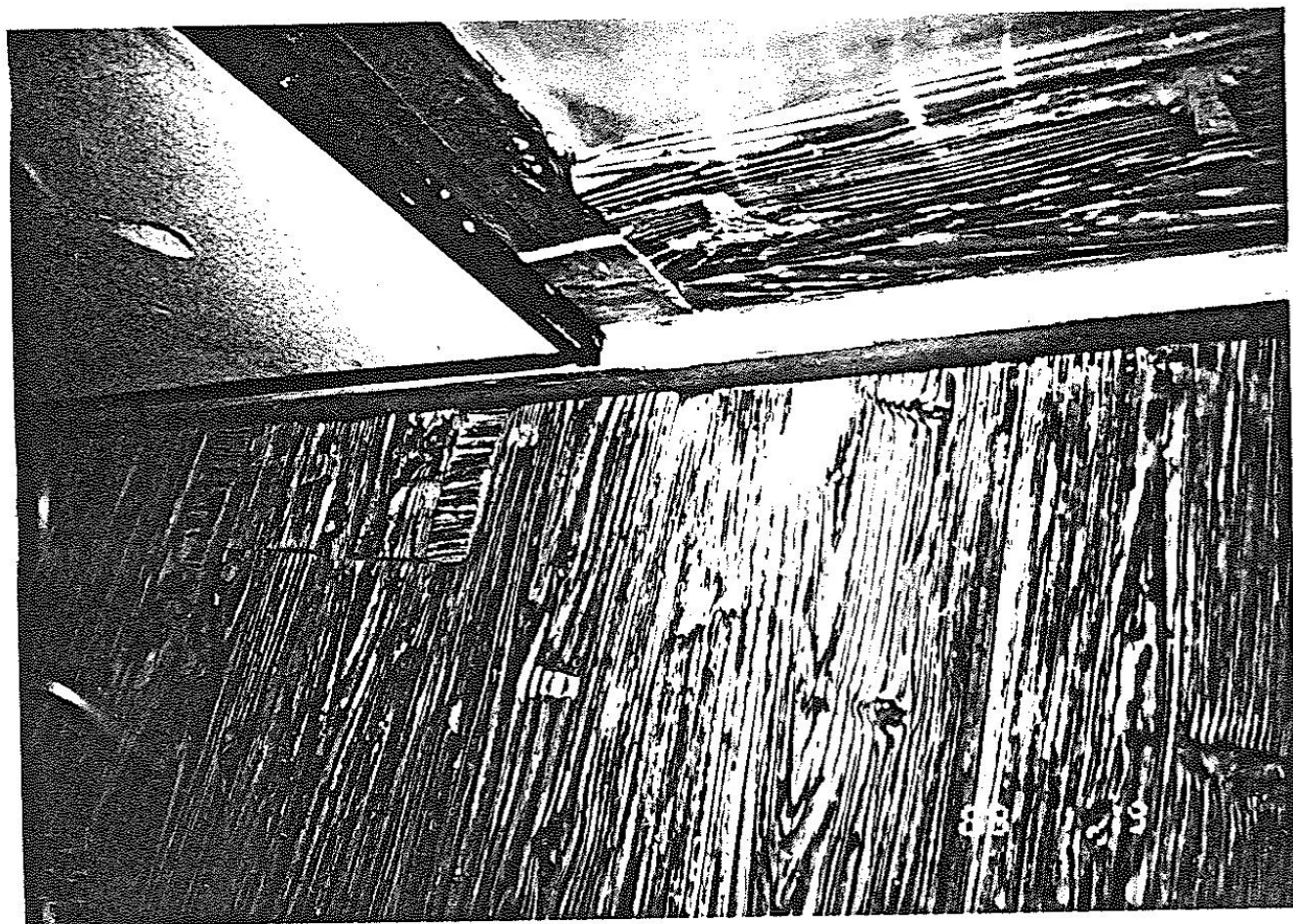
9
 溪 寮
 増改築部分

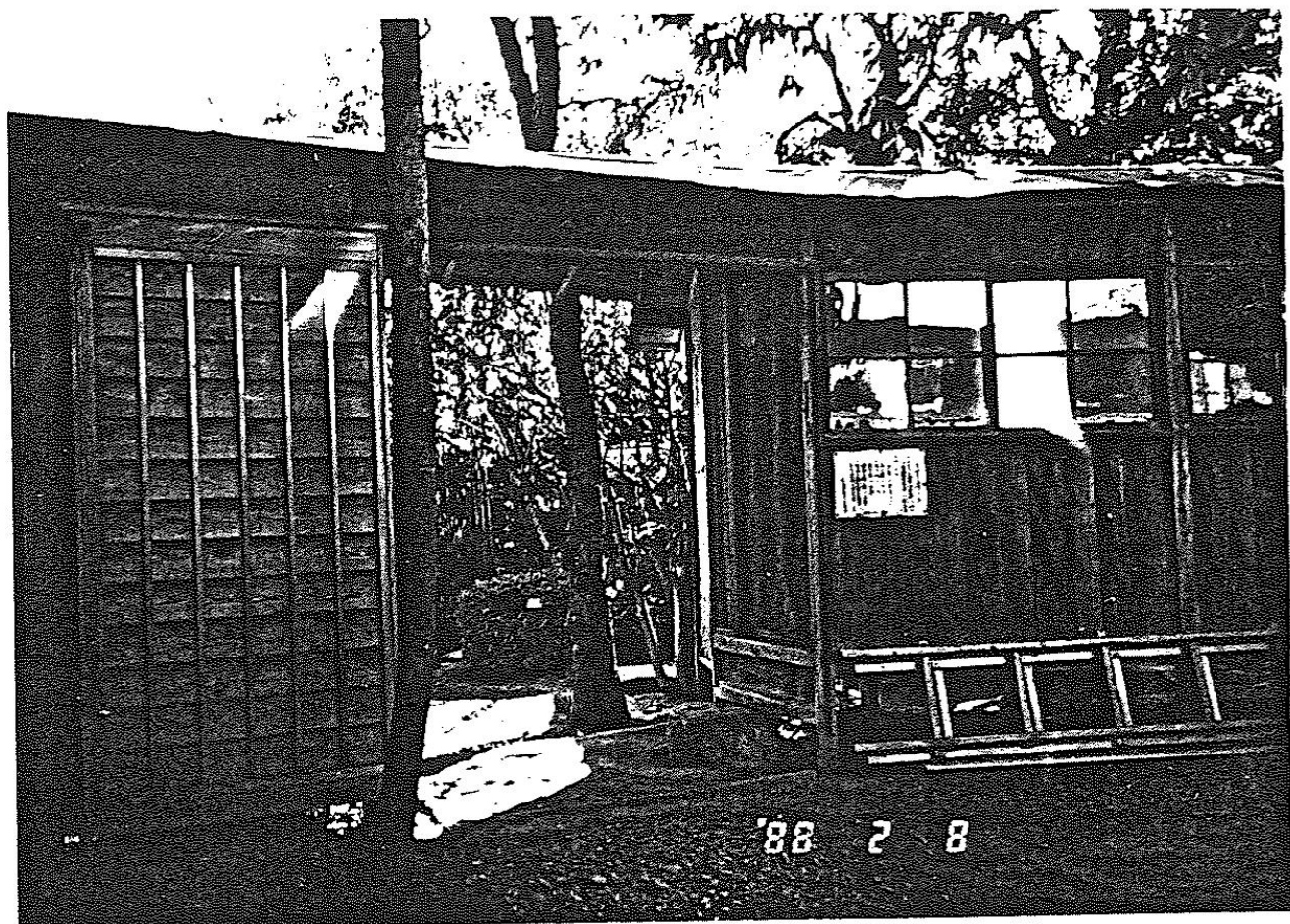


菱組子欄間の
 の欠損

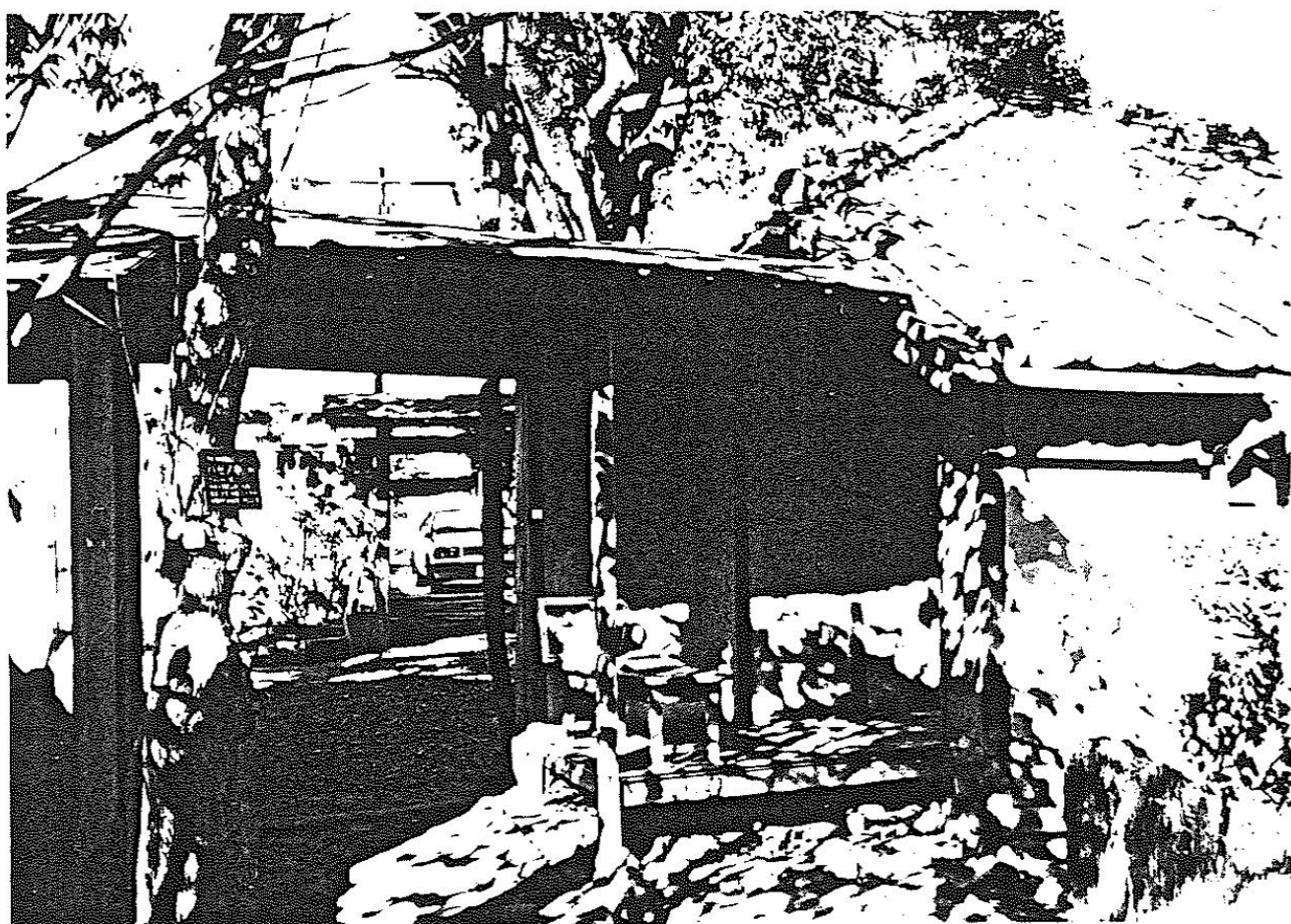


増改築部分
 (床は当時おの
 舟板を利用した
 もの)

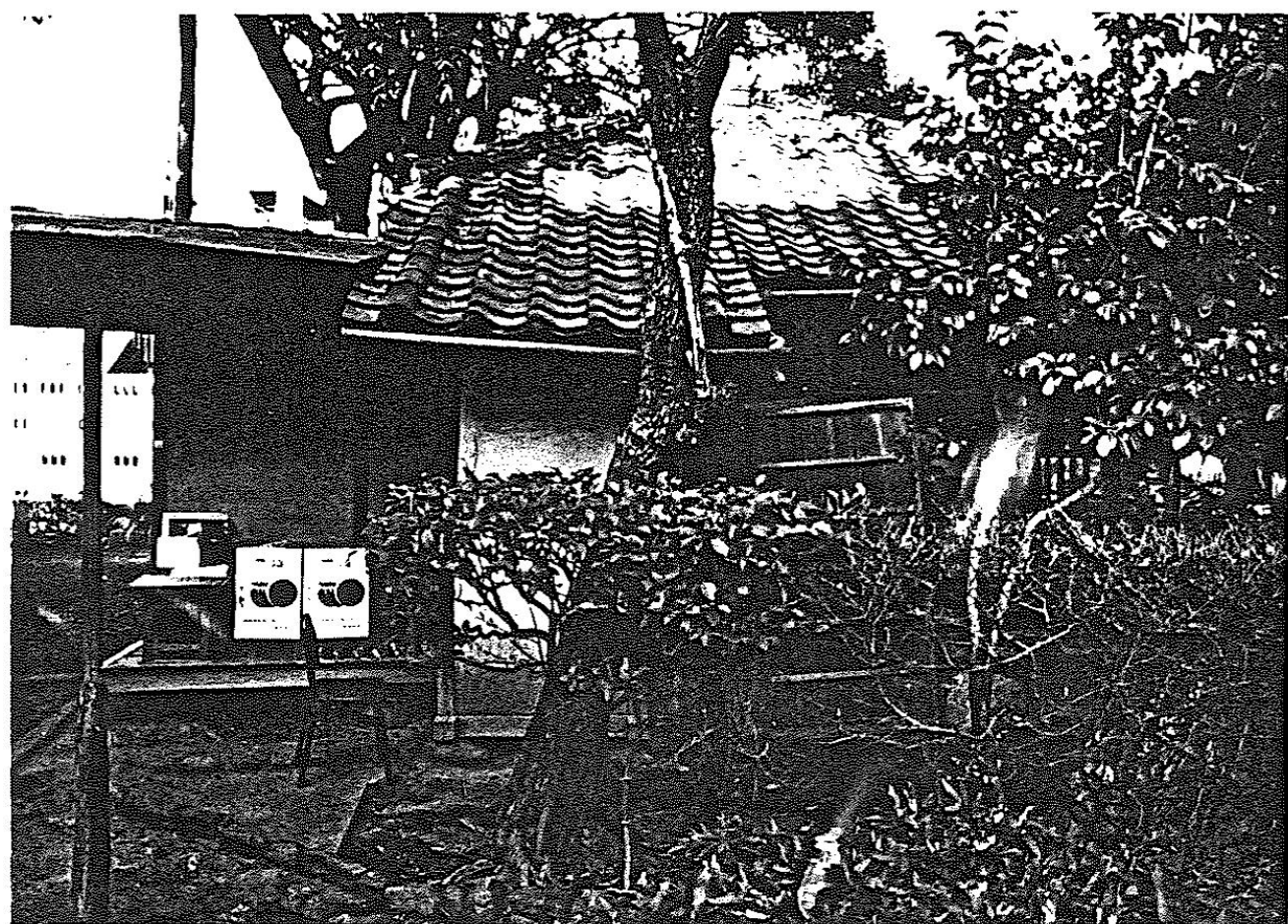




松風庵
渡廊下外觀
北側

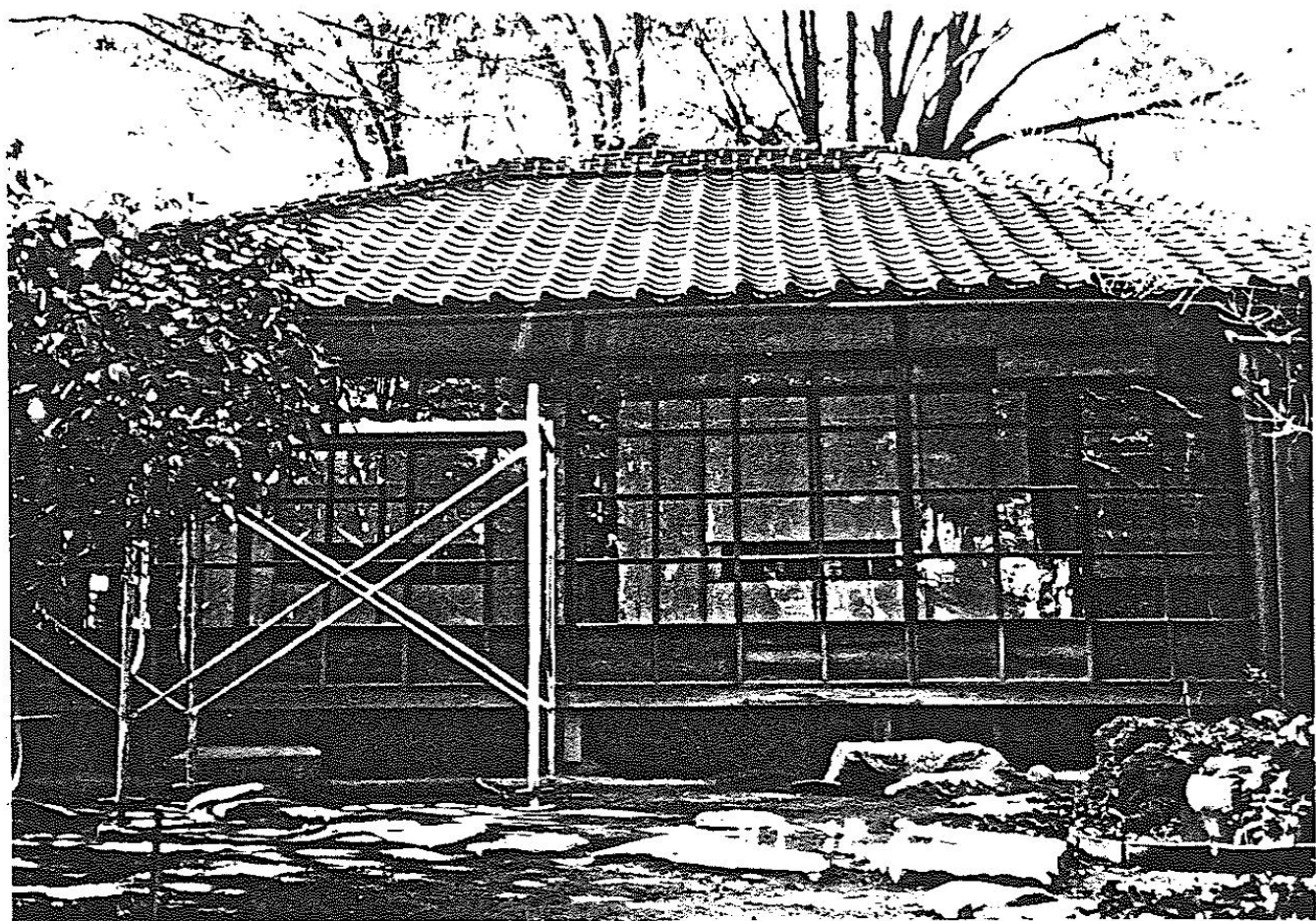


渡廊下外觀
南側

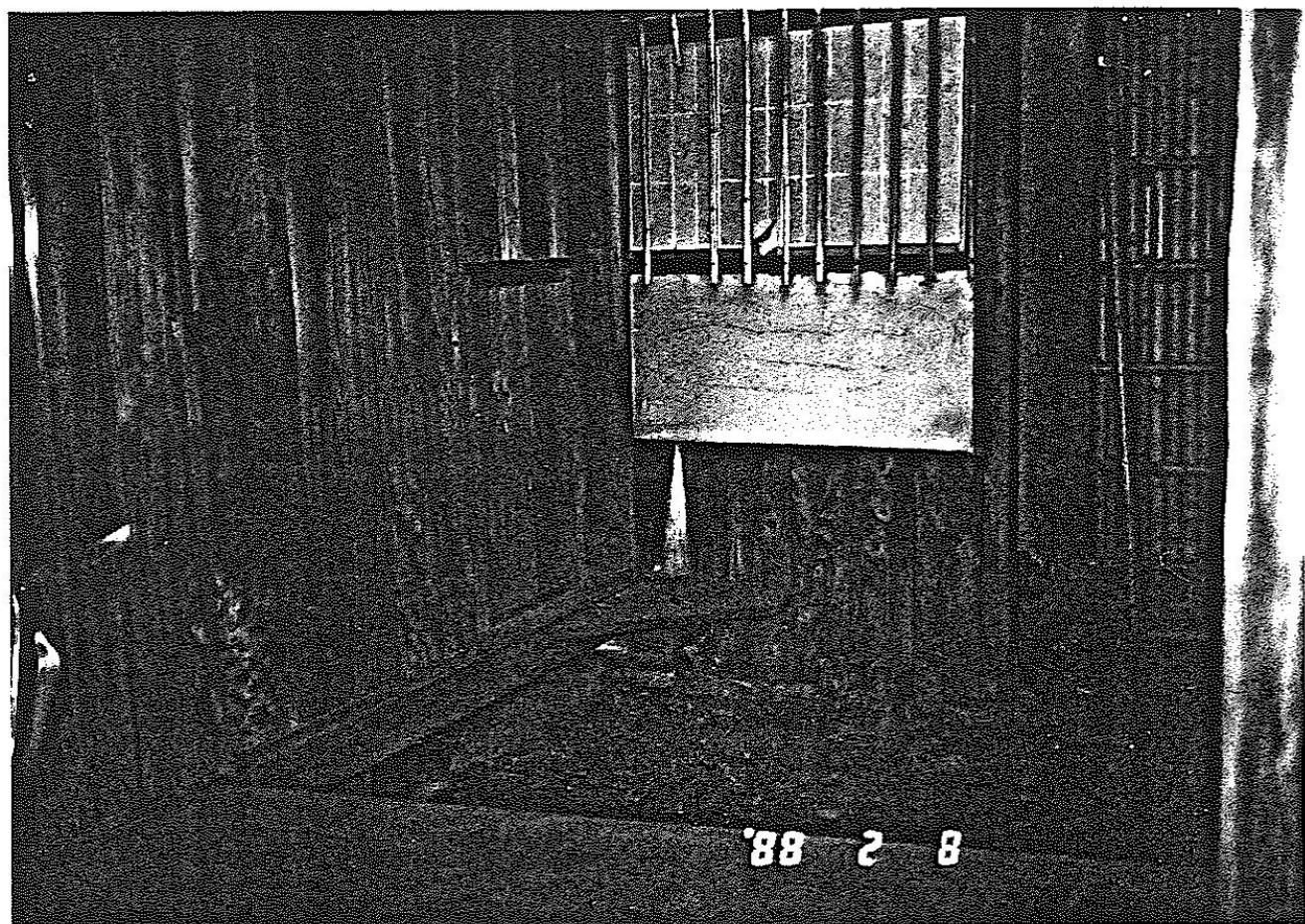


南側外觀

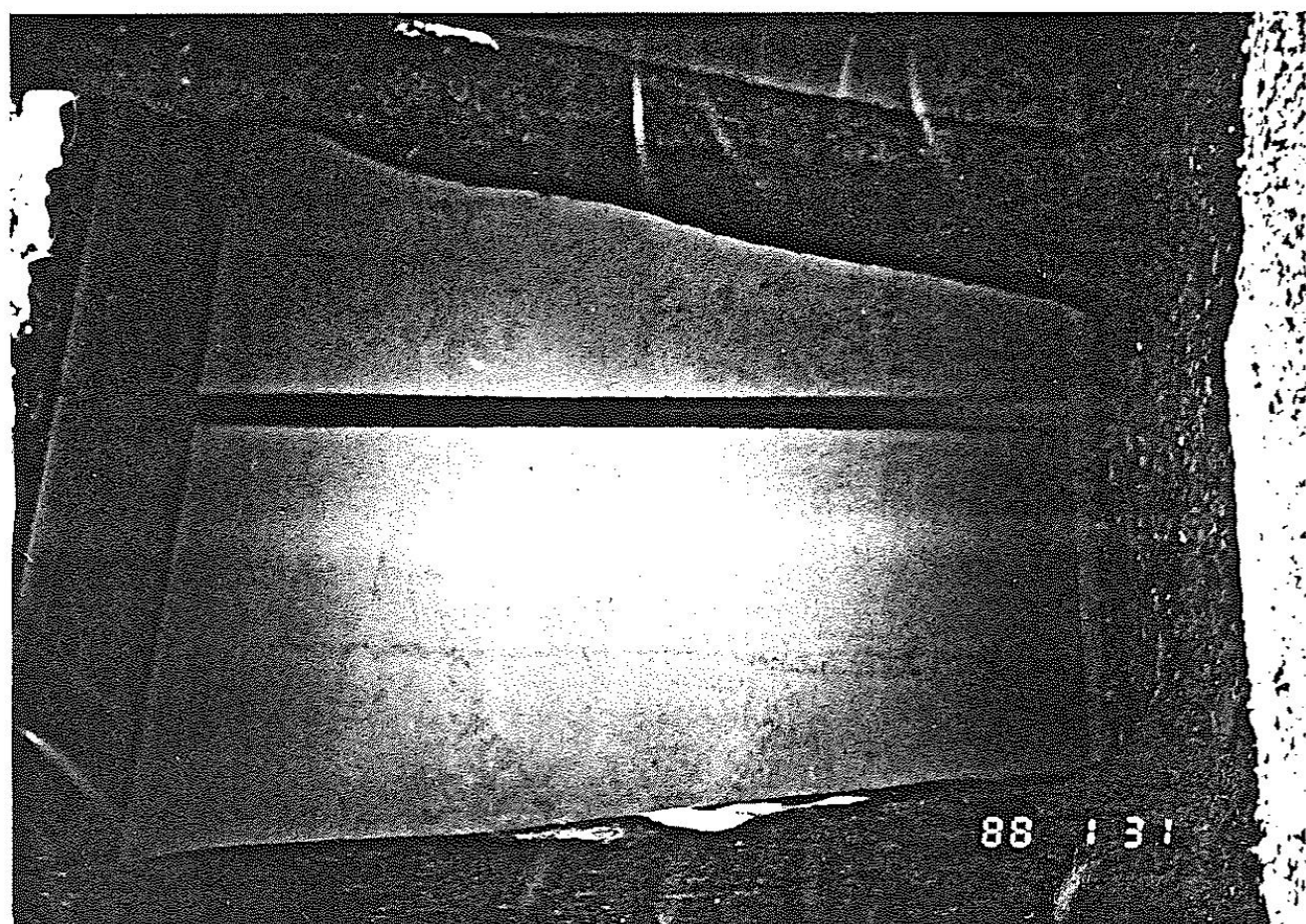
松風
東側外觀

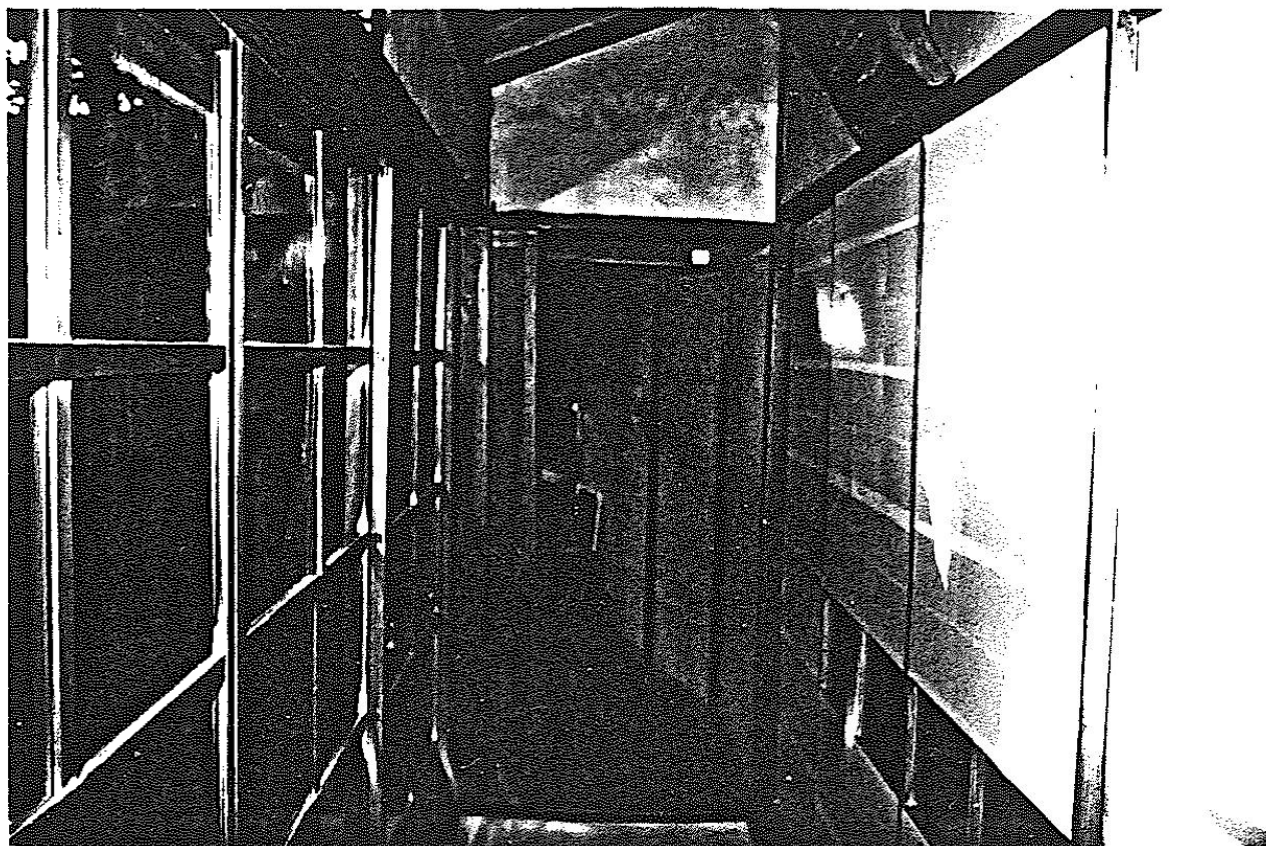


積翠閣へ続く
廊下

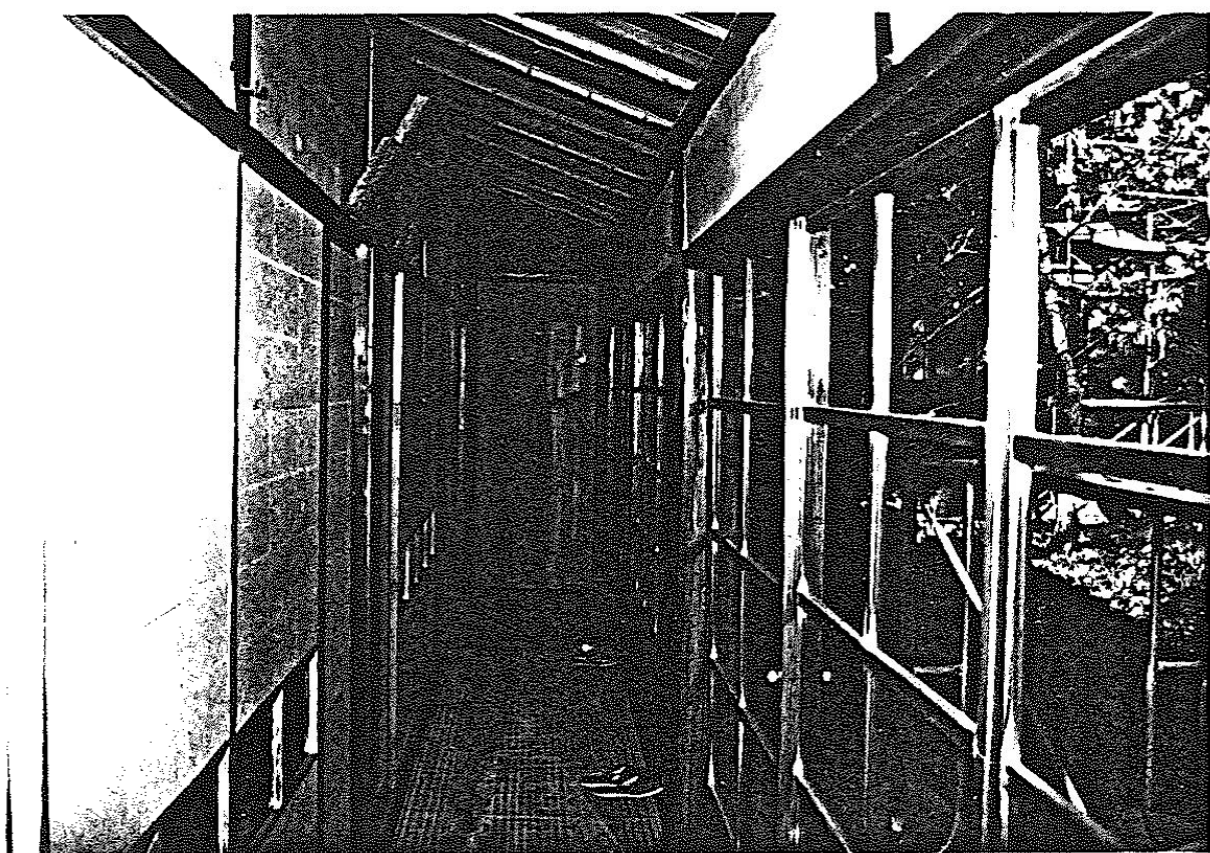


西側外觀

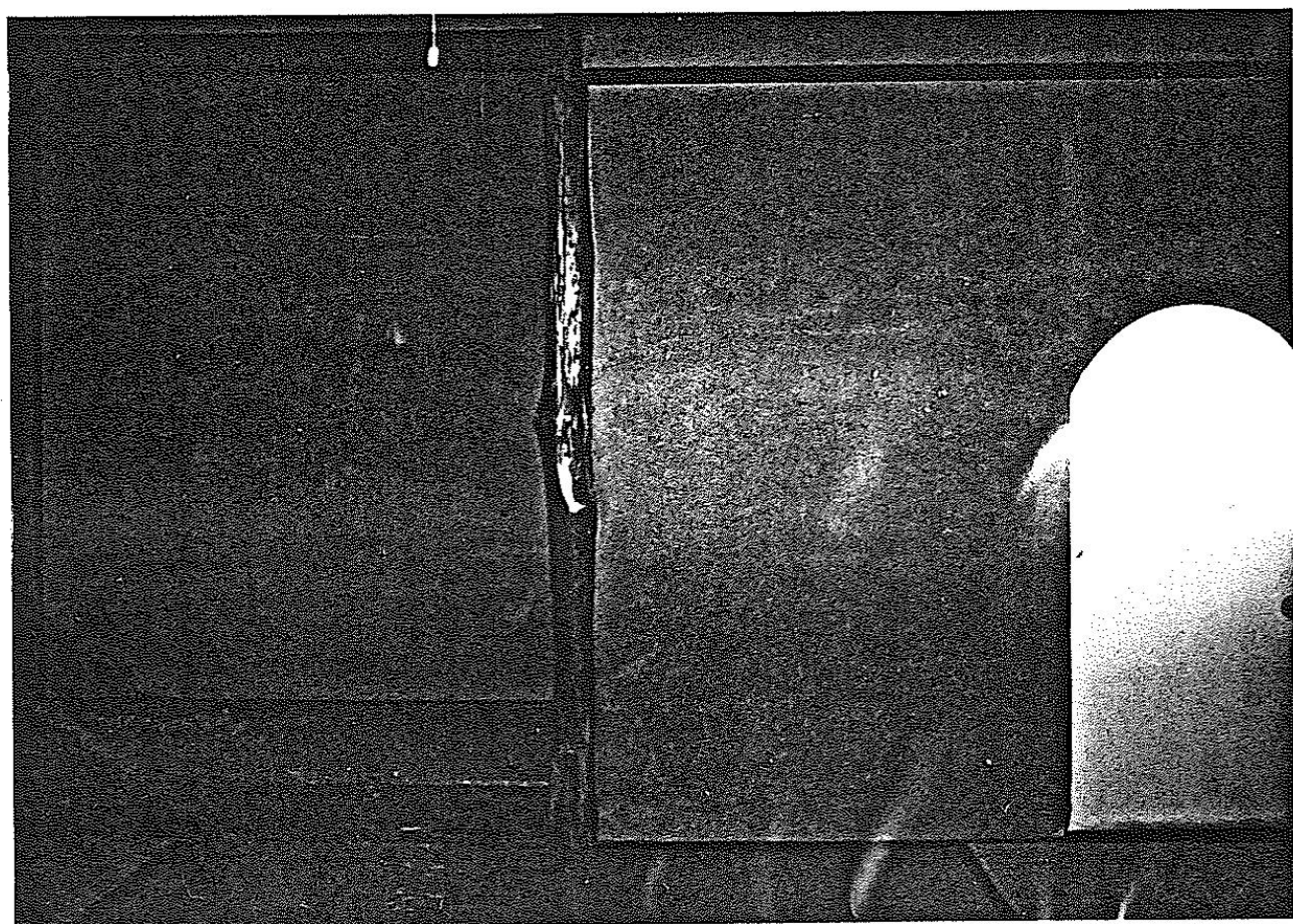




松風亭
南側廊下

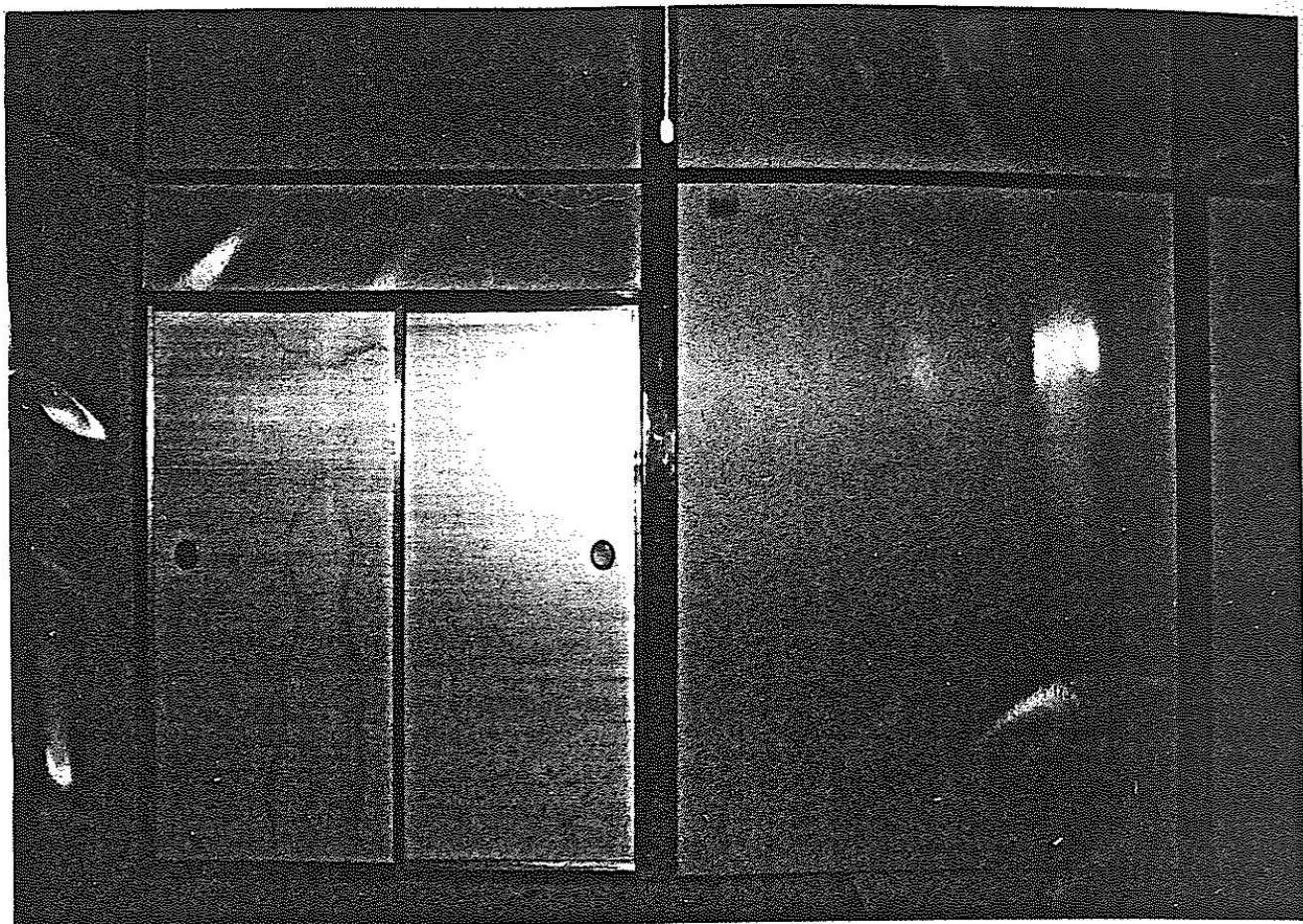


東側廊下

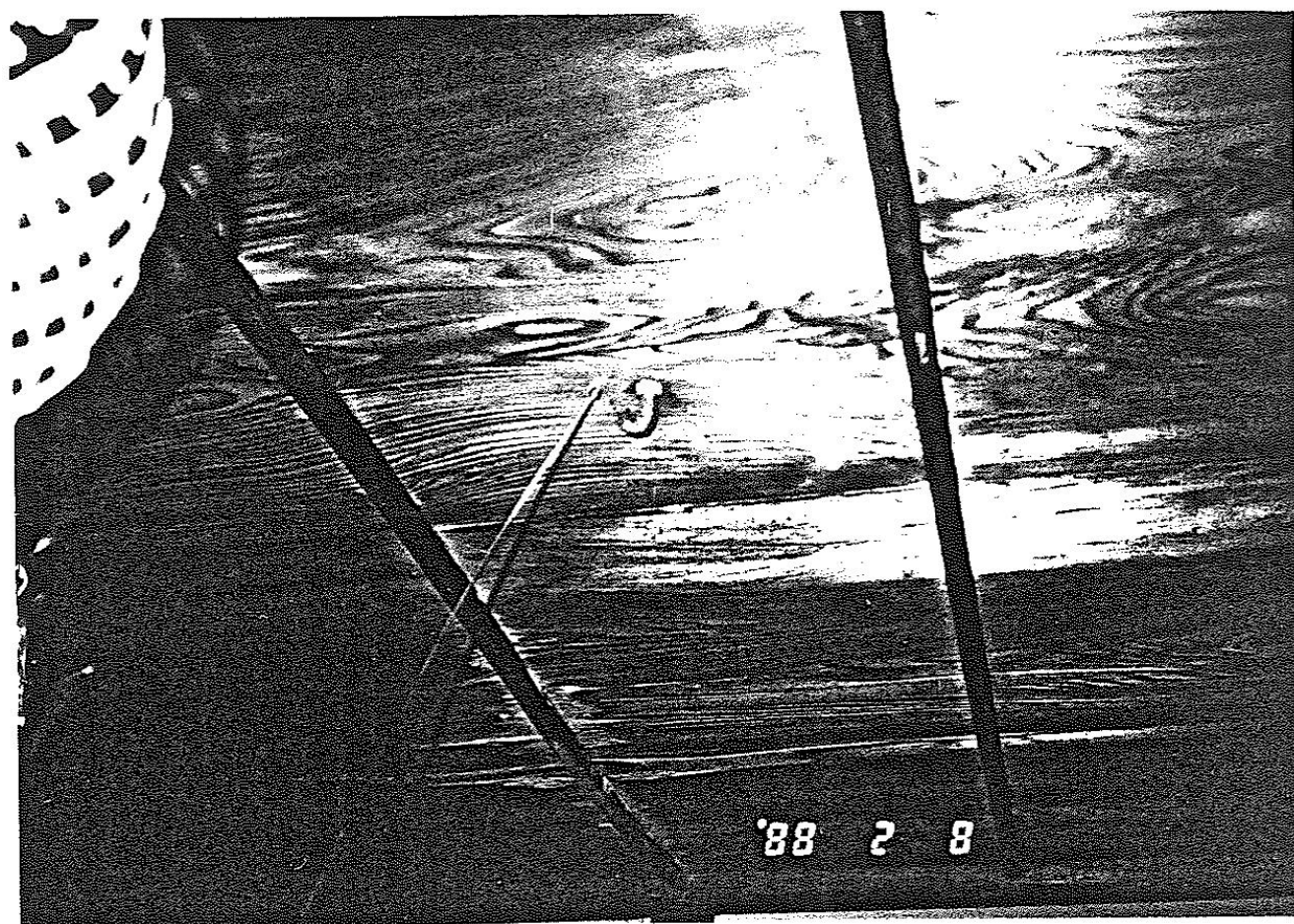


主室 仏帖

4.
松風庵
前室の帖

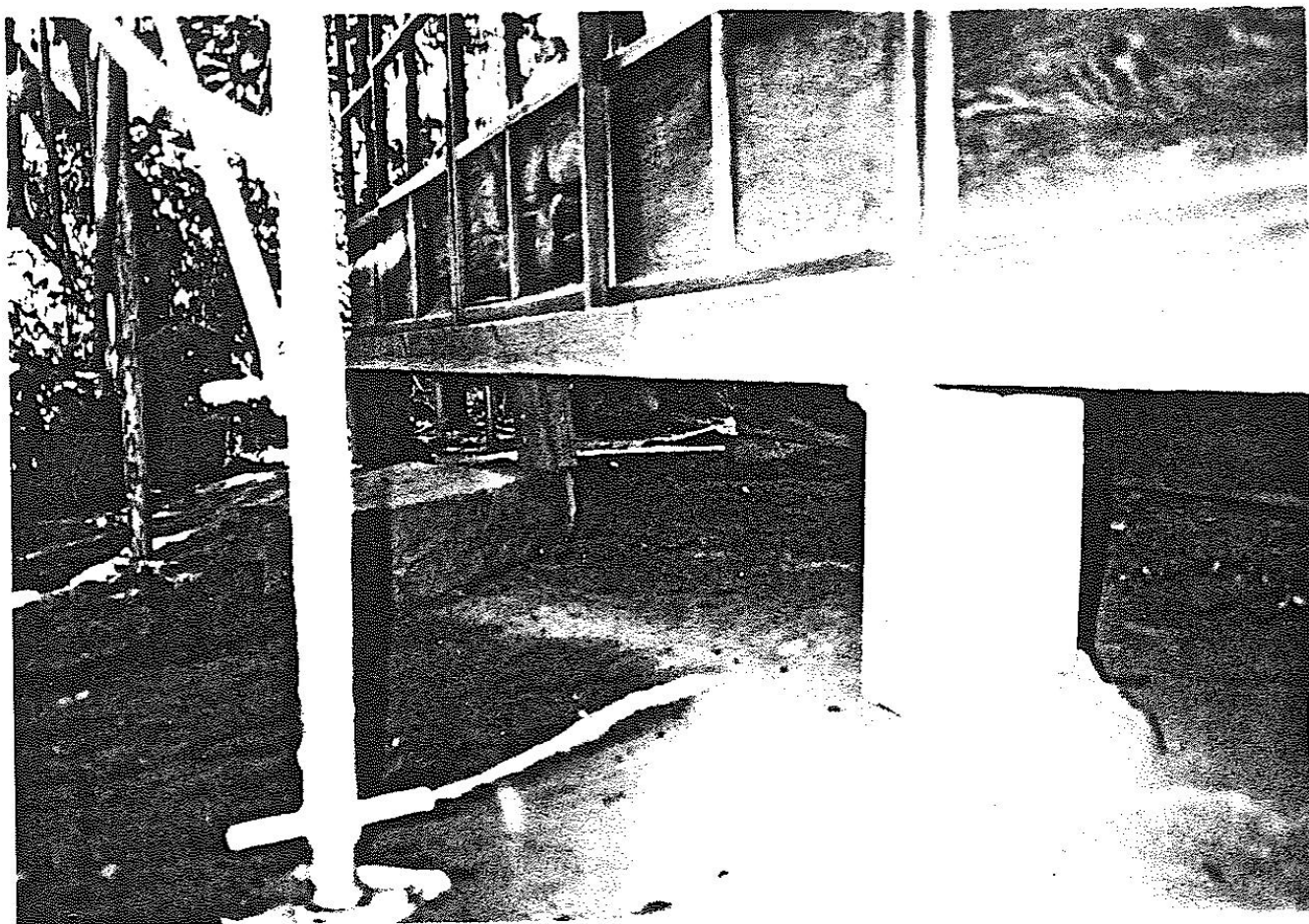


前室の帖の
当時からのと思
われる釘



北側廊下
手洗用くぐり戸

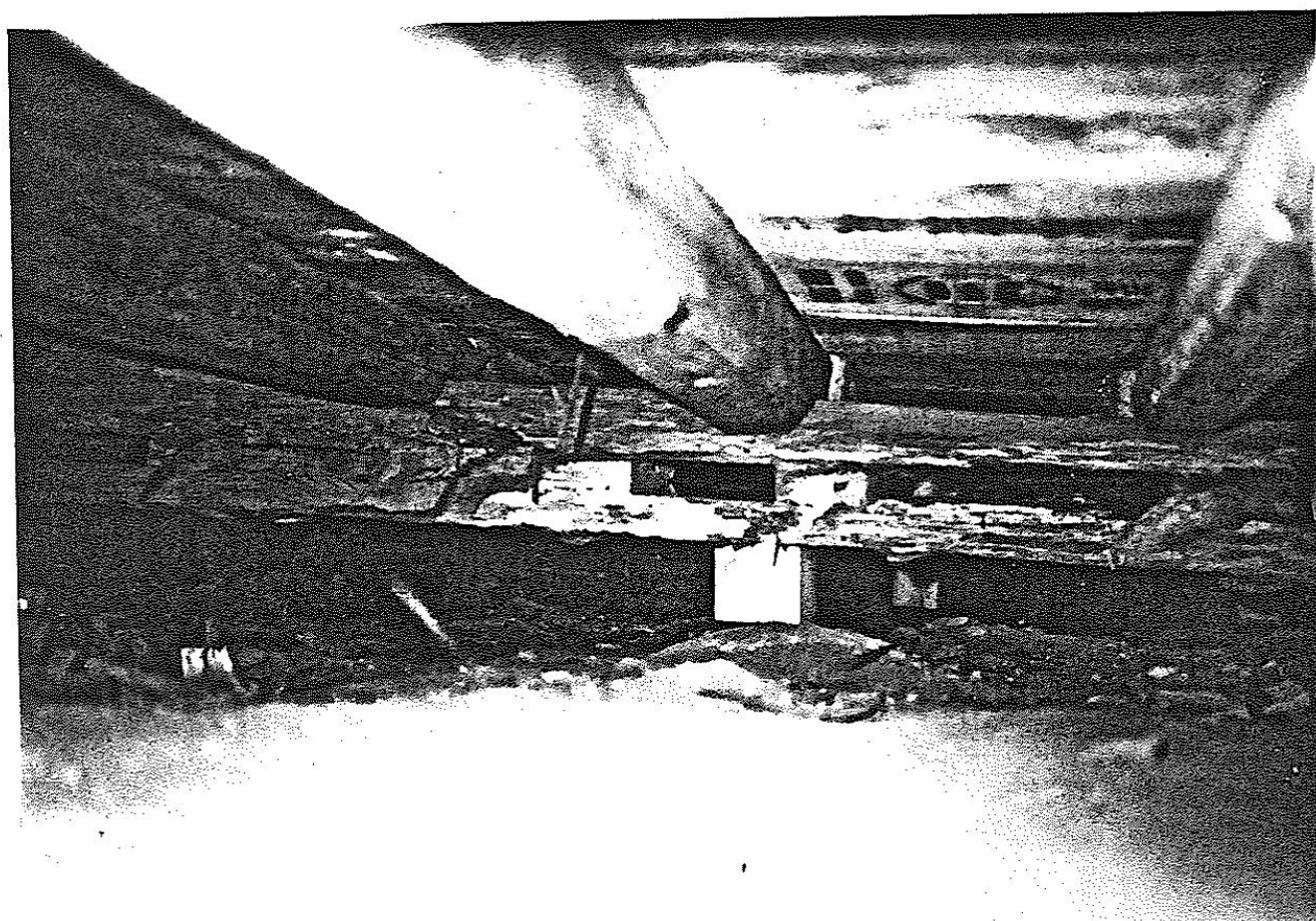




5
松
廊下の足元
廻り

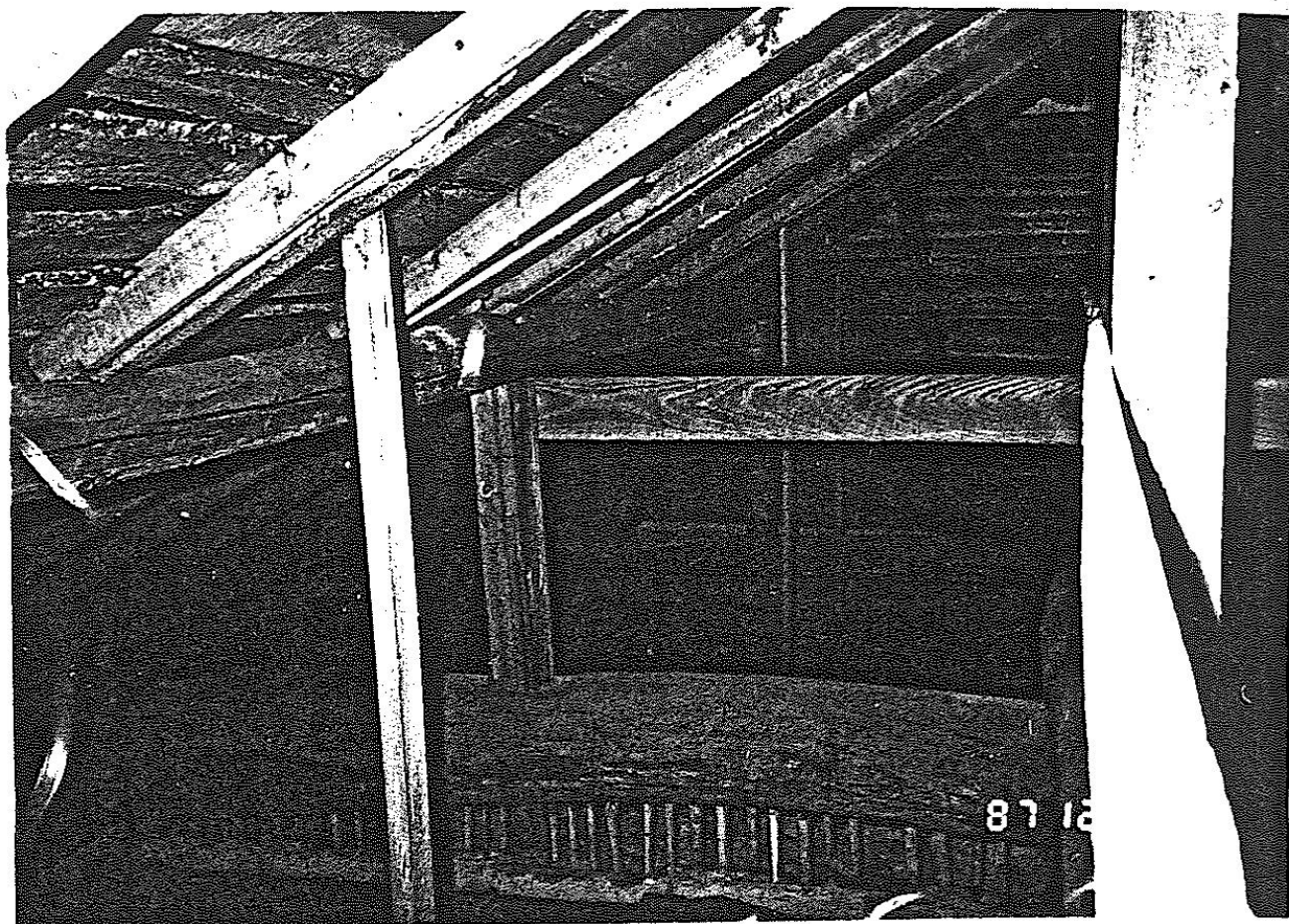


廊下 下の床組

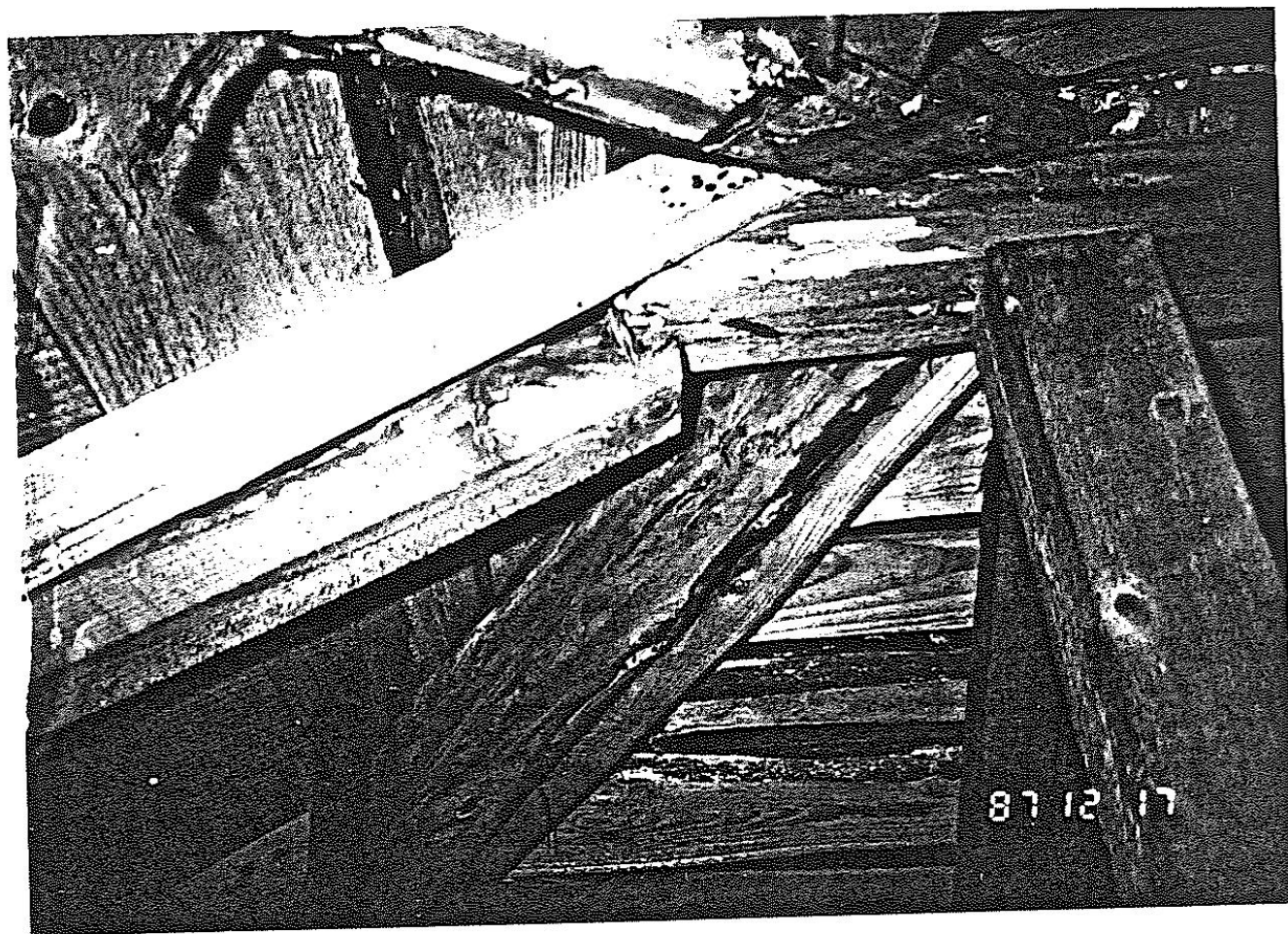


和室 床下の
床組

松
小屋 全般

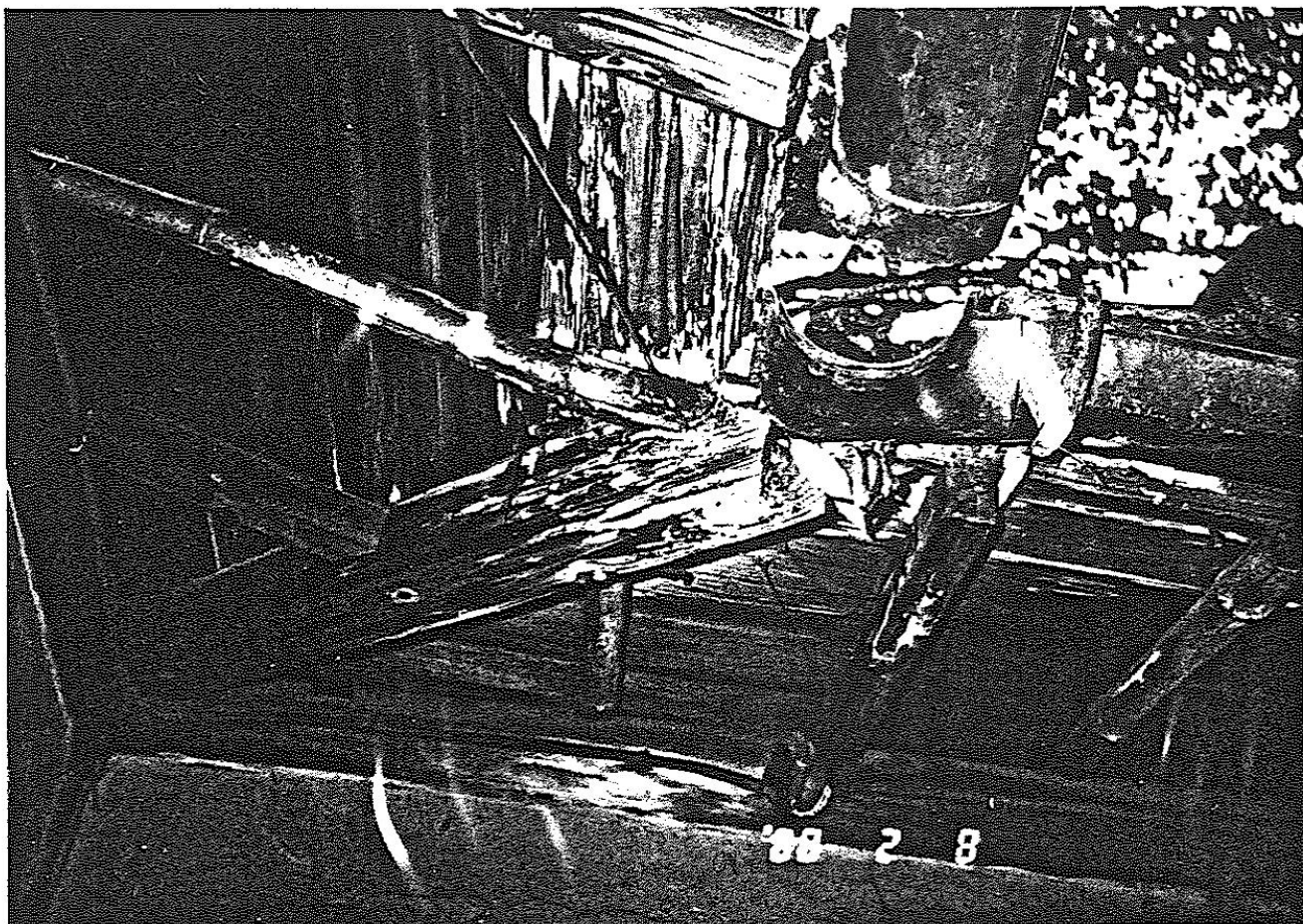


榎 隅木
の仕口



廊下と和室の
間の小屋部分

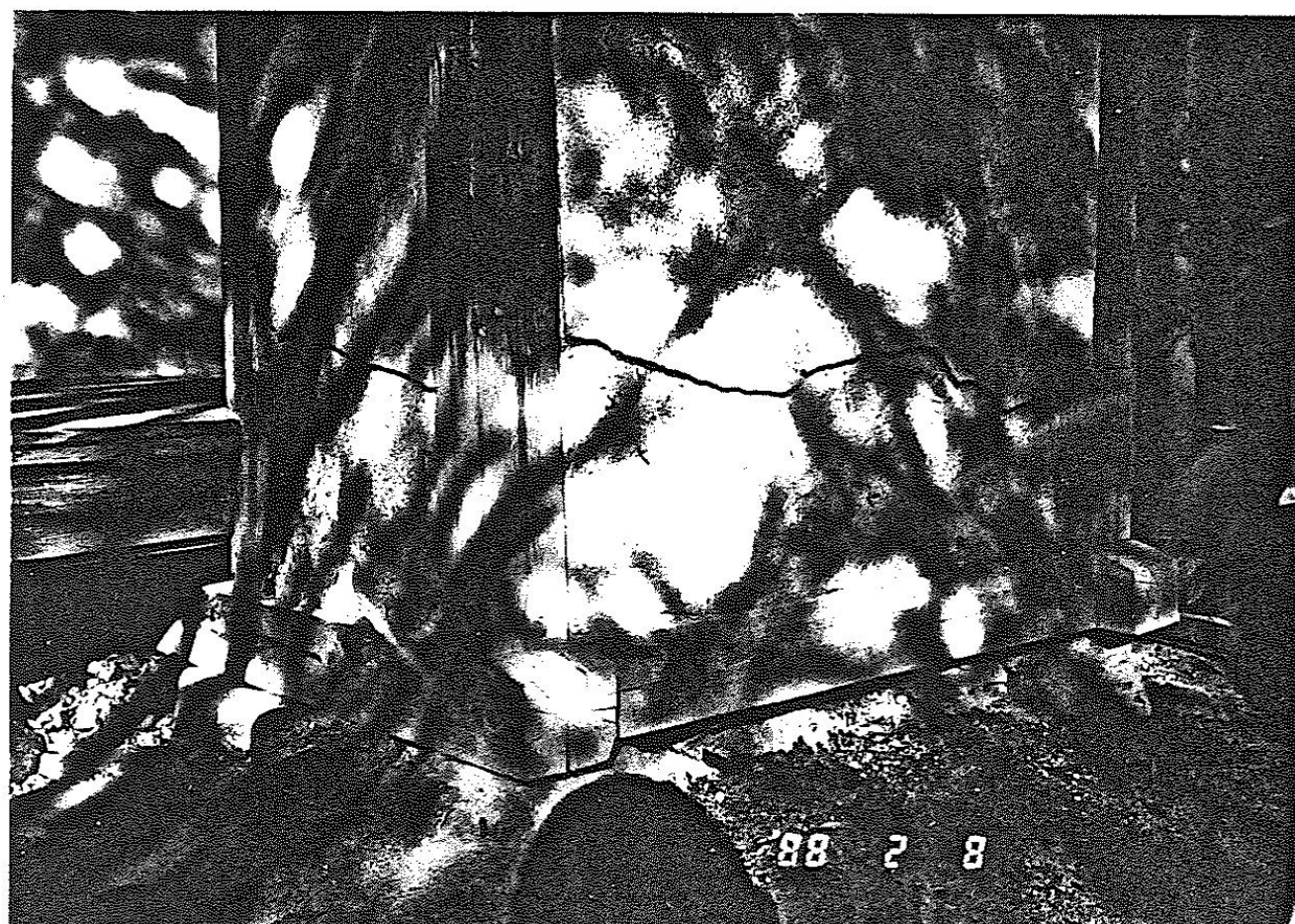




7
松 風 庵
軒先部分の
破損

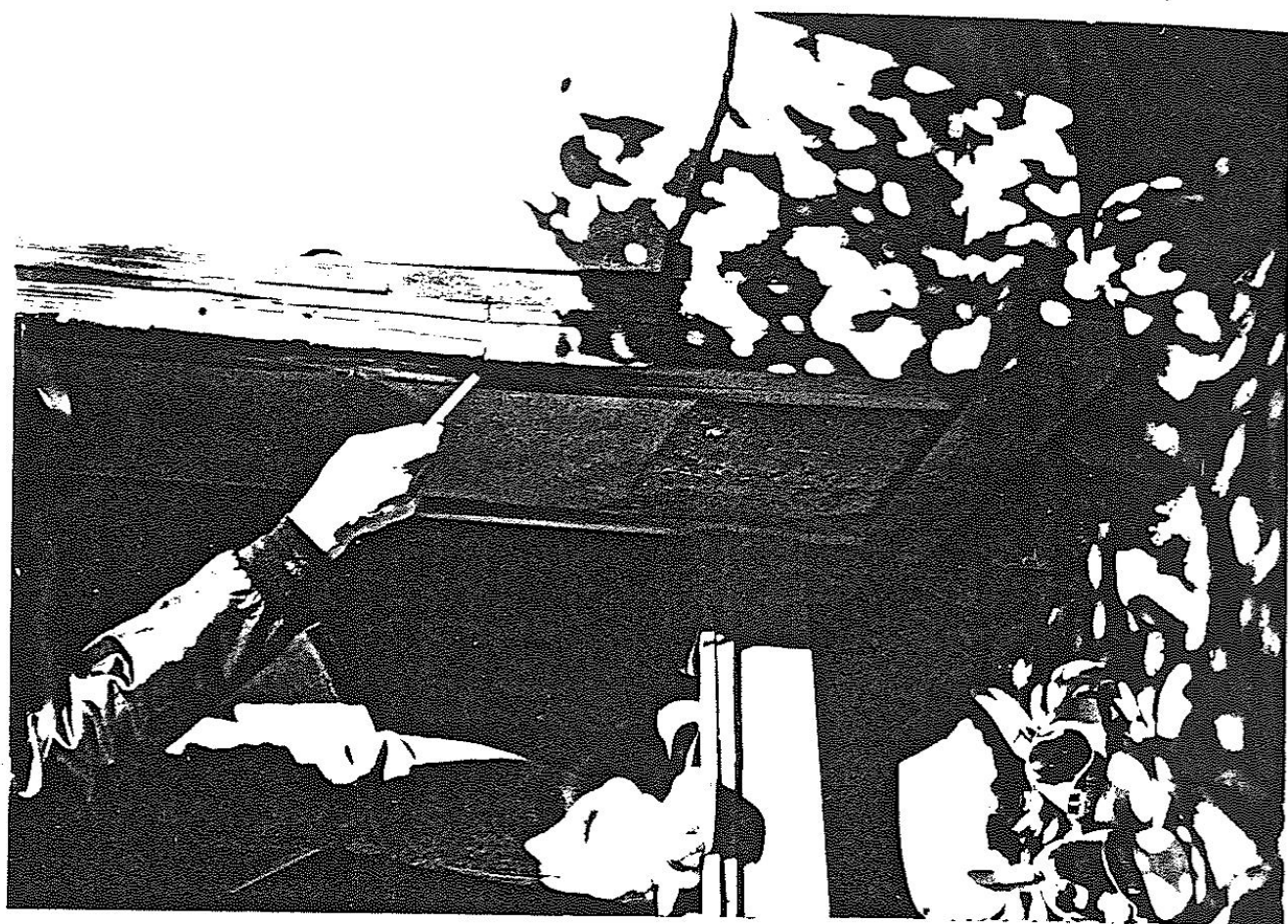


外壁(土塗壁)
の破損



外壁(しっくい)
のはがれ

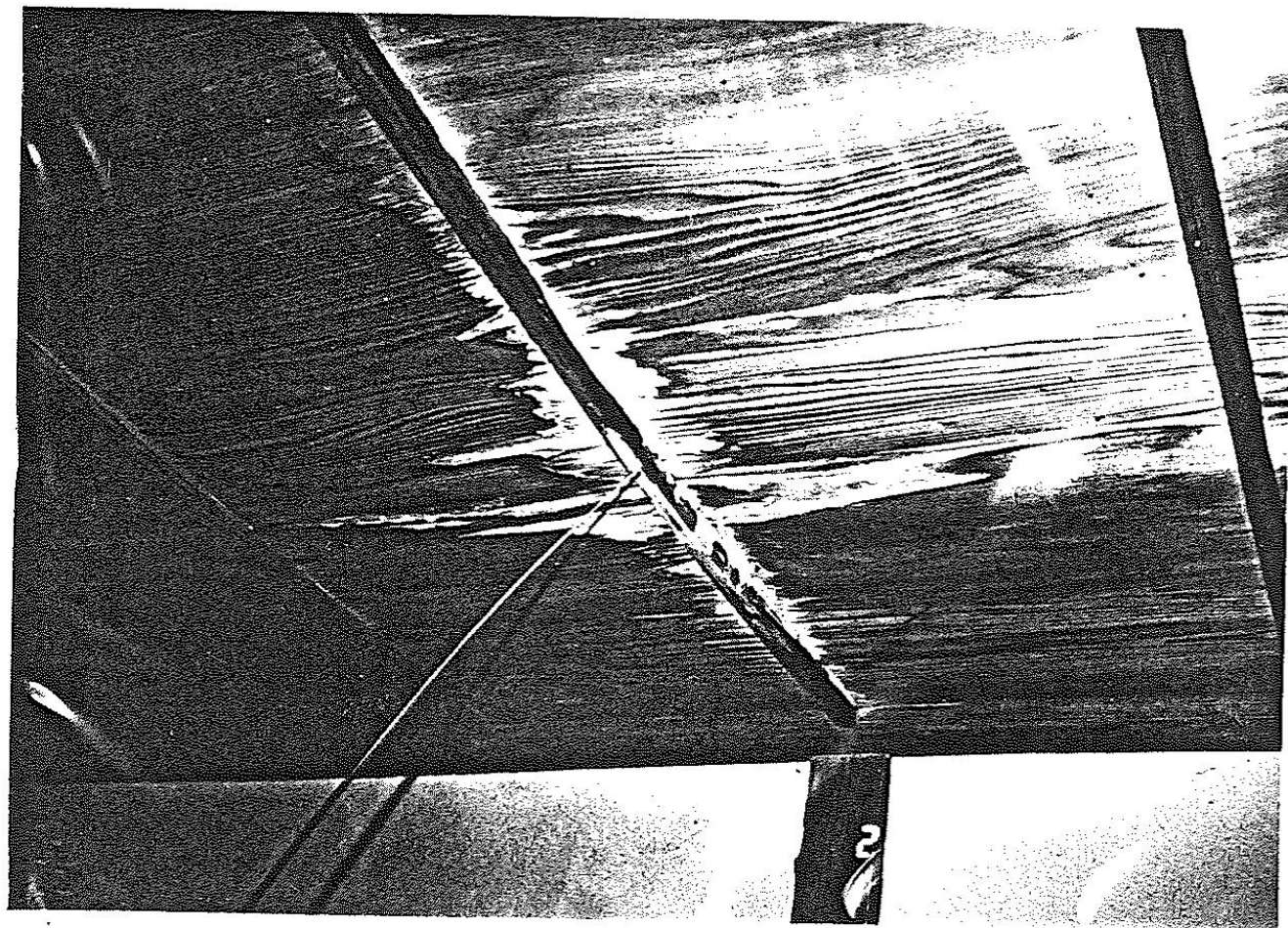
松風巻
柱のつき
(継ぎ部分を示す)

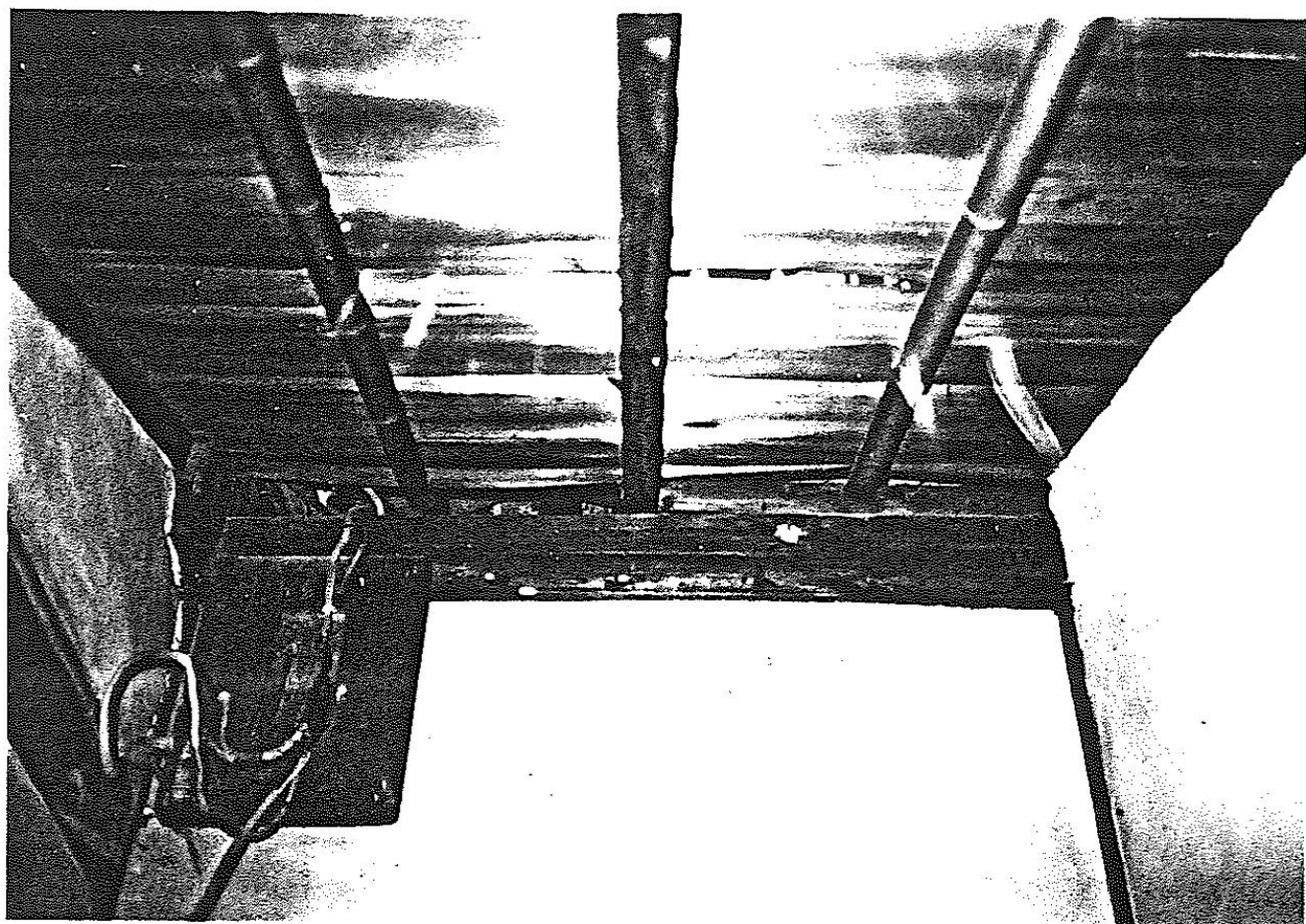


壁板張りの
破損

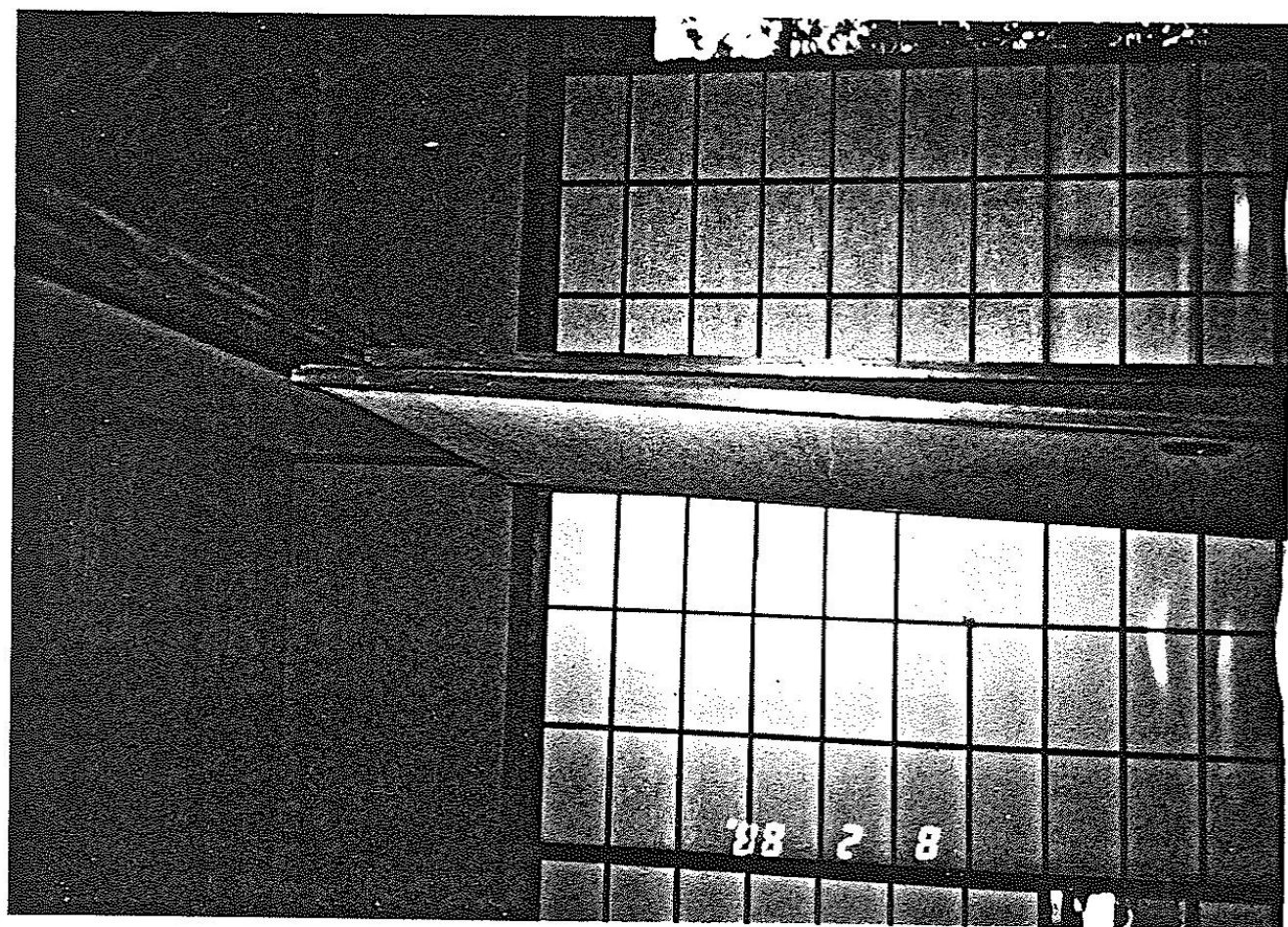


屋根の雨り
天井のしみ

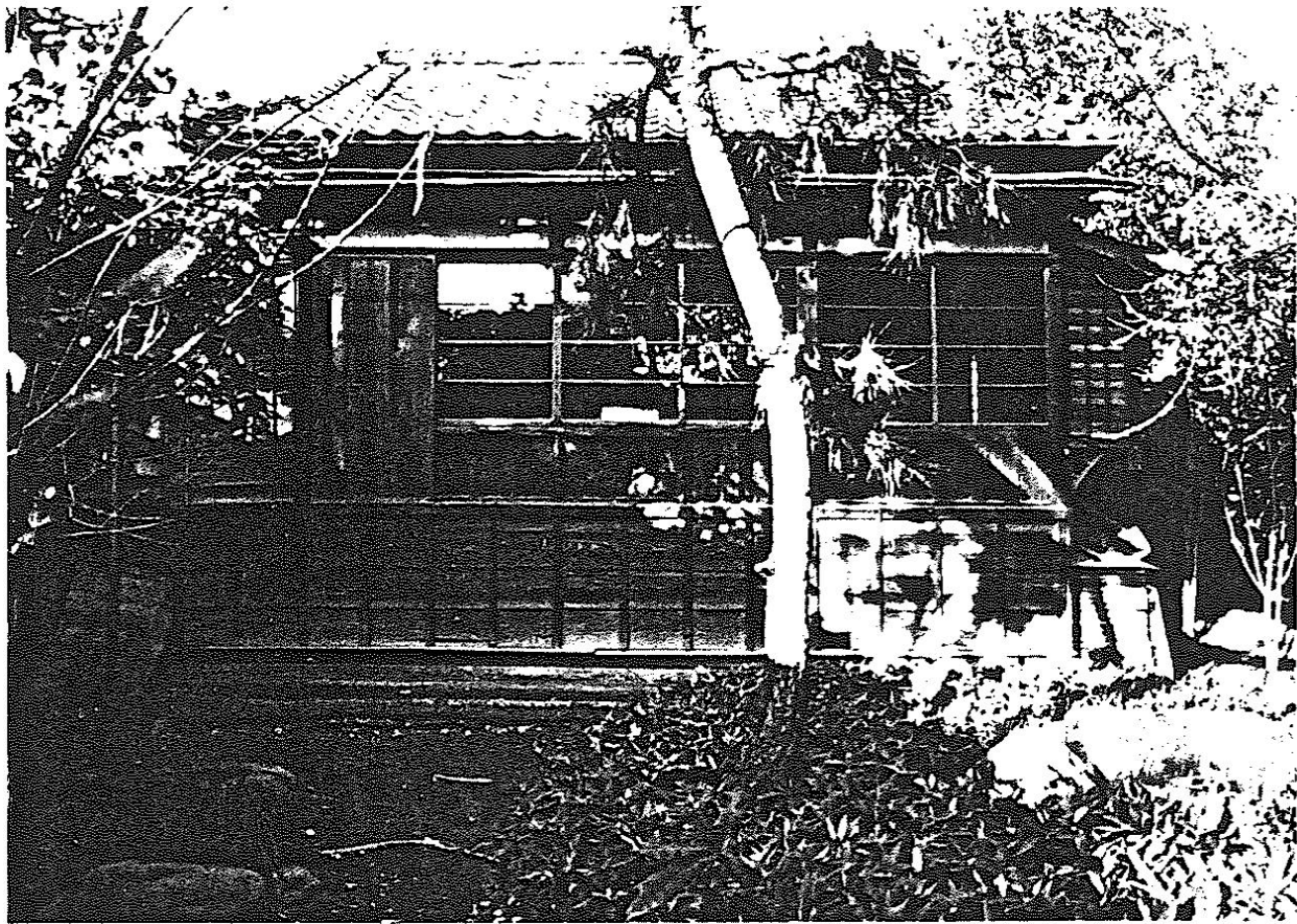




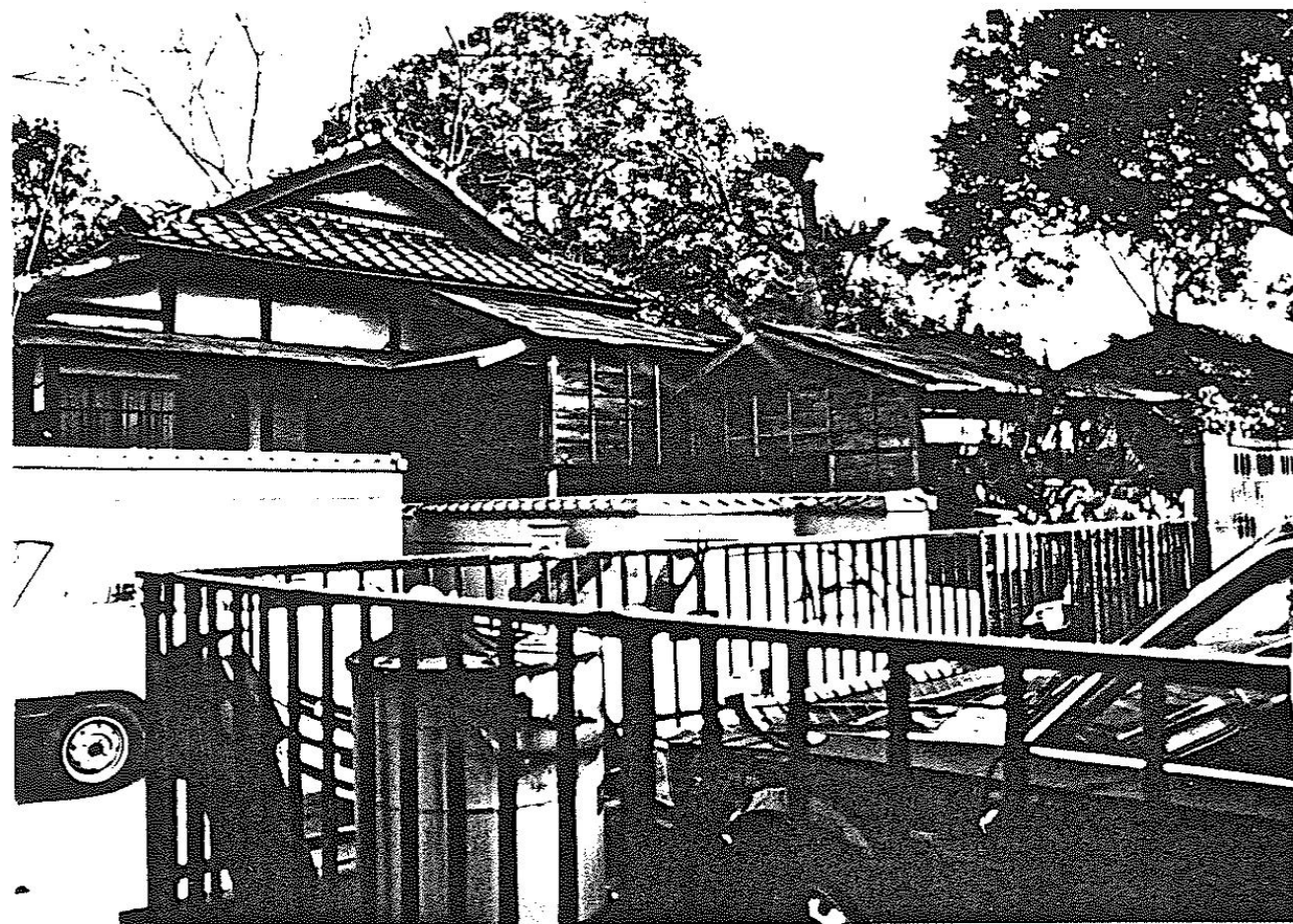
松風庵
天井と壁の
接合部分の
破損



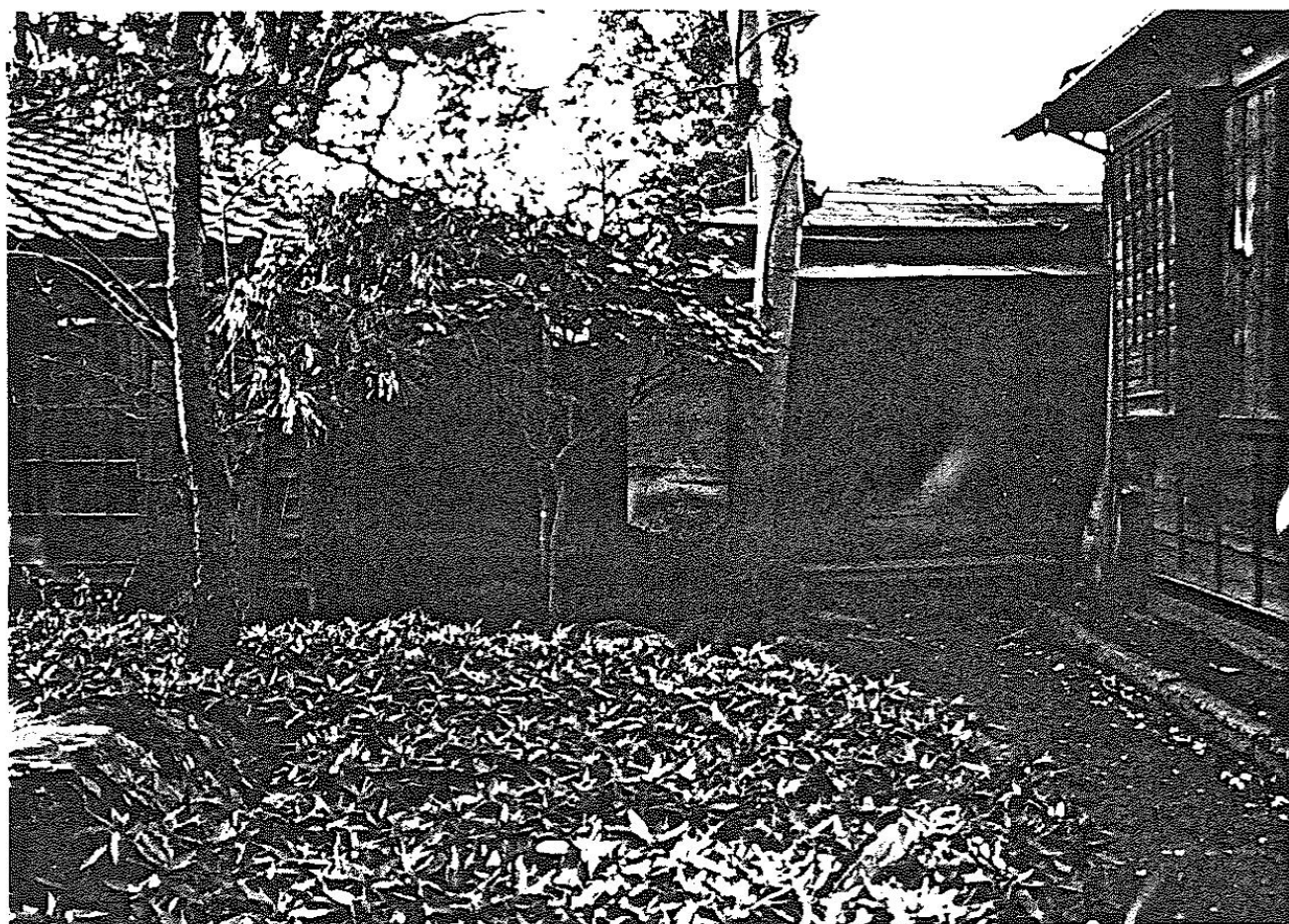
檼の窓



積翠閣
南側外觀



西側外觀

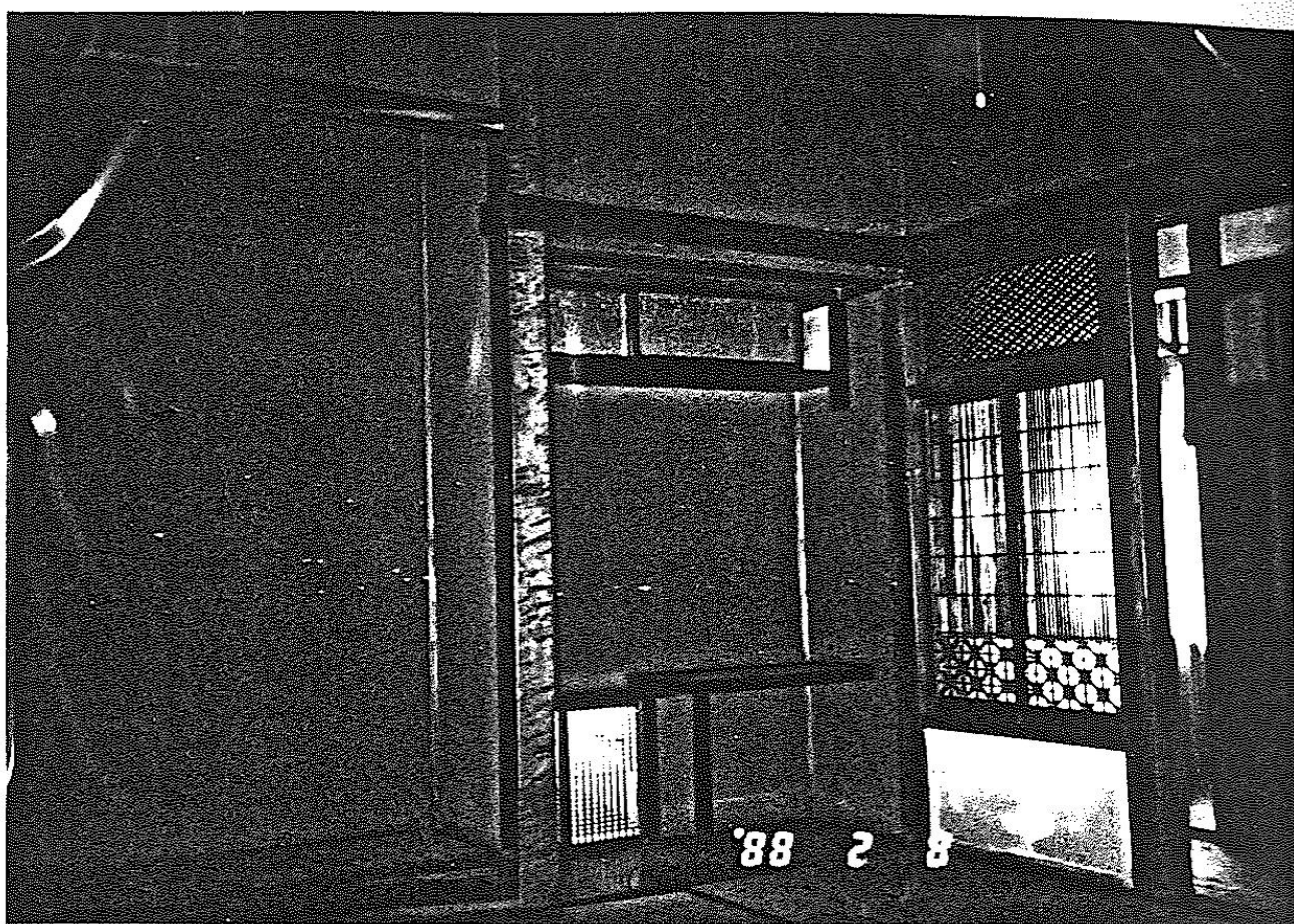


前室 東側外觀

積翠閣

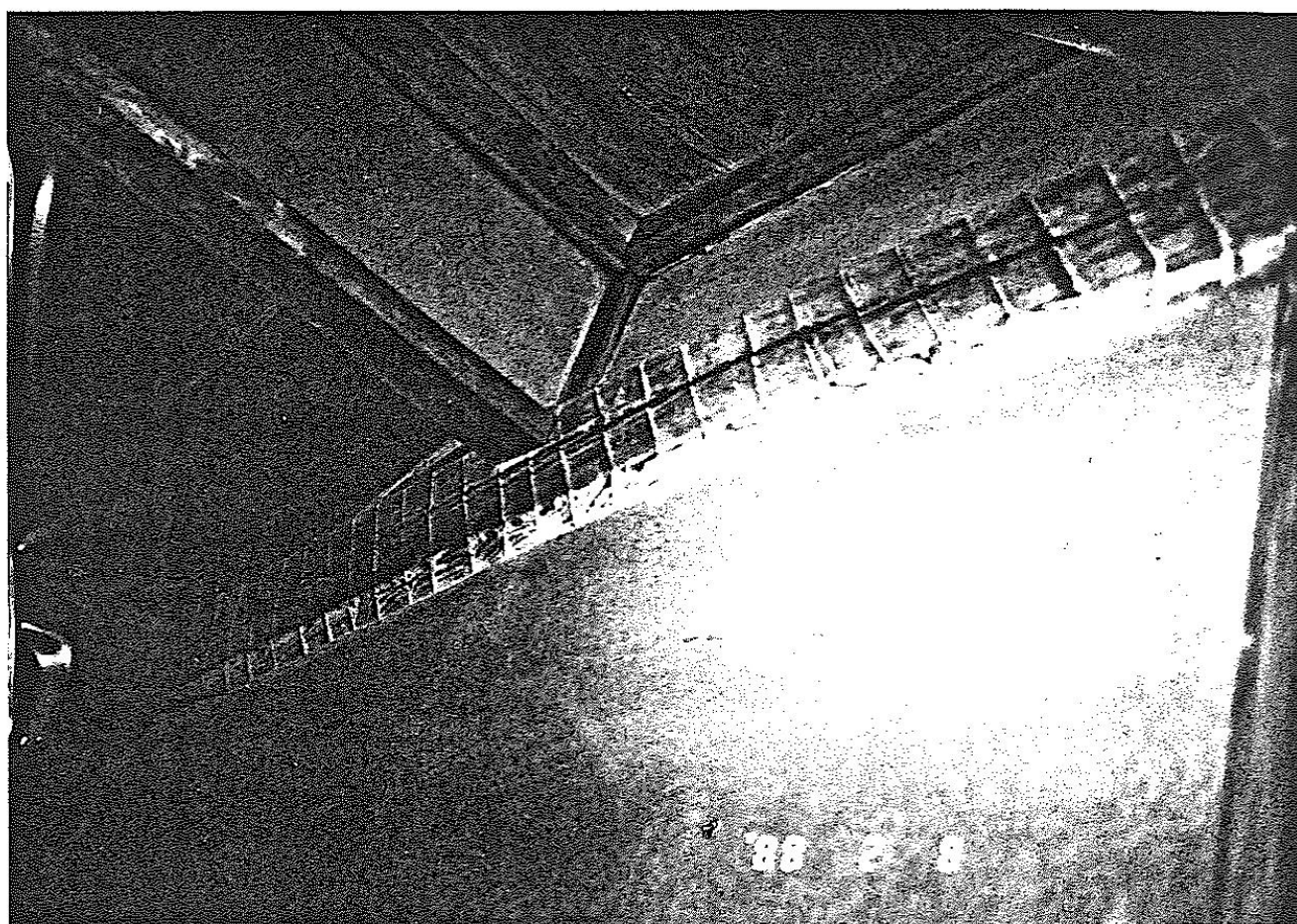
主室8帖の

床の間



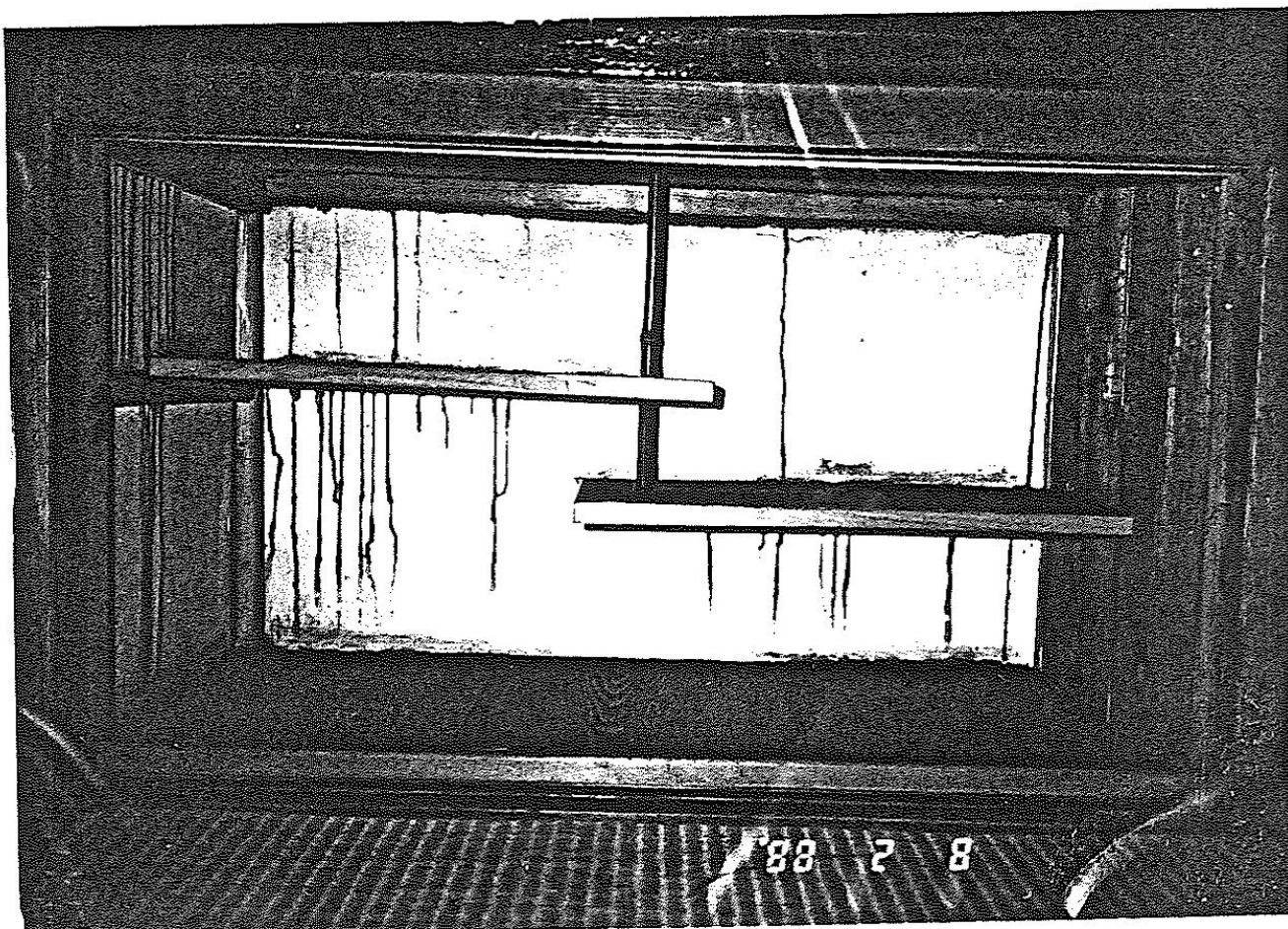
広縁～和室5帖

仕粧梁(平条仕土)



和室5帖東側

地袋 簾、棚





積翠閣
床組



階段部分



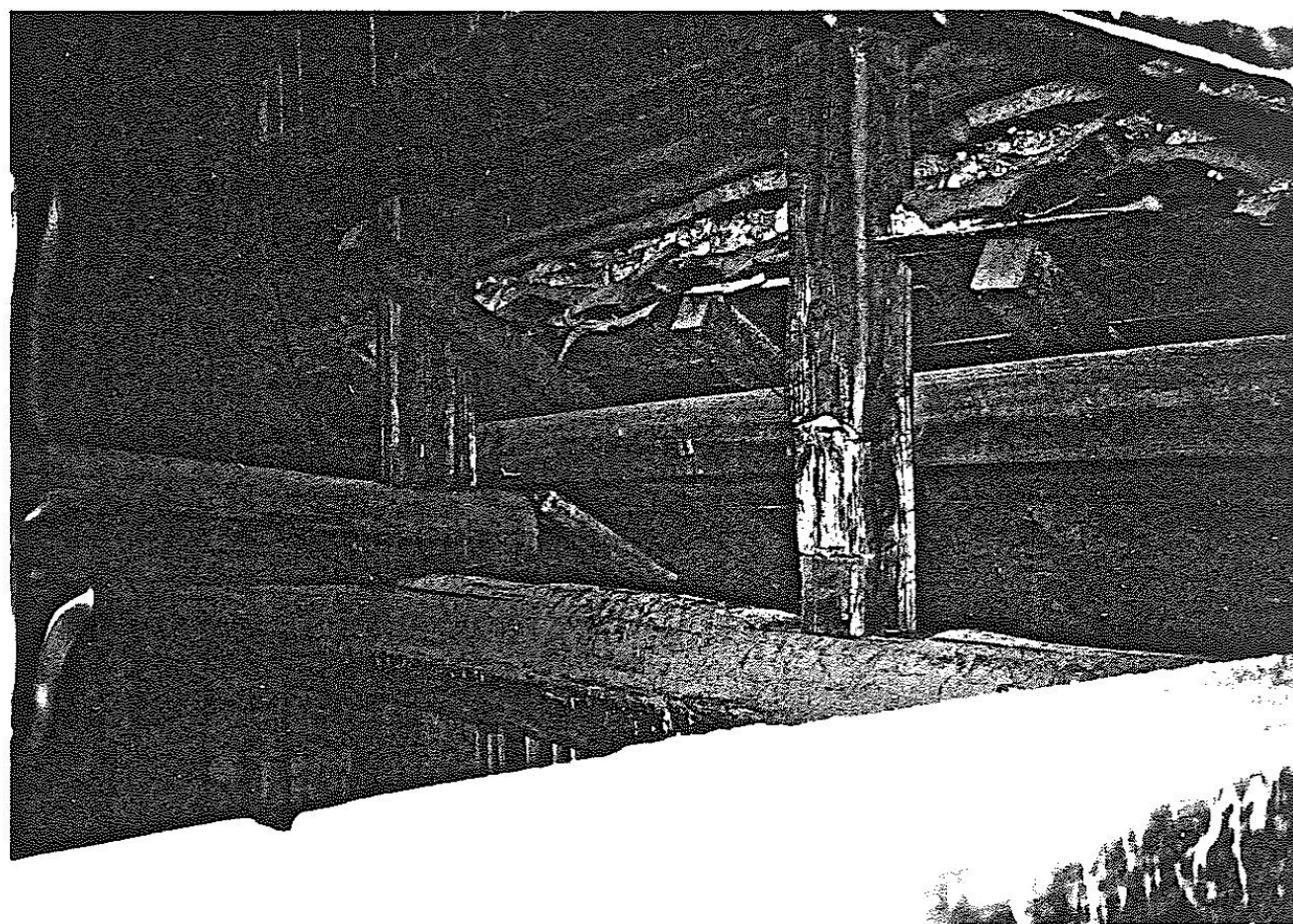
前室床組

積翠閣

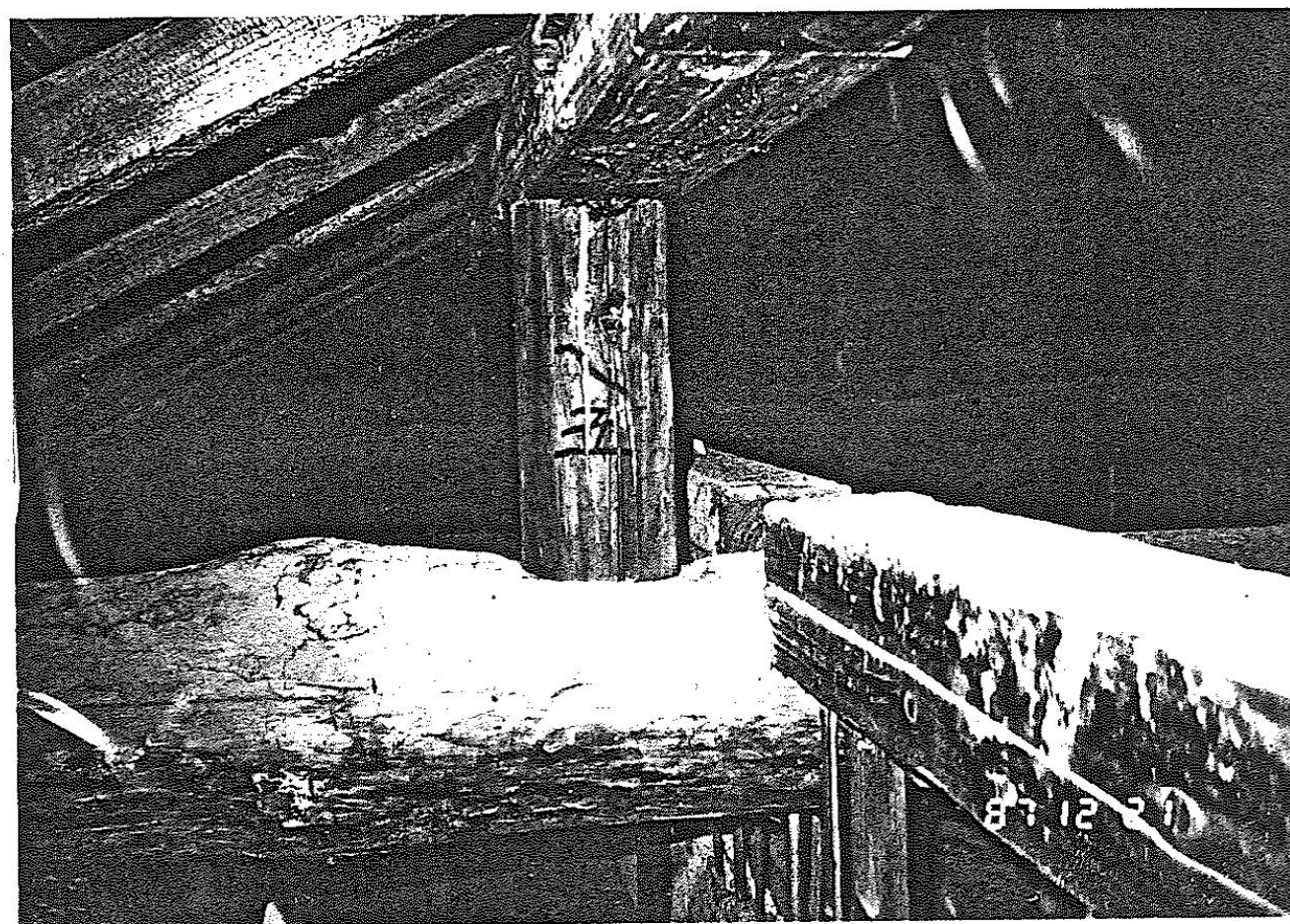
小屋組



小屋組
(妻部)



小屋組
(廊下間仕切)

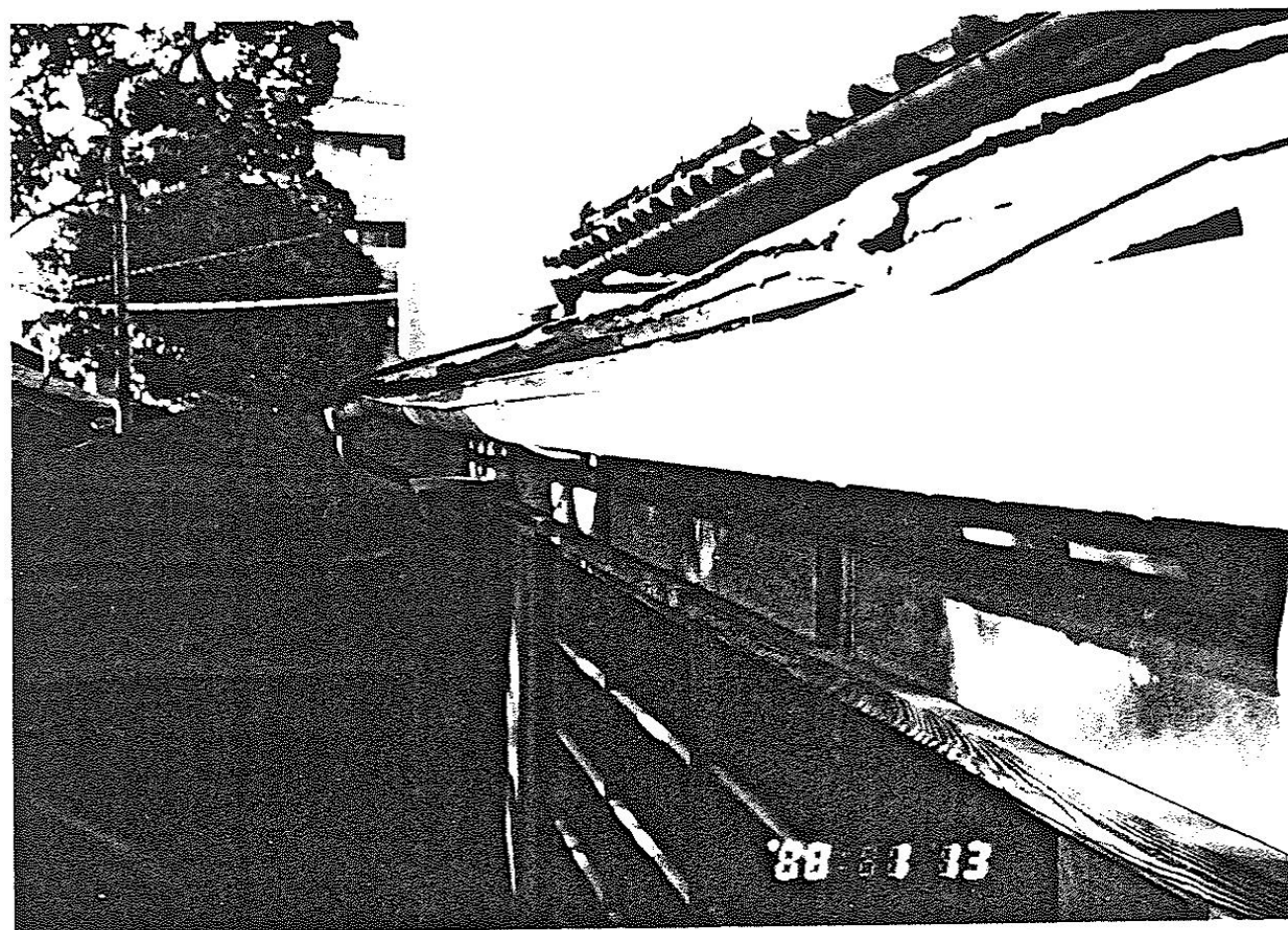


積翠閣

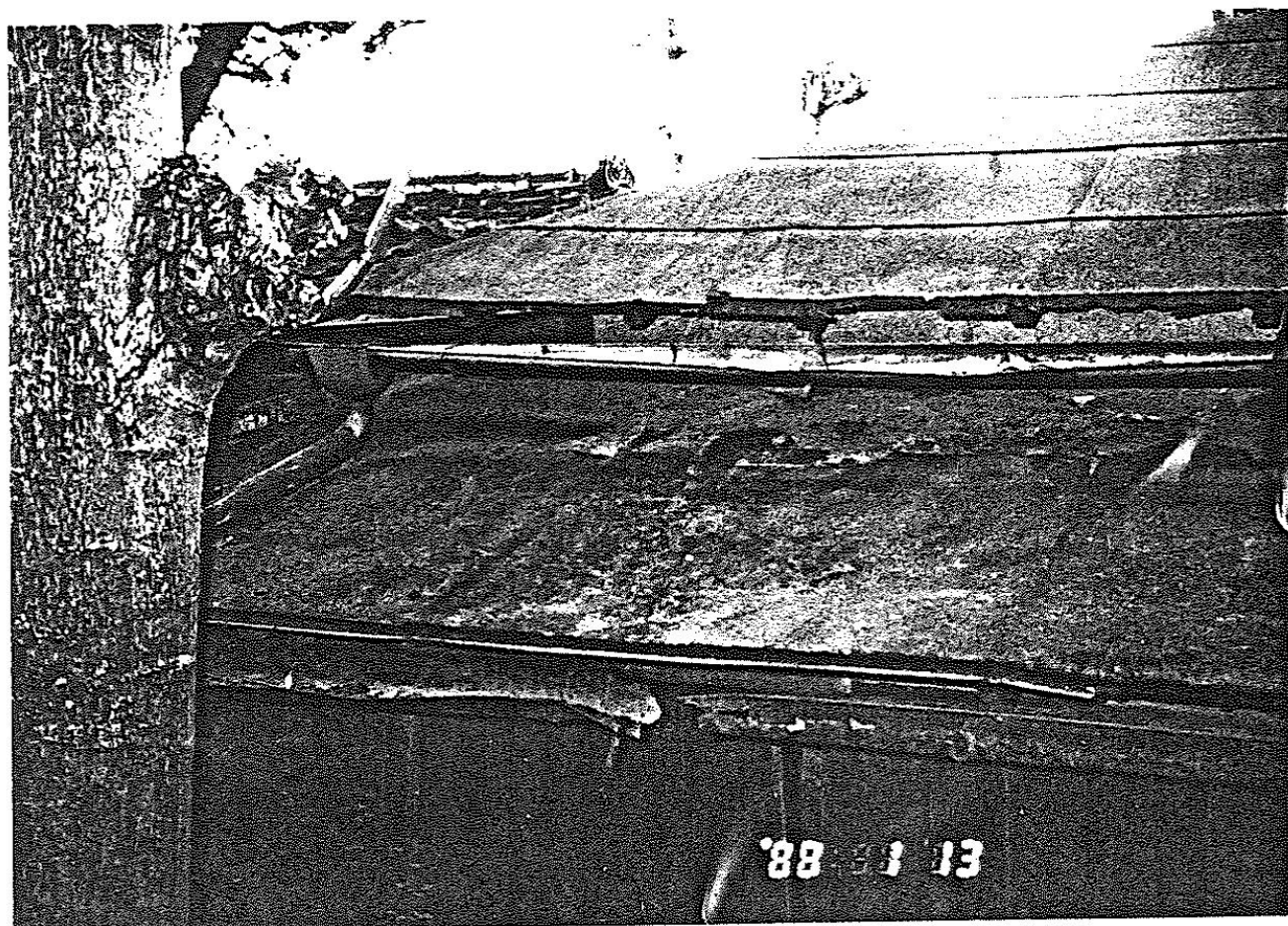
日本瓦の傷み
シックイ壁亀裂



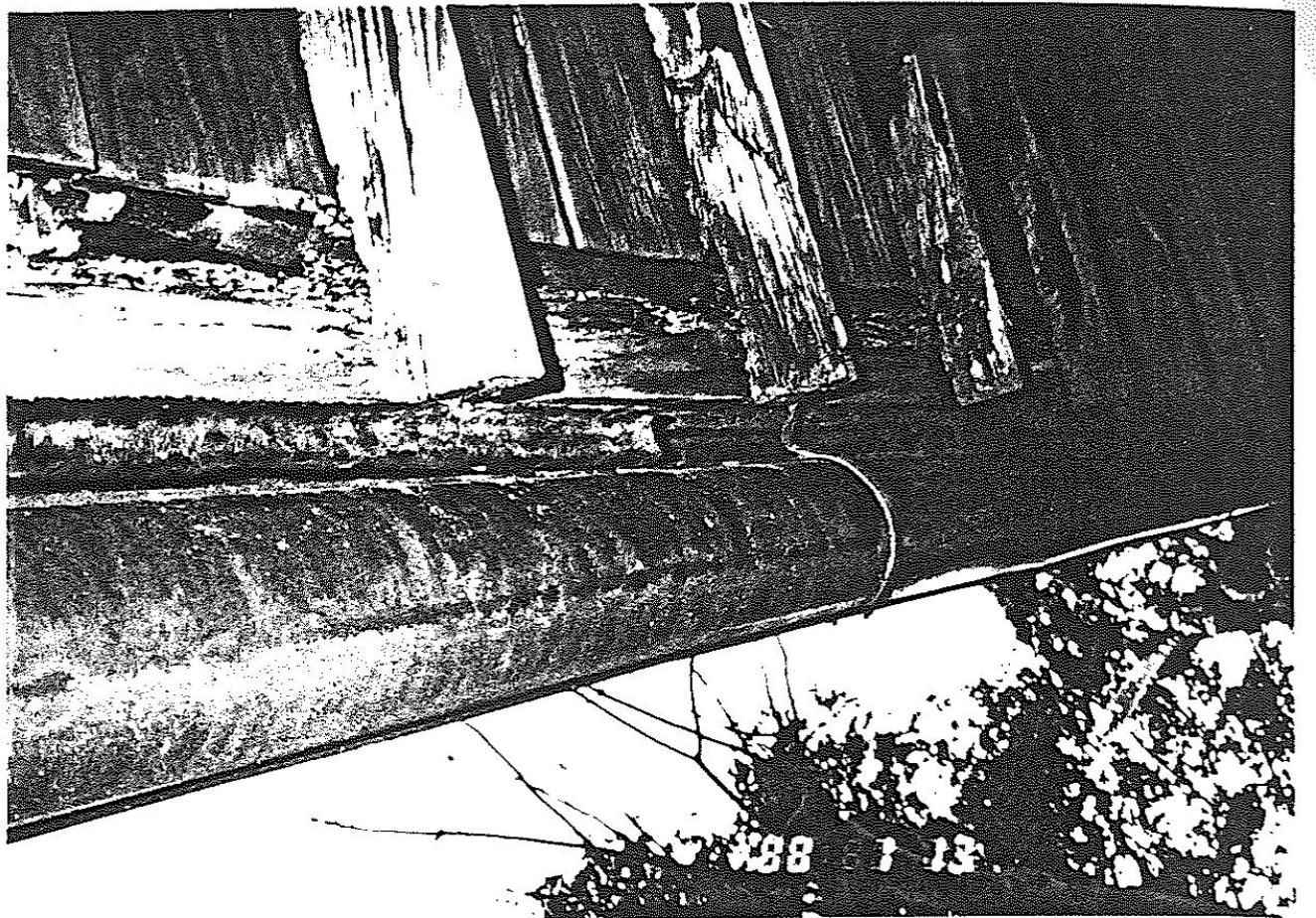
下屋 軒先の傷み



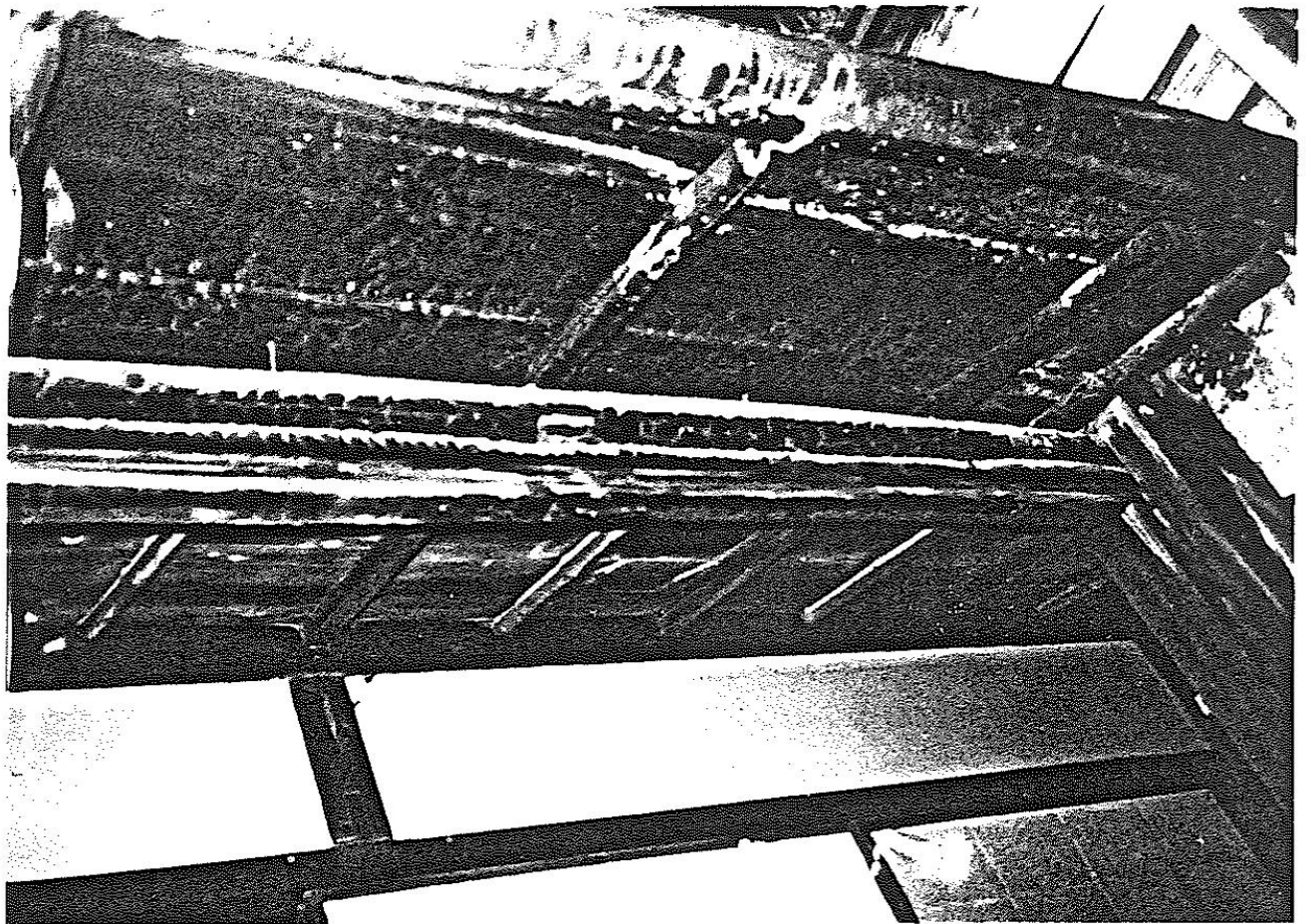
前室 軒先部の
傷み
雨樋 破損



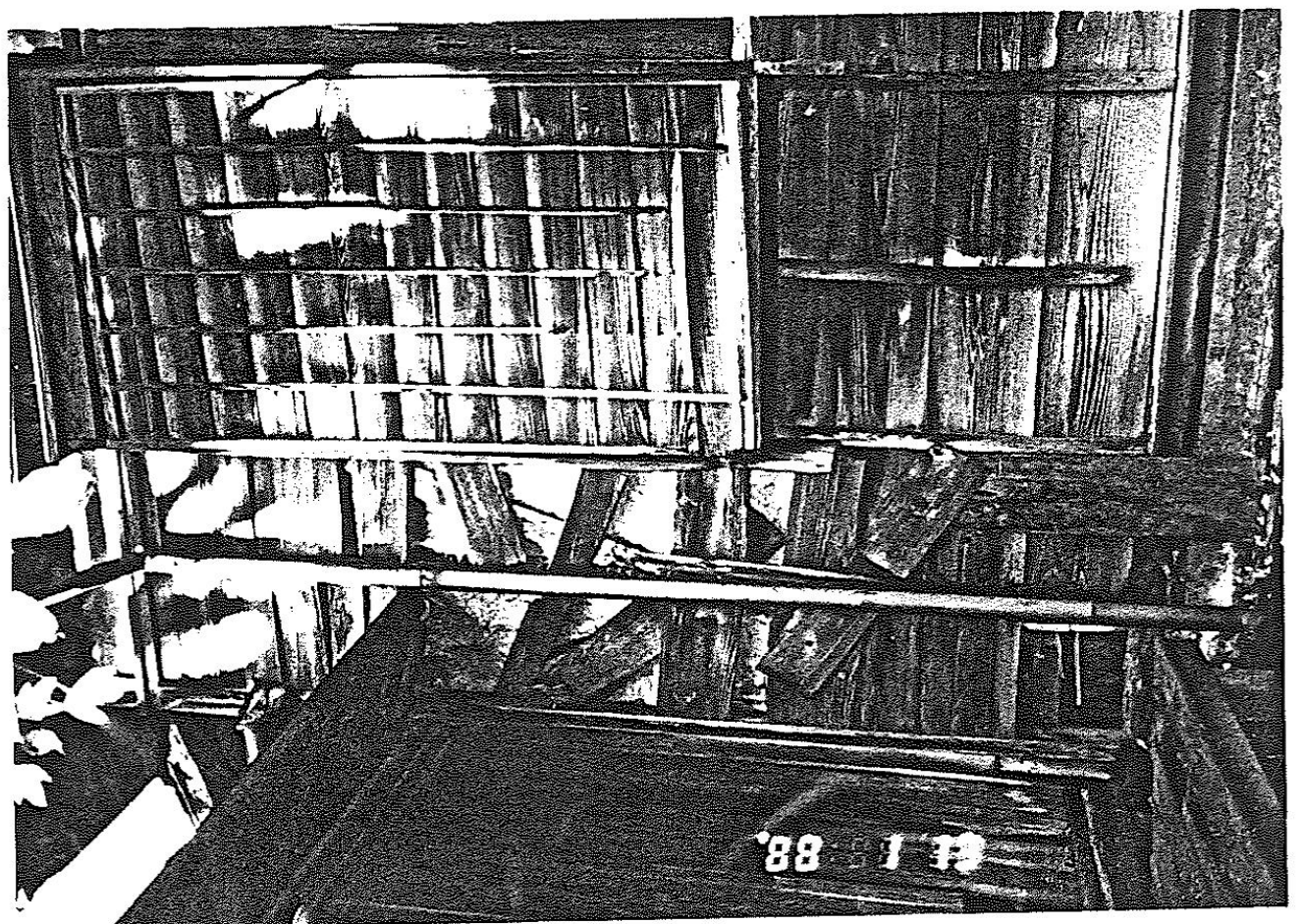
積翠閣
下屋部分
野地板 破損



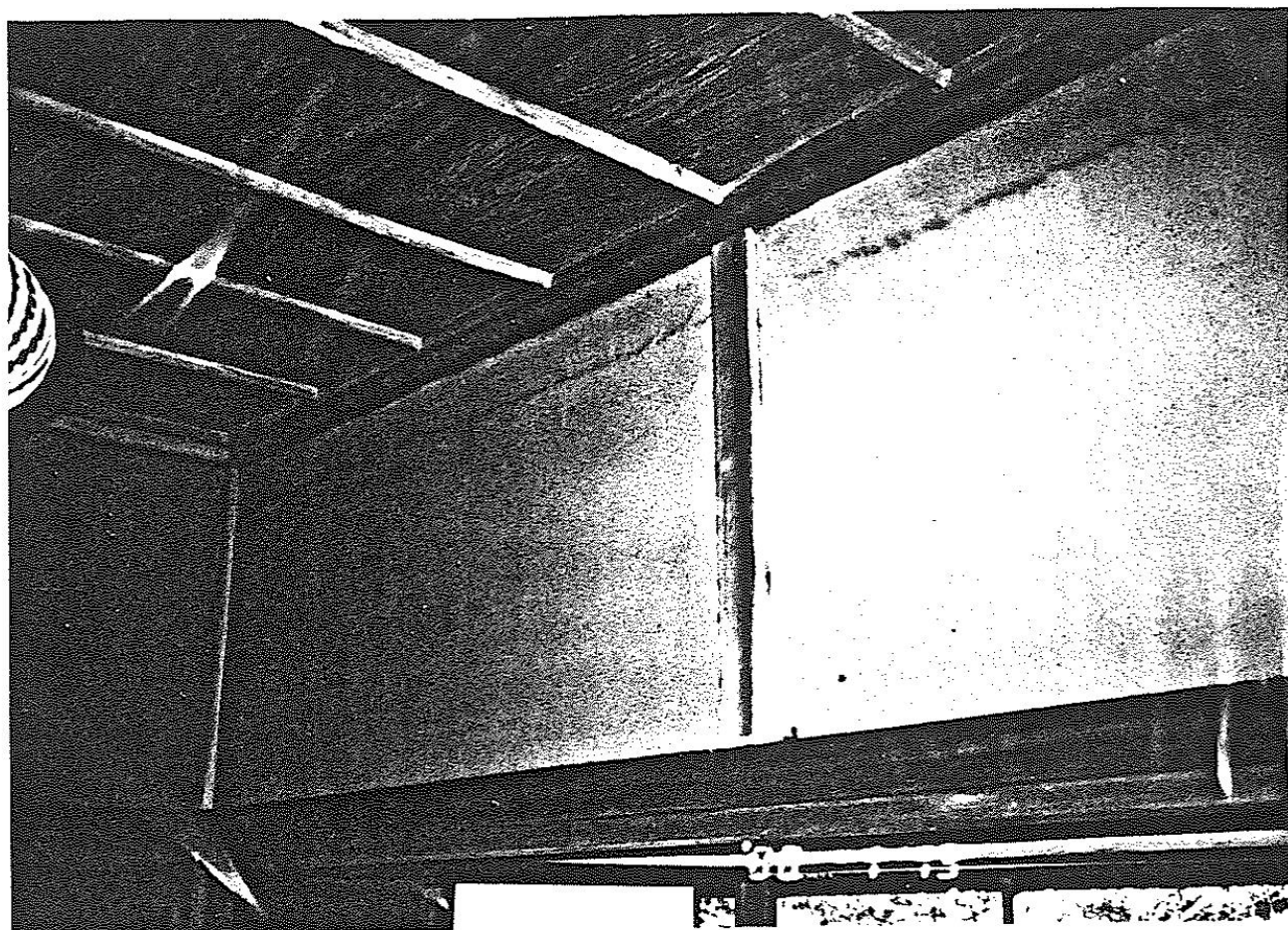
前室軒裏 焼焦
跡



外壁 下見板
破損及び
傾き



積翠閣
壁龜裂



壁落



前室廊下
補修
腰壁龜裂



